

東京立正女子短期大学紀要

第 18・19 号

目 次

バイリンガル秘書教育における ビジネス・イングリッシュの体系的指導プログラム……………	井 口 美登利 (1)
日蓮聖人の「如説修行抄」英訳……………	堀 教 通 (27)
英文読解における「複数形」の識別 —— 日本語との対比に基づいて —— ……………	田 島 富美江 (41)
青年期女子における性役割構造の分析 I ……………	山 室 宮 子 (64)
パターン・プラクティスの効果に関する一考察 —— 『英語授業課程の改善』を中心として —— ……………	中 岡 典 子 (82)
アフリカーンス語の南ア英語へ与えた影響 ……………	佐々木 卓 爾 (92)
認識的孤立：古典的問題の Pragmatic な解決 ……………	出 世 直 衛 (111)
法律発案権に関する一考察 ……………	福 岡 英 明 (128)
江戸時代後期の民衆信仰史料 (三) —— 石裂山荒井家所蔵文書 (二) —— ……………	紙 谷 威 廣 (142)
編集後記……………	(141)

1 9 9 1

東京立正女子短期大学

バイリンガル秘書教育における
ビジネス・イングリッシュの体系的指導プログラム
Systematic Teaching Program of Business English
for Bilingual Secretary Today

井 口 美登利

前稿：

1 Business Letter

- 1 - 1 Parts of Business Letter
- 1 - 1 - 1 Major Parts
- 1 - 1 - 1 - 1 Letterhead
- 1 - 1 - 1 - 2 Date Line
- 1 - 1 - 1 - 3 Inside Address
- 1 - 1 - 1 - 4 Salutation
- 1 - 1 - 1 - 5 Letter Body
- 1 - 1 - 1 - 6 Complimentary Close
- 1 - 1 - 1 - 7 Typed Name/ Office Title
- 1 - 1 - 1 - 8 Identification Data

2 Forms of Punctuation

- 2 - 1 Forms of Punctuation
- 2 - 1 - 1 Standard Punctuation
- 2 - 1 - 2 Open Punctuation
- 2 - 1 - 3 Close Punctuation
- 2 - 2 Addressing Envelope
- 2 - 3 Application Form/ Personal Data

本稿：

3 Business Writing

- 3 - 1 Simplicity/ Compactness
- 3 - 2 Consistency of Style
- 3 - 2 - 1 Formal Style
- 3 - 2 - 2 Colloquial Style
- 3 - 2 - 3 Informal Style
- 3 - 3 Parallel Construction
- 3 - 4 Specific Words/ Diction
- 3 - 5 Positive/ Negative and Active/ Passive
- 3 - 6 Organization
- 3 - 6 - 1 Business Report
- 3 - 6 - 1 - 1 One-page/ Short Report
- 3 - 6 - 1 - 2 Longer Report
- 3 - 6 - 2 Business Letter

— to be continued —

3 Business Writing

“Writing”一般について述べた諸家の短文の中で、今もって忘れ得ないのは、Robert Louis Stevenson の指摘である：

The difficulty is not to write,
but to write what you mean,
not to affect your reader,
but to affect him precisely as you wish.

谷崎潤一郎は、その著“文章読本”で実用的な文章—Business Writing に触れ、次のように示している：

私は、文章に実用的と芸術的との区別はないと思います。文章の要は何かといえ、自分の心のなかにあること、自分の言いたいと思うことを、出来るだけその通りに、かつ明瞭に伝えることにあるのでありまして、手紙を書くにも、小説を書くにも、別段それ以外の書きようはありません。昔は「華を去り実に就く」のが文章の本旨だとされたことがあります、それはどう言うことかといえ、余計な飾り気を除いて実際に必要な言葉だけで書く、ということであります。そうしてみれば、最も実用的なものが、最もすぐれた文章であります。

流石に、平明達意、よく言わんとするところが理解できる。

星の数ほどあるという Communication の Definition のなかで、最も簡潔な定義として気に入っているものは：

Understanding and being understood.

である。とりわけ、Business Communication の場合においては、まことに適切な定義といえよう。

Business Writing に望まれるものは、まずなによりも、Reader が容易に、

そして正確に理解できるような、無駄のない文章を書くことであり、これは Letter, Memo, Report その他 Business Communication にかかわるすべての Written Media について共通の要件である。

現実には遺憾ながら、結果としてなんとか通用しているのではないかといったところで、日本人の書いた英語文書の大半は、Reading (あるいは Deciphering) および Interpreting のために Reader に多くの負担をかけ、再度の照会と確認を必要とするような低質のもので占められている。齒に衣着せぬアメリカ人の直言として、次のような批判のあることを心すべきであろう：

“...too wordy; too many unnecessary words; lots of outworn, stereotype, and vague expressions; poor logic; and, mixed-up level of styles...”

文体さらには話法の一貫性については、本来、英作文教育の早い時期において明確に指導すべき事柄であろうが、Business Writing においても、極めて重要な心構えのひとつとして、改めて徹底させねばなるまい。例えば、ちゃんとした大人の書いた日本語の文書に口語・文語・古語・俗語さらには漢文脈・和文脈とり混せて、“ザマス”ことばと“候文”が雑然と同居していたのでは、物笑いを招くこと必至である。

詩歌・文芸の作品となれば、話は別である。泉鏡花のように、変調・破格の文体を以て世に著われた例は尠しとしない。

Reid は Effective business letter には次の 8 要素が含まれていると述べた¹⁾

Is it clear ?

Is it concise ?

Is it forceful ?

1) James M. Reid, Jr., and Robert M. Wedlinger, Effective Letters: A Program for Self-instruction (New York: McGraw-Hill Book Company, 1964), p. 29.

Is it well organized ?

Is it natural ?

Is it friendly ?

Is it courteous ?

Is it personal ?

もとよりこれは英語を母国語とする学生に与えた指針であるが、外国語として英語を修得する学生にとっても、大いに有用であり、Business Writing 一般についてもあてはまる Check List として活用できると思う。

3 - 1 Simplicity/ Compactness

“簡にして要を得る”とは、洋の東西を問わず、Good Writing の基本である。そのためにはまず、複雑な構文と技巧的な修辭法を伴なうことの多い Formal な Style を避け、平易で日常的な Words を用いた Informal な Style に終始すべきである。この Style Level については次項に述べる。

Business Writing においては、広い Vocabulary から選んだ格調の高い“Learned Words”を用いるよりも、努めて、自然で日常的な、短く簡単な Words を適切に用いるべきであるというのが、今日の大勢である。外国語としての英語で実用文を綴らねばならぬ日本の学生にとっては、まことに有難いことである。まだ Formal Style が Business Writing の主流であった頃に成立した古風な常用句は遠ざけることになっている。ひびきは莊重であっても、Stereotype のものが多く、その意味するところが General で Vague な場合がほとんどだからである。

Words の次元では、以下の実例を示せば理解させることは容易であり、かえて学生に一種の安心感を与えることもできよう。左側の Wordy な表現が、右側ではずっと Compact になっている。

Poor

Approximately 25 percent of the members indicated their acquiescence.

The pedagogue attempted to elucidate the idea.

Our arduous assignment has been accomplished.

Modifications have been effected in the itinerary.

古風な表現，例えば“Attached please find...”或は“Please find enclosed...”の類は避ける。我が国の実用文でいおうなら，さしずめ，“爰許同封致しましたれば御覽被下度…”といった Formal な文体によるものだからである。

同様に，不要な語を除き，表現を平明にした例として次の例を揚げればよい。

Better

About 25 percent of the members agreed.

The teacher tried to explain the idea.

Our hard job has been done.

Travel plans have been changed.

Wordy

as of this date

at the present time

due to the fact that

for a period of a week

for the purpose of

your check in the amount of \$250

Natural and Compact

now

now

since or because

for a week

to

your check for \$250

your \$250 check

Formal で Wordy な表現で記された長文を刈り込んで、Compact な短文に Rewrite した例を挙げでおこう。いささか極端な例かもしれないが、これは決して単なる“要約”とは別種のものであろうからである。²⁾

Wordy

Assuming that you are in search of valuable information that may increase your earning capacity by a more complete knowledge of any subject in which you may be interested, we desire to state most emphatically that your wages increase with your intelligence.

Compact

You earn more as you learn more.

前者が実に 40 Words を費やしているのに対し、後者は僅か 7 Words; しかも Reader に対する Appeal は、疑いもなく後者のほうが優れている。Communication の相手に手間ひまをかけることなく、率直に趣旨を伝えている。余計なことをくどくどと述べぬ——これは礼儀作法にも叶っているし、押し付けでない好意と親しみを感じさせている。

Wordy な Business Letter を Rewrite して Compact なものにした例を見れば、Compactness あるいは Conciseness の利点は、よりよく理解できるはずである。³⁾

2) Robert R. Aurner, Effective Business English (Cincinnati: South-Western Publishing Company, 1949), p. 223.

3) Ibid., p. 224.

The Original Letter (246 Words)

Dear Sir:

We have your kind favor of the 7th inst., and wish to state that we have very carefully gone over its contents.

In reply to your statement that you received a consignment of mine NX-211 Whirlwind Aviation Motors without the latest style valves, wish to state that this is no sense a shortage. You must state that you cannot understand why same were not packed with the engines in our shipping department. Beg to advise that the latest style valves do not come as standard equipment. You probably did not know that these are special and not covered in the original price of the motors as quoted to you in our letter of April 19th.

In other words. you ought to specify more carefully on your orders that you want the latest style valves on your orders, in any case where you want us to supply you with this extra equipment. If you will use a little extra care in this direction, we shall always do as you request. Of course you must remember that we will have to add an extra charge of \$19.00 each for every job. In addition, if you want these for the jobs you just ordered, you will have to send us another order.

Trusting our explanation as outlined above is entirely satisfactory, and awaiting your further favors which will always receive the best of service and attention, we remain.

Yours truly,

The Same Letter Revised (86 Words)

Dear Mr. Ford:

Apparently our catalog was not available at the time you ordered the nine NX-211 Whirlwind Motors mentioned in your letter of May 7.

On page 26 of the enclosed catalog will be found the latest style cam-and-roller valves, specified as extra equipment (\$19 each, net). These valve should not, of course, be included at the unusually low price you obtained.

May we send you the valves? Simply telegraph us collect, and we will rush nine sets by prepaid express, billing them net.

Yours for prompt service,

後者は 3 Paragraphs の無駄のない構成となっており、いわゆる 3-Step Letter, すなわち

- (1) Purpose (of the Letter)
- (2) Message (to be communicated)
- (3) Action Closing

の順を踏んでいることがわかる。

もとより、Writing の当初から、こうした発想で構成すれば、冗長で散漫な話法と表現は避けられたはずである。

Letter Parts としての“Salutation”も Formal で Impersonal な“Dear Sir:”に代えて、Personal で Friendly な“Dear Mr. Ford:”に改めてあるが、たとえそれが初めて返事を書く相手であったとしても、“毎度ありがとうございます”と切り出してよいこと、決して失礼にはならない。そして、“Complimentary Closing”においても、Impersonal な“Yours truly,”ではなく、“Yours for prompt service,”という、この Letter の状況に合わせた“変り形”のものをを用いて、Friendliness と Readiness to serve を示しているのである。

高度情報化時代にあつては、読むための時間と書くための時間は、できるだけ節約しなければならない。Telex, Telefax といった Office Automation が進めば進むほど、Business Writing における Simplicity, Compactness への必要度は高いことを知るべきであり、学生に対してもこの点を徹底して指導しなければならない。

3-2 Consistency of Style

英語の文体 Style には、(1) Formal, (2) Informal, および (3) Colloquial あるいは Conversational の 3 種類がある。同一の文書のなかで異種の文体を混用することは、原則として避けるべきである。Business Writing においては、Informal な Style で一貫するように指導し、いわゆる Confusion of Stylistic Levels に陥らせてはならない。そのためには、3 種の Style の特質とその一般的な用途について、実例を挙げて解説し、その相違を認識させることから出発する。

こうした Writing に関する極めて基本的な知識が学生には欠けており、わが国における英語教育の盲点のひとつである。そのために、Confused Stylistic Levels の文書を平気で書くような仕儀となるのは、まことに恥ずかしいことではないか？

3-2-1 Formal Style

Formal な Style は、本来、書き言葉のためのものであるが、時として Serious あるいは Ceremonial な性格の Speech にも用いられる。いわば、日本語における漢文脈の文語表現に近い。その特徴を要約すれば次の通りである：

1. 複式構文をもつ長い Sentence から成り、多くの Rhetorical devices を含む技巧的な修辭法を用いる。
2. 広い Vocabulary と多くの“Learned” words を用いる。
3. 一般に略語、短縮語を用いず、関係代名詞を省略するような口語的表現は避ける。
4. 伝統的・保守的な文法の規則を優先する。
5. 非人称的表現 Impersonal tone を主とし、主題および読者に対し一定の距離をたもつ Dignified attitude を取る。

従ってその用途は、主として次の場合に限られる：

1. 専門分野の読者を対象とした学術的著書および論文。
2. 教養ある高級な読者を対象とした、いわゆる“belles-lettres”な文芸作品——小説、随筆、詩歌の類。
3. 特定の聴衆を対象とする Serious あるいは Ceremonial な Address.

Formal な Style が Business Writing とは、原則として、無縁のものであることは、以上の特徴から明らかであることを認識させ、理解させる。学生に実例を示す場合には、“Learned” words と Popular words との対比を挙げれば充分であろう：

<u>Popular</u>	<u>Learned</u>
agree	concur
break	fracture
clear	lucid
end	terminate
prove	verify
queer	eccentric
secret	cryptic, esoteric
truth	veracity

Business Writing では、こうした Learned words を駆使する必要はないのだから、とりわけ、外国語として英語を学ぶ学生には、“ありがたい” こととして安心させる方が良くかもしれない。

続いて、同じ内容をそれぞれ Formal Style と Informal Style で書き分けた Paragraph を与えて、その相違を確認させる：

Formal

There are, indeed, other objects of desire that it attained leave nothing but restlessness and dissatisfaction behind them. These are the objects pursued by fools. That such objects ever attract us is a proof of the disorganization of our nature, which drives us in contrary directions and is at war with itself. If we had attained anything like steadiness of thought or fixity of character, if we knew ourselves, we should know also our inalienable satisfactions.

Informal

We all have fool desires. We want things which do not satisfy us when we get them. The fact that we want these things is evidence of our inconsistent nature. We are subject to conflicting desires and want to go in opposite directions at the same time. If we had a clearer understanding of our own needs and purposes, we would know what course was best for us.⁴⁾

3-2-2 Colloquial Style

Colloquial Style は、本来、話し言葉のためのものであり、その特徴を要約すれば次の通りである：

1. 通常, Subject→Verb→Object の順を取る単純な構文の短い Sentence から成り, Rhetorical device を用いることは少ない。
2. 短縮語, 略語, 省略語 (例えば advertisement を ad, gentlemen を gent のように語尾省略した Clipped words) を多用する。意味が通じる場合には関係代名詞など省略する傾向がある。

4) James M. McCrimmon, Writing with a Purpose, Third Ed. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1963), p. 140.

3. “Learned” words を用いることは少なく，Idiom による表現を多用し，Slang も加わる。

従ってその用途は，およそ次の範囲である：

1. 一般読者を対象とした軽い読み物。
2. 小説・戯曲などにおける“会話”あるいは“台詞”の部分。
3. 親しい相手に宛た手紙，いわゆる Informal Personal Letter.
4. 特に改まった場合を除く，日常の会話全般。

これまた Business Writing とは遠いところにあることを知らせる。

3-2-3 Informal Style

Informal Style は，Formal Style と Colloquial Style との中間にあり，前者の下限および後者の上限と重なり合う。従ってその用途も広く，およそ次の範囲にまたがっている：

1. 一般読者を対象とした学術書および論文。
2. 小説，随筆，詩歌；新聞，雑誌の記事，論説の大部分。
3. Business および College における Writing — Letter, Memo, Report, Thesis など — 全般。
4. 一般の聴衆を対象とする Speech.

Formal Style, Informal Style との比較・対照を通じて，Business Writing は Informal Style を用いるべきことを十分に認識させるとともに，Informal という“語感”から来る誤解を取り除いておくことが必要であろう。

Informal Style の Cover する範囲は最も広く，新聞の社説から文芸誌の書評に及ぶと云う事実を，実例をもって示し，十分に理解させることが効果的である。

Business Writing は一貫して Informal Style で書き，“引用”などの特別な場合の外は異種の文体を混えてはならぬことを指導する。

3 - 3 Parallel Construction

文体の統一あるいは一貫性 Consistency of Stylistic Level が、大局的なあるいは戦略的な考察であるとすれば、局地的あるいは戦術的な配慮として指導すべき事柄のひとつに、Parallel Construction の Principle がある。

次に示したのは、こうした配慮を欠いた表現の一例である：

The new program has three objectives:

(1) to improve morale, (2) encouraging higher standards, and (3) better selection of employees.

一見して気付くように、(1) は不定法 (2) は動名詞 (3) は抽象名詞で表現されており、まったく雑然とした印象を与えている。こうした異種構文の混在 Unparalleled Construction による表現は、少なくとも Business Writing の場では避けるべきことであり、これは決して“変化に富んだ個性的な表現”とはならぬのである。

まずは学生に、Parallel Construction に則った Rewriting を課したあとに、次のような Solution を示す：

The new program has three objectives:

(1) to raise morale, (2) to encourage higher standards, and (3) to improve the employee selection process.

The new program has three objectives:

(1) improving morale, (2) encouraging higher standards, and (3) selecting better employees.

The new program has objectives for improvement in three areas:

(1) morale, (2) standards, and (3) employee selection.

The aim of the new program are to (1) improve morale, (2) encourage higher standards, and (3) select better employees.

Rewriting といっても“Active Voice を Passive Voice に改めよ”といった機械的な単純作業ではないことを認識すれば、学生の努力も期待できよう。理解度と能力を評価するには、たとえば次の課題を作業させ、提出させるとよい。

Improve the following sentence: watch for lack of parallel construction.

May we please have the following information: (1) cost of installation. (2) approximately how long the installation will require. (3) upkeep, and (4) include also any information about safety factors.

—Source: Wayne Murlin Baty, Business Communication & Typewriting (Belmont, CA: Wadsworth, 1962). pp.46 — 48.

3 — 4 Specific Words/ Diction

Specific の対極にあるのは General である。Formal style な Writing に多用される Learned words には、その意味するところが General で Stereotype のものが尠くない。

“Wordy から Compact へ”の項でも述べたように、Prompt response to this matter would be most appreciated. というのは、要するに早く返事をくれとの意であるが、Worn-out expression で具体性に乏しい。むしろ、Please call us by Tuesday afternoon. と書いた方が、平明達意の趣旨に叶っている。

もとより、Specific と General の差は相対的なものである。銀河系宇宙——太陽系——地球——陸地——アジア州——日本国——関東地方——東京都。．．．ならべるとき、日本国はアジア州にたいしては Specific であるが、関東地方にたいしては General となる。

Business Writing においては、出来るだけ Specific な Word を用いて、Sender の考えていること、伝えたいことが、まちがいなく Receiver に受け取れるよ

うな Clear な表現を心掛けねばならない。こっちでは分かっているからといっ
ても、相手にはそのまま理解できかねることが多いものである。

General と Specific の区別を認識させるには次のような図式を提示するのも
有効であろう。

<u>Very General</u>	<u>Less General</u>	<u>More Specific</u>	<u>Quite Specific</u>
athlete	baseball player	Lions infielder	(His fullname)
college student	sophomore	member of type- writing club	(His fullname)
vegetation	tree	cherry tree	the cheery tree in my garden
criminal	thief	pickpocket	the man who stole my wallet

General と Specific の別は、単に Word だけにあるのではない。当然に Dic-
tion の場合にも両者の別があり Business Writing においては、Reader's minded
な立場から Specific Diction による表現を活用して、Clear understanding を容
易にし、不測の Discommunication を招かぬような配慮の大切であることを指
導する。Diction における General と Specific の区別を理解させるには、例え
ば次の図式を示せばよからう。

<u>General</u>	<u>Specific</u>
He is an accomplished athlete.	He is a top-flight golfer.
He drives an old car.	He drives a 1965 Crown.
The girl has a serious disease.	The girl has polio.
I have been reading a Shakespearean play.	I have been reading Hamlet.
Her grades at midsemester were unsatisfactory.	She received two failing grades and a D at midsemester.

故あって、詳細な事情の説明を回避したい場合に限り、

Due to circumstances beyond our control. .

といった慣用的な表現を、意図的に用いることはあり得よう。これは Business Writing における Tactic の問題に属する。

3 - 5 Positive/ Negative and Active/ Passive

効果的な Business Writing のためには、できるだけ Negative な表現を避け、Positive な Language を用いるように心掛けるべきことを指導する。これは Business における Human Relation を円滑に保ち、Reader に Friendly Impression を与えるための、いわば Psychological な配慮であることを実例に即して指導する。

Negative

You cannot see him until 3 p.m.

We cannot ship the merchandise
untill payment is received.

Positive

You can see him after 3 p.m.

He is willing to see you after 3 p.m.

We will ship the merchandise just
as as soon as payment is received.

Negative な内容を述べながら、Positive な調子を保つためには Subjunctive Mood による表現を用いるとよい。

Negative

It is impossible for us to repair the
damaged equipment.

Positive

We would repair the equipment if
it were possible.

The printer failed to function be-
cause instructions were not
followed.

The printer would have functioned
if instructions had been followed.

一般に Business Writing においては、Positive な内容の Message を伝達するときには、“ひと”あるいは人称代名詞を主語とする Active Voice を用いて

強調する。これにたいして、Negative な内容の Message を伝達するときには、“もの”を主語とする Passive Voice を用いることが効果的である。

Positive Message

Negative Message

You have typed the report perfectly. Five errors were made in this page.

これをそれぞれ逆に、

Positive Message

Negative Message

The report has been typed perfectly. You have made five errors in this page.

としたのでは、Human Relations の見地、或は Psychological な配慮から好ましくあるまい。Active Voice による表現と Passive Voice によるそれとは決して等価ではないことを指導する要がある。続いて、同じ内容を、それぞれ、Active Voice と Passive Voice で表現した文例を示し、そのいずれが適切であるかを選択させる演習を行なう。

Active Voice

Passive Voice

You sent your order too late to take advantage of the sales prices.

Your order was received three days after the price change.

You made an accurate estimate of supply needs for this year.

The estimate of supply needs for this year was accurate.

You underestimated this year's supply needs by \$5,000.

The estimate of supply needs for this year was \$5,000 too low.

終りに、次の Sentences を Rewrite させて、学生の理解度と应用能力を判定する。

You must have misunderstood instruction.

We are delaying shipment until we hear from you.

You delived this report to the wrong person; it goes to the vice president of personnel affairs.

You will have to wait until three o'clock before you can see the manager.

3 - 6 Organization

長文の Report や Thesis を No Organization で書くことは、まず無いであろう。必ずや、Introduction, Chapter 1. Chapter 2. . . Conclusion と章を改め、節を分け、Heading を付け、全体の構成 Organization を示すような Presentation を取るはずである。

Business Writing においては、しかしながら、たとえそれが One-page Report であろうとも、Short Letter であろうとも、Communication の TPO, とりわけ Writing の目的をふまえた Organization に則って書き、その構成を Visualize するような Presentation をもって表現しなければならない。

3 - 6 - 1 Business Report

Business Report では冒頭に掲げた Title あるいは Subject に続いて、その Report の Reader を示し、次に Reporter の名を書くのが普通である。

FORMAL PROGRAM OF INSTRUCTION IN DELEGATION OF AUTHORITY

A Report for Mr. Henry Dressler, President

By Norton Conway
Research Department

すなわち、誰が、誰のために、何を書いたかを明示するのだが、Office によ

っては TO: FROM: SUBJECT: DATE: といった Caption, 見出し語を Printあるいは Type した Memorandum Form を用いている。

TO: Mr. Henry Dressler, President
FROM: Norton Conway, Research Department
SUBJECT: FORMAL PROGRAM OF INSTRUCTION IN
DELEGATION OF AUTHORITY

The answer to your question “Shoud we have
some form of executive training in delegation
of authority ?” is “Yes.” the answer to your
.....

One-page あるいは 5 - , 6 -page ぐらいの Short Report においても、
すくなくとも次のような Steps をふんだ構成を取り、Center Heading あるいは Side Heading を Separate Line に示すのが常である。

- Assignment
- Method
- Findings

3 - 6 - 1 - 1 One-Page/ Short Report

Report の性質によっては、Heading を改めるが、たとえば、これは Academic な分野に属することが多い。一般に BOOK REVIEW を Organize するには、

- The Author
- The Story
- Comments

の 3 点は Cover しなければならない。

The Author は、時により The Author and His Background のようにした方がよい場合もあろうし、Author が余りにも著名な大作家であれば、例えば Goethe のどの系列の作品に属するとか、Shakespeare のいつの時期の作品であるかを示せば足りることもある。

The Story はなにも作品の内容を要約した Outline や Synopsis を書くのではない。それよりも、この作品を読了しなければ分からないような Proper Noun を引きながら、山場となっている Scene や Episode を、出来ることならその作者の特徴となっている Wording を拝借して、簡潔に Rewrite する方がよい。

もとより必要に応じ Paragraph を分けて、表現形式上の混乱を避ける。

Comments は、作品に対する Reporter の所感と見解を明確に述べる。これまた、少なくとも、二つの Paragraph に分けて、文脈と趣旨を示しておく。

Book Review においてはしばしば、例えば Hamlet や Macbeth のように、作品の名前と主人公の名前とが同一の場合がある。作品名には Underscore を付けて Hamlet とし、人物名の Hamlet と区別するような表現上の技術を適切に利用できることは、その人の読書量の広さと深さを示すものである。

Book Review では、Reporter の名前は Essay の終わったあとに、行間をあけ、右に寄せて書くのが普通である。冒頭の Main Title あるいは Subtitle の次の、いわゆる By-Line に Reporter 名を持ってくると Original Author とまぎらわしいからである。こうした極めて初歩的な常識も、読書量の狭く浅い大半の学生に対しては、むしろひとつの Rule として指導しなければならない。

ONE-PAGE REPORT

A Report to Mr. H. Dressler
By Eiko Kawamura

This report is designed to show how a one-page report should be arranged.

HEADINGS

Business asks that a report be identified by a heading (what, to whom, by whom) and by side-headings that classify the contents at a glance.

MARGINS AND SPACING

The top margin is 2 inches (but can be less).
The common line length are:

Under 200 words: 5 inches, double-spaced
200 - 300 words: 6 inches, double-spaced
Above 300 words: 6 inches, single-spaced

BALANCE LINE

If a report is so short that it looks high on the page, the reporter writes something (date, for instance) 2 inches from the bottom at either margin.

December 5, 1990

THE SECOND QUOTATION MARK

An English Report by Eiko Kawamura

Assignment

My assignment was to find out whether there are rules about the sequence of punctuation marks and quotation marks when they come together at the end of a quotation.

Method

After looking in English books, I found the information in a typewriting textbook, *Personal Typing*, Third Edition, by Llyod and Hosler (New York: Gregg, 1969), page 97.

Findings

Rule 1: At the end of a quotation, the quotation mark must always follow (1) a period, (2) a comma, (3) a question mark if there is a question in the quotation, and (4) an exclamation mark if there is an exclamation in the quotation.

1. He said, "Please give it to him now."
2. "It is good to see you," said Albert.
3. Jim asked, "When will it be shipped?"
4. They shouted, "Yes, we won the game!"

Rule 2: At the end of a quotation, the quotation mark must always precede (5) a semicolon, (6) a colon, (7) a question mark if the sentence asks a question but the quotation does not, and (8) an exclamation mark if the sentence makes an exclamation but the quotation does not.

5. He said, "Hand them over"; so, I did.
6. Our "pledge": Always to do our best.
7. Did she really say, "Oh, never mind?"
8. How silly it is for him to "protest"!

TYPING POETRY

An English Report for Typing I
By Eiko Kawamura

Assignment

My assignment was to find out whether there are rules about the arrangement of poems and verses when typing them neatly.

Method

After looking in English books, I found the information in a typewriting textbook, *Gregg Typing 191 Series* by John L. Rowe, Alan C. Llyod, and Fred E. Winger (New York: Gregg Division, McGraw-Hill Book Company, 1962), p. 71.

Findings

Rule 1: Insert an extra blank line between verses. In single spacing, put 1 blank line between verses. In double spacing, put 2 blank lines between verses.

Rule 2: Begin each line with capital letter.

Rule 3: Indent or use space discretely to indicate the rhyming scheme of the poem. If alternate line rhyme, indent them. If couplets rhyme, do not indent them. Be consistent in the spacing plan used.

Rule 4: Indicate author's name in a by-line 2 lines under the title or 3 lines under the poem.

December 8, 1990

BOOK REVIEW: MR. BLUE

THE AUTHOR

The author of Mr. Blue is Myles Connolly. I do not believe he has written any other books; he needs no other books, for he will be remembered for his creation of the lovable Mr. Blue.

THE STORY

Mr. Blue, a novelette, is a satire. Its hero is a modern St. Francis. Whether riding in his Hispano-Guiza or bent before the cross in his dark room, Blue is unforgettable.

Perhaps you like him best when he is painting a green kite and saying that he is Spring painting the world, or when he tells a fabulous tale of our mechanized society. The author creates a spell, which is difficult to cast off.

COMMENTS

I cannot begin to tell again the wonder that is Mr. Blue. His character is magnificent; it must be studied to be captured--and not on ce, but many times. There will still be some new facet that will wake your wonder.

Mr. Blue makes you aware that "life is beautiful." The book seems to ask its readers what they are doing to pay for their lives.

December 1, 1990

Eiko Kawamura
English Dept.

3-6-1-2 Longer Report

Business Report と Academic Thesis との基本的な相違のひとつは、時間的制限の有無であろう。Business Report では、長期的な視野に立つ基礎調査の Report のような特殊な事例を除き、一般には示された提出の期限を厳守しなければならない。しかも Report 作成のための時間は限られている場合が多い。このあたりが、Academic Thesis あるいは Scientific Report と大いに異なるところである。本来学術的労作には時間的制約は存在しない。“限られた日時のため...”といった遁辞は、謙遜に似て、実は不遜の言い分であり；学問の世界では所詮は、通用すべくもないことを知らねばならない。

一般に Business Report を作成するに当たって、着実に踏むべき Step は次の通りである：

- (1) 調査の意図・目的に見合う題目の選定——General に陥らぬ Specific なものとするのが肝要である。
- (2) 問題領域あるいは調査範囲の限定。
- (3) 情報・資料の入手とその整理・分類。
- (4) 意図・目的および問題領域に照らした資料の評価と取捨選択。
- (5) Writing に先行する理念の体系化と論理的構成の確立。
- (6) Writing の進行。
- (7) 結論と提案。
- (8) Documentation の整備。

従って Business Report の Organization は、上の順序を踏まえて、次のように構成するのが常道であることを指導する。経験を積んだ Reporter, あるいは意志決定の権限を有する Executive の Report ならば、こうした段階を省略した個性的なものがあってもよいが、当初は“定石”を重んじた構成から出発しなければならない。

1. Purpose (of the Report)

2. (Definition of) Problem Area
3. Method/ Information Source
4. Data Tabulated
5. Facts Obtained
6. Recommendation of Necessary Action
7. Reference/ Index

3-7 Business Letter

特別な Sales Letter や Advertising Letter を除き、Business Letter の構成は、

- (1) Purpose (of the Letter)
- (2) Message (to be communicated)
- (3) Action Closing

の 3 steps を踏むべきものであることを指導する。

Reader Side に立って考えれば、Letter の受け手が初めに知りたいのは、どのような意図・目的でこの Letter は書かれているかということである。従って Reader の先ず知りたいことを、冒頭に簡潔に伝えることこそが、効率的であるとともに、真の意味での礼儀に叶った書き方であることを理解させねばならない。日本的習慣による“なくもがな”の Stereotype な時候の挨拶やお世辞の類は無用と心得るべきである。

Business Letter Writing では、Single Purpose Letter に徹し、Multi-Purpose Letter は、努めてこれを避ける。複合目的を持った Letter, 例えば発送・着荷の日時に関する問い合わせと、代金の決済についての条件の確認、あるいは技術的な資料の請求とを、1 通の Letter の中に合い乗りさせてはならない。この場合、宛名は同一の会社であっても、Shipping Department 宛、Accounting あるいは Sales Department 宛、Engineering Section 宛にそれぞれ 1 通を差し出すことは当然であって、当面の事務処理はもとより、後日の照合・確認にさいしても無用の混乱を招かぬようにするのである。

単一目的であれば、Purpose を述べる First Paragraph はそれほど長くなるはずはない。Wordy な表現を慎めば、数行に Type Out することが可能であろう。

次に伝達すべき Message を整理して述べる。読み易いように必要に応じて Paragraph を分けるが、一般に Single Space で Typewrite する Business Letter の Letter Body では、一つの Paragraph は 8 行を越えないようにするのが常識である。これは、試みに 10 数行の Paragraph を Typewrite させて、その Typographical な形の悪さと“読み難さ”を実感させる方法が効果的であろう。この場合、今日では必ずしも文意上の段落にこだわらず、読み易さ優先で Paragraph を分けてよいことになっているが、欧米の Office で書かれる Business Letter の大半は Secretary に対する口実筆記 Dictation の形を取ることから、こうした習慣が成り立っていることを教えておくといよい。

一般に Business Letter の Last Paragraph は、Action Closing を内容とする。これまた儀礼的な挨拶に止まらず、この Letter に続く、次の Action あるいは Response に対する指示・提案・示唆を簡明に述べるものであり、“こちらは何を期待しているか,” “そちらに何をしてほしいのか,” を結びとする。Letter によっては、次への Action にかかわる記事を述べにくい場合もあろう。それならば、いささか表現が Stereotype になるのは止むを得ないこととして、たとえば“Thank you once again for writing us.”とか、あるいはたんに“Thank you.”とだけでも、Last Paragraph をむすぶことができることを、実例を示して指導しておく。

Business Letter の Parts と Arrangement, とりわけ Letter Body の前後に付ける Salutation と Complimentary Closing の種類と用法については 1-1 Business Letter の Parts 1-1-4 Salutation 1-1-1-6 Complimentary Close の項を参照されたい。

豊富な Vocabulary を駆使しての、その人ならではの時には饒舌な表現や破格の文体も、文芸の世界にあっては、大いに個性的であって、高い評価と賞賛を受けることもあろうが、Business Writing の分野では、先ずは平易な文体と

着実な表現から出発することが望ましい。もとより、その道の達人の手になる見事な Advertising Copy などは Exceptional な Case であって、そこには専門的な知識と習練を必要とし、そしてなによりも、天賦の文才が前提となる。こうした高次元の Business Writing については、もとより、本稿の範囲を超えるところにある。

いま流行の形容詞を冠するならば、“究極の Business Writing” へ到達するための次の関門は、T. P. O. に対応した Writing Art を Master した後に、伝達すべき Message の内容に関して、広く・深く・新しい知識を持ち・保ち・磨くことであるのは言うまでもなかろう。

かつて NBC (National Broadcasting Company) の社長であったアメリカ・マスコミ界の巨人 Robert Sarnoff の Comment を掲げて本項の結びとしたい：

Today's leaders are frequently men and women who have mastered the art of communication. They know how to get their ideas across. And successful people—those who are continually sought for key positions—effectively combine their ability to communicate with a solid foundation of knowledge. For knowledge is the predominant quality in the transmission of ideas.

— to be continued —

NICHIREN SHŌNIN'S *NYOSETSU SHUGYŌ-SHŌ*: A TRACT ON PRACTICING THE TEACHING OF THE BUDDHA

tr. Kyotsu Hori

I. Introduction

The *Nyosetsu shugyō-shō* is a letter by Nichiren Shōnin (Saint Nichiren), a thirteenth century Buddhist monk who founded Nichiren Buddhism in Japan, to his disciples and followers. The essay-like title is not Nichiren's own, but the letter came to be known by this title because of the repeated use of the phrase “*nyosetu shugyō*” taken from the twenty-first chapter of the *Lotus Sutra*. The phrase means in the context of the sutra “practicing according to what is preached in the *Lotus Sutra*, which is the true teaching of the Buddha.” Therefore, I translated it “practicing the teaching of the Buddha.”

Dated the fifth month in the tenth year of the Bun'ei Era (1273), the letter encourages disciples and followers of Nichiren not to be down-hearted by the persecution they had been subjected to. Probably due to his harsh criticism of Pure Land Buddhism and repeated attempts at converting rulers of the Kamakura military government, who were firm believers of Amida Buddha, Nichiren and his followers suffered the so-called four great persecutions and numerous minor ones, the last one being Nichiren's banishment to the island of Sado for several years, 1271–74. It was while on Sado that Nichiren wrote this and other letters and essays considered to be the most important of his doctrine.

The original manuscript of *Nyosetsu shugyō-shō* no longer exists; it is known to have existed in the Kuonji Temple on Mt. Minobu and it was said to have been burnt in a fire. However, a copy made by Nisson Shōnin (1265–1345) in 1297, only fifteen years after the death of Nichiren, exists today in the Fukujōji Temple in Ibaraki Prefecture.

For the purpose of the present translation, I have used the text included in the *Shōwa teihon Nichiren Shōnin ibun*, vol. 1, compiled by Risshō

Daigaku Nichiren Kyōgaku Kenkyū-jo (Minobu-machi, Sōhonzan Minobu Kuonji, 3rd ed. 1971). Though I tried to follow the text as closely as possible, I was occasionally forced to ignore apparently redundant words and insert some words or phrases in brackets in order to clarify the meaning. The original text has no paragraphs, but I separated it into many paragraphs for the sole purpose of clarity.

II. *Nyosetsu Shugyō-shō*: A Tract on Practicing the Teaching of the Buddha

As I contemplate the matter, it is stated [in the *Lotus Sutra*] that having been born into this world during the Latter Age of the Decadent Dharma,¹ those who uphold this sutra would suffer from hatred and jealousy more than [those who upheld it] during the lifetime of the Buddha.

The reason is that during the lifetime of the Buddha the master who preached was the Buddha, and His disciples were great bodhisattvas² and arhats.³ Furthermore, He preached the *Lotus Sutra* for humans, gods, four categories of Buddhists,⁴ and eight kinds of gods and demi-gods who protect Buddhism⁵ after cultivating and nurturing their ability to understand and have faith in it. Yet, He encountered much hatred and jealousy. How much more so in this Latter Age of the Decadent Dharma! Although the time is ripe for the teaching [of the *Lotus Sutra*] to spread, teachers [who propagate it] are ordinary men [who have not gotten rid of evil passions] while their disciples quarrel and fight constantly, having lost the true dharma, and are wicked and sickened by the “three poisons.”⁶ Therefore, they avoid good teachers, befriending bad teachers.

Moreover, it is conclusively decided⁷ that those who would be teachers, disciples or followers of the practitioner of the teaching of the Buddha should encounter the “three kinds of enemies.”⁸ You, [my disciples and followers,] therefore, should expect upon listening to the preaching of this [*Lotus*] sutra to meet persecutions by the “three kinds of enemies” more severe than those during the lifetime of the Buddha.

Nevertheless, some disciples of mine, who had heard this were so taken aback that they surrendered their faith in alarm upon encountering major or minor persecutions. Have I not told you? This is what I taught you day and night by citing [a passage from] the [*Lotus*] sutra:⁹ [“Those who propagat-

ed the *Lotus Sutra* were persecuted] even during the lifetime of the Buddha. How much more [they would be] after the death of the Buddha! How much more after the death of the Buddha!" You should not be alarmed now at seeing me chased out of my house, wounded, and twice sentenced to banishment to remote provinces.¹⁰

Question: The practitioners of the teaching of the Buddha should be able to "live in tranquility in this life."¹¹ Why are "three kinds of enemies" so rampant?

Answer: Śākyamuni Buddha encountered the "nine great persecutions"¹² during His lifetime for the sake of the *Lotus Sutra*. Bodhisattva Jōfukyō in the past was beaten with sticks and pieces of wood or pieces of tile, and stones were thrown at him for the sake of the *Lotus Sutra*.¹³ Chu Tao-sheng was banished to a mountain in Suchou; Venerable Fa-tao was branded on the face with a hot iron rod;¹⁵ Venerable Ārysimha was beheaded;¹⁶ Grand Master T'ien-t'ai¹⁷ was regarded with hostility by three Southern and seven Northern masters; and Grand Master Denyō¹⁸ was hated by monks of the Six Schools of Buddhism [in Nara.]¹⁹

These people—the Buddha, a bodhisattva, and great sages—were severely persecuted because they were practitioners of the *Lotus Sutra*. If we don't call them the practitioners of the teaching of the Buddha, where should we look for them?

However, now we live in the time when disputes and quarrels are rampant as the true dharma is lost. Moreover, there is nothing but evil lands, evil rulers, evil subjects, and evil people, who reject the true dharma, showing respect to evil dharmas and evil teachers. As a result, evil spirits rushed into the lands, filling them with the "three calamities and seven disasters."²⁰

It is unfortunate for me, Nichiren, to have been born into this land just at this time in compliance with the order of Śākyamuni Buddha. Unable to go against His order, I, Nichiren, started the war between the true and provisional Buddhism in accordance with the words of sutras. Wearing an armor of endurance, holding the sword of the *Lotus Sutra* in hand, carrying the banner with five characters [of *myō*, *hō*, *ren*, *ge*, and *kyō*], the essence of the *Lotus Sutra* in eight fascicles, drawing to the full a bow of [the scriptur

al passage saying:] “The truth has not been revealed in any sutras preached before the *Lotus Sutra*,”²¹ with an arrow notched with [the scriptural declaration:] “The Buddha has simply given up the provisional teachings,”²² and riding in a chariot drawn by great white oxen,²³ I have beaten provisional teachings one after another. Seeking out enemies here and there, I have attacked eight or ten schools²⁴ of Buddhism such as the Pure Land (Nembutsu), True Words (Shingon), Zen, and Discipline (Ritsu). Some escaped, others retreated, still others were captured and became my disciples. No matter how many times I have attacked and defeated them, my enemies are numerous while I am alone [in the army] of the Lord Buddha. Therefore, the war has not been won yet.

[Nevertheless,] it is the golden words [of Grand Master T'ien-t'ai] that “the *Lotus Sutra* is the teaching that denounces the [evil] doctrines of provisional teachings.”²⁹ So I shall eventually defeat all those who believe in such evil doctrines without exception and convert them all to be followers of the Lord Śākyamuni Buddha. When all the people under the heaven and various [provisional] teachings are all converted to the one teaching [of the *Lotus Sutra*] leading to Buddhahood, and when only the *Lotus Sutra* flourishes and all the people recite “*Namu Myōhōrengekyō*” in unison, the howling wind will not blow on the branches, falling rain will not erode the soil, and the world will become [as ideal as during] the reigns of Emperors Fu-hsi and Shen-nung.²⁶ You will see that such times will come when calamities cease to exist, people master the art of living long and both man and the teaching [of the *Lotus Sutra*] become eternal. There should be no doubt about the scriptural statement of the “tranquility in this life.”²⁷

Question: Regarding the practitioners of the teaching of the Buddha, how do they keep their faith?

Answer: All the people today in Japan say that since various [provisional] teachings were merged in the only-one teaching [of the *Lotus Sutra*] leading to Buddhahood, they all are equal in comparative value or in depth of meaning. So, they say that reciting the name of Amida Buddha, saying the mystic words of *mantra*, practicing meditation of Zen, or in general keeping and reciting any of the sutras and names of Buddhas and bodhisattvas are

all [equivalent to practicing] the *Lotus Sutra*, and that those who believe in this are the practitioners of the teaching of the Buddha.

I say this is not so! After all, he who practices Buddhism should not rely on what people say, but solely on the golden words of the Buddha. Upon obtaining Buddhahood our Supreme Master Śākyamuni Buddha wanted to preach the *Lotus Sutra*. However, since the capacity of the people to understand and have faith in it was not ripe, He at first preached various provisional teachings for some forty years as an expedient. Only then did He preach the *Lotus Sutra*, the true teaching. In the *Muryō-gi-kyō* (*Sutra of Infinite Meaning*), introductory to the *Lotus Sutra*, He distinguished between provisional and true sutras, differentiating the expedient from the true. So it is stated: "By way of an expedient, the truth has not been revealed for over forty years."²⁸ Having fully understood why the Buddha first preached the provisional teaching before revealing the true teaching, 80,000 great bodhisattvas such as Daishōgon clearly declared that [those who practice] the pre-*Lotus* sutras, which require many aeons of practice, "will never be able to attain Buddhahood."²⁹

Then, preaching the *Lotus Sutra* proper, the Buddha declared that He "would certainly reveal the truth after a long period of preaching provisional teachings."³⁰ He then admonished us saying: "[There is only one teaching,] neither second nor third teaching except those preached as the expedient;"³¹ "[we should] now simply discard expedient teachings;"³² and [we should] "not believe in even a word or phrase except in the *Lotus Sutra*."³³

Thereafter the "only-one teaching" of the *Lotus Sutra* should be the great dharma enabling all the people to attain Buddhahood, while all the sutras other than the *Lotus* should be of no value whatsoever. Nevertheless, scholars today in the Latter Age of the Decadent Dharma believe in various sutras of various schools such as the Shingon, Nembutsu, Zen, Sanron, Hossō, Kusha, Jōjitsu, and Ritsu, thinking that they all are the preachings of the Buddha, leading to Buddhahood. Such people are those of whom it is definitely stated [in the *Lotus Sutra*]: "If someone does not believe in this sutra and slanders it, he will kill off the seed of Buddhahood of all the people Upon death he shall go to the Hell of Incessant Suffering."³⁴ Thus the Buddha has decided that the practitioners of the teaching of the Buddha are those who single-mindedly believe that "there is the only-one teaching [of the *Lotus Sutra*],"³⁵

closely following the clear mirror of these commandments without fail.

Question: [They are slanderers of the true dharma because] they thus claim that having faith in various expedient and provisional sutras and Buddhas is the same as having faith in the *Lotus Sutra*. How about putting faith exclusively in one sutra [of the *Lotus Sutra*], performing the “five ways”³⁶ of practicing it [in an inoffensive way] as preached in the “Peaceful Practice,” chapter?³⁷ Can we call such a person a true practitioner of the teaching of the Buddha?

Answer: Those who want to practice Buddhism should know that there are two ways of propagation, persuasive and aggressive. All Buddhist sutras and commentaries do not go beyond the limit of these two ways. However, scholars in Japan, though they seem to have learned Buddhism in general, do not know the way suitable to the time. The four seasons differ from one another. It is warm in summer and cold in winter; flowers bloom in spring and trees bear fruits and nuts in autumn. We sow seeds in spring and harvest crops in autumn. How can we harvest crops in spring by planting seeds in fall? Heavy clothes are for cold winter, not for hot summer. Cool breeze is needed in summer, not in winter.

The same could be said of Buddhism. There is a time when Hinayana teachings could be spread effectively, but in another time, the provisional Mahayana teachings might be more effective. Still other times might call for the true dharma for the attainment of Buddhahood.

However, the 2000-year period of the Ages of the True Dharma and Imitative Dharma was the time for the Hinayana and provisional Mahayana teachings to be spread. The 500-year period at the beginning of the Latter Age of the Decadent Dharma is the time exclusively for the pure, perfect, sole, and real teaching of the *Lotus Sutra* to be spread widely. This is the time when quarrels and disputes are widespread, the true dharma is lost and the difference between the true and provisional teachings is blurred.

[The Buddha has told us that] we should arm ourselves with swords, sticks, and bow and arrow when there are enemies [of the true dharma]; but it is no use of having them when there are no enemies. Provisional teachings today are enemies of the true dharma. If provisional teachings stand

in the way of the only-one teaching [leading to Buddhahood] to spread, the true teaching should chastise them. Of the two ways of propagation, persuasive and aggressive, this is the aggressive way of the [teaching] the *Lotus Sutra*. T'ien-t'ai declares; "The *Lotus Sutra* is the teaching that aggressively denounced the [evil] doctrine of provisional teachings."³⁸ How true it is!

In spite of this, suppose we perform today the "four peaceful practices,"³⁹ which are of the persuasive way, is it not [like] trying to harvest crops in spring by planting seeds in winter? Roosters which crow at dawn are useful; if they crow in the evening, they are ghosts! At the time when true and provisional teachings are confused, are not those who seclude themselves in mountain forests and try to practice the persuasive way, without attacking the enemies of the *Lotus Sutra*, the ghosts who have missed the time for practicing the *Lotus Sutra*?

Then is there anyone who has practiced the aggressive way of [teaching] the *Lotus Sutra* as preached in it today, in the Latter Age of the Decadent Dharma? Suppose someone cries out loudly without saving his voice: "No sutras [except the *Lotus*] is the way leading to Buddhahood; others are the fountainhead of falling into hell; and the *Lotus Sutra* alone is the dharma leading to Buddhahood;" vehemently attacking other schools of Buddhism, both their teachings and people. He will not fail to invite the "three kinds of powerful enemies."⁴⁰

Our Supreme Master Śākyamuni Buddha aggressively propagated the [*Lotus Sutra*] for eight years during His lifetime, Grand Master T'ien-t'ai did it for some thirty years, and Grand Master Dengyō for more than twenty years. Now I, Nichiren, have denounced the provisional teachings for more than twenty years,⁴¹ during which I have encountered countless severe persecutions. I do not know whether or not they are equal to the "nine major hardships"⁴² which the Buddha suffered from, but probably even T'ien-t'ai and Dengyō had not been persecuted as severely as I, Nichiren, for the sake of the *Lotus Sutra*. [The hardships from which] they [suffered] are merely of verbal attacks, hatred, and jealousy. [On the contrary,] I was twice sentenced to exile in remote provinces, [led to] the execution ground at Tatsunokuchi, and [received] a wound on my head. Besides, I have been spoken ill of, while my disciples have been banished or imprisoned, and my followers have been stripped of their fiefs or expelled. How can these severe perse-

cutions be comparable to [those suffered by] Nāgārjuna,⁴³ T'ien-t'ai, or Dengyō? Thus you should realize that practitioners of the *Lotus Sutra* who practice what is preached in it will not fail to be confronted by the "three kinds of powerful enemies."

Then, during some 2000 years following the death of Śākyamuni Buddha, excepting the three persons of Śākyamuni Buddha, T'ien-t'ai, and Dengyō, the only practitioners of the teaching of the Buddha are I, Nichiren, and my disciples and followers in the Latter Age of the Decadent Dharma. If you do not call us the practitioners of the teaching of the Buddha, the three persons of Śākyamuni Buddha, T'ien-t'ai, and Dengyō are not the practitioners of the teaching of the Buddha, either. [Instead, such evil men⁴⁴ as] Devadatta, Kokālika, Sunakṣatra, Kōbō, Jikaku (Ennin), Chishō (Enchin), Shan-tao, Hōnen and Ryōkan should be [called] the practitioners of the *Lotus Sutra*; and Śākyamuni Buddha, T'ien-t'ai, Dengyō, Nichiren, and his disciples and followers should be called the practitioners of Pure Land (Nembutsu), True Words (Shingon), Zen, and Discipline (Ritsu) Buddhism. The *Lotus Sutra* would be called the expedient, provisional teaching, while such [provisional] sutras as those of the Pure Land Buddhism would be [called] the *Lotus Sutra*. Such a thing would never happen even if the east became the west and the west, the east, and the earth with its grasses and trees jumped up to be the heaven and the sun, moon, and constellations in the heaven together came down to form the earth.

How pathetic it is that all the people in Japan today are gladly laughing at the sight of me, Nichiren, and my disciples and followers being confronted by the "three types of powerful enemies" and suffering from severe persecutions! However, as it is said, "Today the fate of another, tomorrow mine," the life of me, Nichiren, and of my disciples and followers is as fragile as frost and dew waiting for the sun to shine. Now, when we attain Buddhahood and enjoy the supreme happiness in the Supreme Land of Eternally Tranquil Light,⁴⁵ you, [all the people of Japan], shall sink into the bottom of the Hell of Incessant Suffering, where you shall be subject to great sufferings. Then how pitiful we shall feel for you, and how envious you shall be of us!

Life is fleeting. No matter how many powerful enemies gang up on you, do not retreat and never be afraid of them. Even if our necks are sawed off,

our torsos are pierced through by spears, and our feet are shackled and drilled with gimlets, we should keep on chanting “*Namu Myōhōrengekyō! Namu Myōhōrengekyō!*” as long as we are alive. If we die chanting this, Śākyamuni Buddha, Tahō Buddha,⁴⁶ and the Buddhas in ten directions⁴⁷ will immediately come flying, lead us by the hand or carry us on their shoulders to Mt. Sacred Eagle.⁴⁸ At the moment, two sages,⁴⁹ two heavenly kings,⁵⁰ and ten female *rākṣasa* demons⁵¹ will protect us, upholders of the *Lotus Sutra*, and various gods and deities will hold up a canopy over our heads, wave banners, guard us, and certainly will send us to the Jeweled Land of Eternally Tranquil Light.⁵² What a great joy! What a great joy!

Fifth month in the tenth year of the Bun’ei Era (1273)

Nichiren (seal)

To Everyone:

Please keep this writing with you and read it all the time.

III. Footnotes

1. *Mappō*: the last of the three periods which are said to follow the death of the Buddha. According to Buddhist scriptures the first 1000 (some say 500) year period following the death of the Buddha is called the Age of the True Dharma, when the teaching of the Buddha is properly practiced and enlightenment can be attained. The following 1,000 (or 500) years are the Age of the Imitative Dharma, when the teaching is practiced but enlightenment is no longer attainable. In the last period, the Latter Age of the Decadent Dharma, lasting 10,000 years, no one practices the teaching.
2. *Bosatsu*: one who makes vows to attain enlightenment and save suffering beings.
3. *Arakan*: a Hinayana saint who has been completely freed from his evil passions and attained emancipation from the cycles of birth and death.
4. Monks, nuns, laymen, and laywomen.

5. Gods, dragons, *yakṣa* (*yasha*), *gandharva* (*kendatsuba*), *asura* (*ashura*), *garuḍa* (*karura*), *Kiṃnara* (*Kinnara*), and *mahoraga* (*magoraga*).
6. Greed, anger, and ignorance.
7. *Lotus Sutra*, chapt. 13.
8. Self-conceited laymen and monks and self-styled sages.
9. *Lotus Sutra*, chapt. 10.
10. Nichiren was exiled in Izu from 1261–63, and Sado in 1271–74.
11. *Lotus Sutra*, chapt. 5.
12. Though different sources give different accounts, it is generally agreed that the nine major hardships that the Buddha is said to have suffered are: (1) an accusation that the Buddha had an affair with a beautiful woman named Sundarī (Sondari); (2) a claim by a Brahman woman named Chinchāmānavika (Senshanyo) that the Buddha made her pregnant; (3) Devadatta's attempt at the life of the Buddha by rolling down a rock from the top of Mt. Sacred Eagle; (4) His feet injured by wooden spears in a Brahman city; (5) murdering of Śākya clan members by King Virūdhaka (Biruri) of Kosala; (6) near starvation of the Buddha and His 500 disciples invited by Brahman King Ajita (Agita), who fed them nothing but horse feed for 90 days; (7) cold wind that blew for eight days in one winter causing the Buddha a chronic backache; (8) ascetic practices of the Buddha for six years prior to His attainment of the Buddhahood; and (9) empty alm bowl (no offering) in a Brahman city because of a royal ban.
13. *Lotus Sutra*, chapt. 20.
14. One of the four great disciples of Kumārajīva, Tao-sheng is said to have been banished to a mountain in Suchou in Southern China when he insisted on the presence of Buddha-nature in all sentient beings including *icchantika* (*issendai*).
15. Fa-tao is said to have remonstrated with Emperor Hui-tsung of Sung China against the persecution of Buddhists and was banished South with his face branded with a hot iron rod.
16. Twenty-fourth patriarch of Buddhism, Āryashimha, who lived in central India during the sixth century, was beheaded by King Dammira, an enemy of Buddhism.
17. Founder of the T'ien-t'ai School of Buddhism in China.

18. Founder of Tendai School in Japan.
19. Six Buddhist Schools which flourished in the Nara Period Japan: Kegon, Hossō, Kusha, Jōjitsu, Sanron, and Ritsu.
20. Three calamities: wars, epidemics, and famines (according to the *Daijikkō*); seven disasters: epidemics, foreign invasions, civil wars, changes in constellations, eclipses of the sun and moon, storms out of season, and droughts (according to the *Yakushi-kyō*).
21. *Muryōgi-kyō*, chapt. 2: "The truth has not been revealed for some forty years."
22. *Lotus Sutra*, chapt. 2: "Having simply given up the provisional teachings, I (the Buddha) will preach only the supreme way."
23. The great white oxen chariot mentioned in the *Lotus Sutra*, chapt. 3, refers to the supreme teaching directly leading to Buddhahood, that is, the teaching of the *Lotus Sutra*.
24. "Eight schools of Buddhism" refers to Kusha, Jōjitsu, Ritsu, Hossō, Sanron, Kegon, Tendai, and Shingon. Added to these, Zen and Nembutsu make ten schools.
25. *Fa-hua hsüan-i (Profound Meaning of the Lotus Sutra)*, fascicle 9.
26. Sage rulers of ancient China.
27. See note 11.
28. See note 21.
29. *Muryōgi-kyō*, chapt. 3.
30. *Lotus Sutra*, chapt. 2.
31. *Idem*.
32. *Idem*.
33. *Ibid*, chapt. 3.
34. *Idem*.
35. *Ibid*, chapt. 2.
36. Upholding, reading, reciting, expounding, and copying, according to the *Lotus Sutra*, chapt. 10.
37. *Lotus Sutra*, chapt. 14.
39. See note 25.
39. *Lotus Sutra*, chapt. 14, explains four peaceful practices with body, mouth, mind, and vows of salvation.
40. See note 8.

41. From 1253, when Nichiren proclaimed the establishment of Nichiren Buddhism, to 1273, when he wrote the *Nyosetsu shugyō-shō*.
42. See note 12.
43. One of the great exponents of Mahayana Buddhism in the second or third century India.
44. Devadatta: a cousin and a sworn-enemy of Śākyamuni Buddha; Kokālika: a disciple of Devadatta who is said to have gone to hell after falsely accusing Śāriputra and Maudgalyāyana; Sunakṣatra: a disciple of the Buddha who left Him for an ascetic master; Kōbō: founder of esoteric Shingon Buddhism in Japan; Jikaku and Chishō: third and fifth abbots of the Enryakuji Temple on Mt. Hiei, who were responsible for Tendai Buddhism becoming largely esoteric; Shan-tao: a patriarch of Pure Land Buddhism in China; Hōnen: the founder of pure Land (Jōdo) Sect in Japan; Ryōkan: abbot of the Gokurakuji Temple in Kamakura belonging to Discipline (Ritsu) Sect, who is said to have been mainly responsible for sending Nichiren to the Tastunokuchi execution ground.
45. A Buddhaland, according to T'ien-t'ai's classification of four lands.
46. Appearing in the eleventh chapter of the *Lotus Sutra*, Tahō Buddha attested the truth of the sutra.
47. Ten directions here means "all directions," that is, "all over." It is said that there are Buddhalands throughout the universe, each of which is presided over by a Buddha.
48. The Buddha is said to have preached the *Lotus Sutra* for eight years on the Mt. Sacred Eagle.
49. Bodhisattvas Yakuō and Yūze.
50. Jikoku Tennō and Bishamon Tennō.
51. Ten daughters of the female demon Kishimojin (Hariti), who pledged to protect the practitioners of the *Lotus Sutra*.
52. A Buddhaland. See note 45.

IV. Appendix

Chapters of the *Lotus Sutra* (*The Sutra of the Lotus Flowers of the Wonderful Dharma*) translated by Kumārajīva

Chapter I. Introduction

Chapter II.	Expedients
Chapter III.	A Parable
Chapter IV.	Understanding through Faith
Chapter V.	The Simile of Herbs
Chapter VI.	Assurance of Future Buddhahood
Chapter VII.	The Parable of a Magic City
Chapter VIII.	The Assurance of Future Buddhahood of the Five Hundred Disciples
Chapter IX.	The Assurance of Future Buddhahood of the <i>Śrāvaka</i> Who Have Something More to Learn and of the <i>Śrāvaka</i> Who Have Nothing More to Learn
Chapter X.	The Teacher of the Dharma
Chapter XI.	Appearance of the Stupa of Treasures
Chapter XII.	Devadatta
Chapter XIII.	Encouragement for Upholding This Sutra
Chapter XIV.	Peaceful Practices
Chapter XV.	Appearance of Bodhisattvas from Underground
Chapter XVI.	Duration of the Life of the Buddha
Chapter XVII.	Variety of Merits
Chapter XVIII.	Merits of a Person Who Rejoices at Hearing This Sutra
Chapter XIX.	Merits of the Teacher of the Dharma
Chapter XX.	Jōfukyō Bodhisattva
Chapter XXI.	The Divine Powers of the Buddhas
Chapter XXII.	Transmission
Chapter XXIII.	The Previous Life of the Yakuō Bodhisattva
Chapter XXIV.	The Myōon Bodhisattva
Chapter XXV.	The Universal Gate of the Kanzeon Bodhisattva
Chapter XXVI.	Mystic Phrases
Chapter XXVII.	The Previous Life of the Myōshōgonō Bodhisattva
Chapter XXVIII.	Encouragement of the Fugen Bodhisattva

IV. Bibliography

Inoue, Shirō, comp., *Kun'yaku Myōhō renge-kyō narabini kaiketsu* (Kyoto, Heirakuji Shoten, 1973).

- Ishikawa, Kaiten, *Nichiren Shōnin go-ibun kōgi*, Vol. 8 (Tokyo: Nihon Bussho Kankō-kai, 1980).
- Kino, Kazuyoshi, *Nihon no meicho*, Vol. 8, (Tokyo, Chūō Kōron-sha, 1970).
- Kobayashi, Ichirō, *Nichiren Shōnin ibun dai-kōza*, Vol. 7 (Tokyo, Nisshin Shuppan Kabushiki Kaisha, 1990).
- Moriya, Kankyō, “Nyosetsu shugyō-shō”, Ryūzan shimizu, comp., *Gembun taishō kōgo-yaku Nichiren Shōnin zenshū*, Vol. 1 (Tokyo, Ryūbun-kan, 1921).
- Murano, Senchū, tr., *The Sutra of the Lotus Flower of the Wonderful Law, Translated from Kumārajīva’s version of the Saddharma-puṇḍarika-sutra* (Tokyo, Nichiren Shū Headquarters, 1974).
- Risshō Daigaku Nichiren Kyōgaku Kenkyū-jo, comp., *Shōwa teihon Nichiren Shōnin ibun*, Vol. 1 (Yamanashi-ken, Sōhozan Kuonji, 1971).
- Shimizu, Ryūzan and Nakatani, Ryōei, *Nichiren Shōnin ibun zenshū kōgi*, Vol. 12 (Tokyo, Pitaka, 1985).

英文読解における「複数形」の識別

— 日本語との対比に基づいて —

田 島 富美江

はじめに

大学で Reading を担当する際に、その目標を設定することは大きな問題である。教材は、時事問題や生活情報から文学作品に至るまで多種多様である。またその指導法にも、いわゆる速読・精読があり、速読はさらに、skimming や scanning に、また精読には単に意味が分かればよい——これは厳密には精読とはいえない——というだけのものから、その段階を越えて英文読解の面白さ、読書の楽しさを味わうことを目的とする方法に至るまで多岐にわたっている。

しかしながら、何をいかに読むかについての共通点は、いかなる種類の英文であっても、重要な部分を正確に読むことである。skimming, scanning の技術指導も勿論大切であるが、肝心な部分の意味が不明確であったり、文学作品でも単に分ったというだけでは、教師の指導のもとに Reading をする必然性がみられない、

本稿では、日本語の読解過程を参考として、日本人学生の英文読解過程に焦点をあて、多数ある読解の困難点のうち「数」の問題を取り上げるが、本論に入る前に、次の短い文に関する学生の解釈のしかたを観察し、問題提起とした。

At milking-time Ma was putting on her bonnet, when suddenly all Jack's hair stood up stiff on his neck and back, and he rushed out of the house. They heard a yell and a scramble and a shout: "Call off your dog ! Call off your dog !"

Mr. Edwards was on top of the woodpile, and Jack was climbing up after him.

"He's got me treed," Mr. Edwards said, backing along the top of the wood-

pile. Ma could hardly make Jack come away. Jack grinned savagely and his eyes were red. He had to let Mr. Edwards come down from the woodpile, but he watched him every minute.⁽¹⁾

この本はある授業の副読本として、かなりのスピードで読むことを目的に使用しているもので、学生には逐語訳を要求しているわけではない。しかし、理解度の確認のため、日本語でその意味を表現させることはしばしば行なっているが、ある時、下線部を次のように表現したのである。

「ジャックは、残酷に笑った。」

他の学生達も内容が理解できていれば、ここで爆笑が起こるはずである。しかしながら、何の反応もない。そこで、犬は笑うだろうか、笑うとどんな顔になるだろうか。たとえ笑えるとしても、この部分は笑える状況だろうか、とたずねた時に、はじめて爆笑がわいたのである。犬が笑うかどうかは筆者にもわからない。しかし、翻訳の時間ではないので、犬も笑える状況であればそのような日本語でも気にせず先に進んで良いであろうが、どう読んでもこの場合は、怪しい人間に対し、犬が歯をむき出しにして怒りを表わしているものであろう。改めて辞書に当たってみると、次のように書かれている。

研究社英和中辞典；

(vi) 歯をみせて（にやにや）笑う；

（怒り・苦痛・軽蔑などで）歯をむく

岩波新英和辞典；

(vi) ①（歯をみせて）にっこり〔にやにや〕わらう at.

②（苦痛・怒りなどで）歯をむき出す

Oxford Advanced Learners Dictionary of Current English;

(vi, vt) smile broadly so as to show the teeth, expressing amusement, foolish satisfaction, contempt, etc.

Webster's Third New International Dictionary;

1. to draw back the lips from the teeth (as of a dog in snarling or a person in laughter or pain so as to show them); esp: to do this in merriment or good humor (as in a broad smile)

大学生がよく使う中辞典程度のものには、「歯を見せて笑う」の意味が第一に次いで「歯をむく」がみられる。少し大きくなると「歯を見せる」ことが、その中心的意味としてあげられている。これは辞書そのものの問題でもあるが、同時にそれを使う学生自身の問題でもあるのである。

読解を担当していれば、誰しもこのような経験はあるであろうが、何故このような解釈が出て来るのだろうか。これは学生が、1語1語を日本語に置き換える作業をしているだけで、文脈をもとに、推論を働かせつつ先へ読み進もうとする努力をしていないことを、明白に物語るものである。以下、このような状態を正常な読解へと軌道修正するための基本的問題を考察してみたい。

I 能動的読解

ことばの特徴の一つに曖昧性があげられる。単語に限らず、句や文に至るまで、殆どのことばは多義的である。従って、それらが孤立して表れた場合には、解釈が曖昧となるのは当然である。しかしながら、我々日本語を母国語とする者は、日本語読解において大して曖昧性を感じることなく、というよりはむしろ、的確に意味を理解しながら、不自由なく読み進んでいくことが可能である。しかも、不要と思われる部分は飛ばしても、重要なポイントをおさえて意味を理解することは可能であるし、また逆に、文字となって明記されていない事柄を推論し、意味を補足しつつ読解を楽しむことさえできるのである。

日本語読解においてこの曖昧性の度合いを減少させる要因は何だろうか。それは大きく (A)、(B) に分類することができる。

(A) 日本語についての最も基本的な知識

1. 広範な語い
2. 充分な文法的知識

(B) 日本語の基礎的知識を運用する能力

1. 一般的知識の保持と活用能力
2. 1. にもとづく推論の能力
3. 文脈にもとづく予測の能力

我々は子供の頃から母国語を使用し、無意識のうちに語いを拡大し、文法的知識を充実させてきている。しかしながら、我々が母国語を理解し使用できるのは、語いや文法的知識、即ち上記の(A)を保持しているだけではなく、(B)の能力も保持しており、その両者をうまく調整していくことができるからである。

“文理解のメカニズムに関しては、与えられた文の構文と語から文の意味が解されるとする立場と、文を理解する側の人間が自分自身の「世界についての知識」をもとに、文という入力に対して文の意味を心的に構築するとする立場の2つがあり”⁽²⁾、認知心理学では後者の立場をとるものである。そして、このような言語理解のプロセスを、情報処理過程として捉え、スキーマ理論によってその過程を説明している。新しい情報なり概念なりは、受け手が自分のすでに持っている一般的知識と関連づけが出来た時にのみ、その意味が理解できるのである、というカント(I. Kant)の言語理解に対する考え方が、スキーマ理論の底流になっているといわれているが、それを1932年バートレット(F. C. Bartlett)が言語の記憶の研究において心理学に取り入れたものである。フレーム(frame)、スクリプト(script)などもスキーマと同様の概念を持つものとされている。

スキーマ(scheme, 図式)とは、情報の受け手の心の中にある過去の多数の経験から記憶の中に定着した高度に組織化された抽象的知識構造であり、“新しい経験を、適切な文脈やカテゴリーのもとに位置づけ、物事・事象の知覚・記憶、問題解決などの知識過程において重要な役割を演じるものとして想定された仮説的概念である”⁽³⁾、と定義されている。スキーマ理論とはスキーマが物事の理解にいかに関与するかを体系化したものである。ルーメルハート(D. E. Rumelhart, 1977)は言語理解のプロセスにこの概念を取り入れ、スキーマを、事象系列に関する標準化された知識で、演劇の台本のように登場人物や場面構成から成り立つものであると概括している。例えば、次の文を読んでみよう。

- (1) 授業で使う教科書や筆記用具をカバンに入れ、朝8時に家を出た。
8時20分に学校に着いてから、午前中4時間の授業ののち、お弁当を食べた。午後は2時間の授業があり、終ってからすぐ下校し、3

時30分に帰宅した。

文(1)は、学校に出かける時から帰宅までの標準的な出来事であり、「学校に通う」スキーマを記憶に留めていれば、きわめて容易に理解できる文である。我々はこのような事柄のすべてについて標準的なスキーマを持っていると想定し、新しく文が入力された場合、そのスキーマを記憶の中から探し出し、その新しい文に当てはめて理解しようとする。しかし、常に標準的スキーマ通りに文が書かれているわけではないので、符合しない部分のスキーマを調整しながら文章を理解していくわけである。

- (2) 授業で使う教科書や筆記用具をカバンに入れ、夕方4時に家を出た。2科目の勉強をして、6時に帰宅した。

文(2)を読み始めると、読み手は記憶の中の知識から「学校に通う」スキーマを探し出し、その文に当てはめようとする。「…カバンに入れ」までは「学校に通う」スキーマが活性化する。しかし「夕方4時」の部分では、朝早く出掛ける学校のスキーマとは符合せず、さらに「2科目」の部分では、普通の学校より科目数が少ないことに気づくが、夕方勉強に行く所は「塾」ではないかとの推論が成り立ち、「学校に通う」スキーマが修正されて文が理解されると考えられる。

以上のように、知識として心の中に持っているスキーマが修正されて文が理解されていく過程には、推論が働いていることがわかる。従って文の理解は、視覚から入る文字刺激と、外界に関する一般的知識（スキーマ）の相互作用であり、読み手自身が意味を構築していく能動的なプロセスであるということができる。

読解が能動的なプロセスであることをより明確にするために、スキーマをさらに細かく観察してみると、スキーマは適当な値(value)で埋めることのできる多くのスロットから成り立っている。それらのあるものは、特定可能な値で埋められるが、あるものは、任意の値——特定不可能なため、文脈や背景的一般的知識による推論にもとづく値——で一時的にスロットを埋めて思考の流れ

をスムーズにする役割を果たしている。後者はデフォルト値 (default value) と呼ばれているものであり、後の情報によって修正や確認が可能となる。特定可能な値とは、中心になる意味のことを指し、特定不可能な値とは、その状況によって変化する意味である。従って読み手はテキストに述べられた情報から先づ特定可能な値でスロットを埋め、また、字句の表面に表れない部分や自分の持つスキーマと符合しない部分のスロットを、推論によって任意の値で埋めながら読み進むプロセスを辿るわけである。

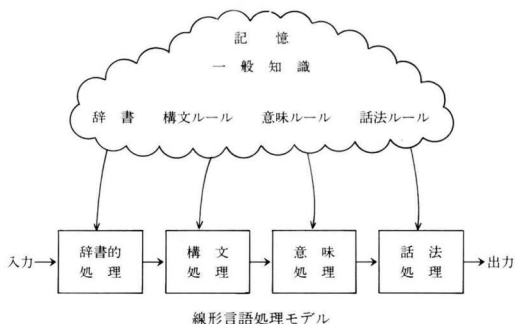
読解過程を以上のように考えると、本論の冒頭に示した学生の訳には、スロットを埋める作業がまったく見られないことがわかる。具体的に述べるならば、先づ第一に、動詞“grin”の中心的な意味が捉えられていないために、特定可能な値としてのスロットが埋められていないこと、さらに、これまで読み進んできた文脈をもとに、推論を働かせて曖昧な複数の意味の中から適当な意味を捉えて、デフォルト値としてスロットを埋めていく処理過程を踏んでいないことが明らかである。即ち、文中で“grin”が意味する中心的意味「(動物であるから) 歯をむき出しにする」を特定可能な値とし、歯をむき出しにするに至った状況——何が、誰が、どんな状態のもとでなど——を総合判断して「笑う」か「怒る」か、あるいはその他の意味の中から適当と思われるものをデフォルト値としてあらかじめ埋め込んでいく脳の働きが欠けていることになる。上例の場合、犬が見知らぬ人を見た時の標準的な行動のスキーマを、読み手が知識として保持していて、それが活性化されれば、“grin”の曖昧部分を推論によってあらかじめ特定することは、比較的簡単なことである。「笑う」を当てるとは、脳の働きを伴わない単なる英語と日本語の置換にすぎないといえる。

このように1つの語の意味を特定するにもスキーマに基づく推論が大きな役割を果たすものである。テキストが意味を持つものではないという観点に立つスキーマ理論では、読解をテキストと読み手が互いに作用し合うものと考え、特に読み手が記憶として保持している知識を喚起させてテキストに働きかけ、読み手自身の判断でスロットを埋めていくプロセスを必須のものとする。従って、読解は脳の活性化を伴う能動的な心の働きである、と強調することができるのである。

II ボトムアップ処理とトップダウン処理

いわゆる文学作品のみならず、新聞・雑誌その他諸々のテキストに共通するところは、すべての情報が詳細に文字に表わされているわけではなく、空白の部分があるということである。従って読解は、単に文字の中心的な意味だけを1つ1つ取り上げて線條的に解釈していくものではなく、また1語1語の意味を正しく捉えたとしても、書き手の意図した意味を充分に理解できるわけではない。読み手がスキーマとして持っている自らの知識構造をもとにテキストに働きかけ、文字に明記されていない空白の部分を推論によって補いつつ、文脈に合った意味を積極的に特定していくのである。換言すれば、テキストの語と構文によって意味を理解しようとするだけでは不充分であり、読み手が外界についての諸々の知識をうまく活用し、空白の部分を埋めていくことによって、テキストの意味を自ら構築していくのである。

グリーン (J. Greene) は、言語理解の際のテキストと外界についての知識の関係について、次のような線形言語処理モデルを示している。⁽⁴⁾



入力から出力まではテキストの処理であり、辞書の処理から入り言語理解に至るモデルであって、いくつもの処理レベルに分かれて階層状をなしている。特

定の情報は下位レベルに、より一般的な情報は上位レベルに位置し、情報が入ると左側の下位レベルの処理がなされ、それが完了してからその上のレベルに位置する処理段階へと進んでいくことを意味し、このモデルでは下位レベルの辞書的処理から上位レベルの話法処理へと、ボトムアップ処理が進められていく。

一方、どの処理段階においても、それまでに獲得した一般的な知識が何らかの形でテキストに作用してトップダウン処理が行なわれ、テキストの空白部分が埋められていくことを示すものである。この中で重要なことは、記憶の中に保持している一般的な知識の中に言語的スキーマ(textual schema)が存在し、言語理解においてはこの言語的スキーマが大きな役割を果たすものである。例えば、語いを拡大して知識として保持していたり、また、「ぜんぜん」の終りには「…でない」という否定が来るというような、いわゆる文法的知識である。これは、母国語の場合には日常生活で言語を使用するうちに、無意識的に獲得され、言語的スキーマとして記憶されているものであるが、外国語学習では意識的に習得するもので、この知識をより多く保持していれば、それだけ学習が効率的になることは、経験的にも認められることである。

この2つの処理過程は、理論としては理解できるが、以下の例でも明らかのように、ほとんどの場合単独処理では不可能で、相互作用的処理が行われると考えられる。

語・句・文に限らず、ある未知の部分、あるいは不明確な部分の意味をあらかじめ特定するには、即ちスロットの任意の値の部分デフォルト値で埋めていくには、その部分をより大きな単位の中に置いてみることである。いわゆる「文脈の効果」の利用である。より適当な文脈を構成するために、他の活性化されたスキーマを応用し、推論の力を働かせて不明確の部分特定していくわけである。次の文をみてみよう。

- 例1. 彼はその時、焚火の近くにいて、フォークで木いちごの枯枝を火の中に投げ入れていた。

文中の「フォーク」には、食事用の小さなフォークもあれば、園芸用の大きな熊手のようなものもあり曖昧な語であるが、要するに「先が割れたもの」がこの語の中心的意味である。それを文脈の中に入れると「焚火」のスキーマが活性化され、火の中に枝を投げ入れるには、大きな熊手様のものが必要であるという推論が成り立ち、道具として「熊手」がデフォルト値としてスロットを埋めることになり、全文の意味理解に到達する。上例は「焚火」という比較的下位レベルのスキーマによって意味理解に至っているが、「焚火」のスキーマが活性化されていることから、ボトムアップ処理のみでなくトップダウン処理も作用していることは明らかであり、相互作用的处理過程を経たということができる。

次に、短い文でありながら多くの情報を含む笑い話を取りあげてみよう。下の例は朝日新聞の「かたえくぼ」欄に掲載されたものである。(1990年1月13日 「二子山動かず」)

例2. 山1つ動かせないで、よく官房長官が務まるわネ。

_____土井委員長

森山真弓さん

上例では我々日本語使用者にとって語のレベルで理解できないものは1つもないが、個々の単語の意味が理解できても、文全体の意味はほとんどわからないといってよいであろう。

①山 ②1つ ③動かす(せないで)、④よく

⑤官房長官が ⑥務まるわネ。

_____⑦土井 たか子

⑦森山真弓さん

上記のうち⑤は具体的な職名であって、これだけは曖昧性のない語である。①②③は、単語のレベルでは理解可能であるが、それだけの理解では、文中に入

った時は意味を持たない。また、「山を1つ動かす」の①②③をひとまとめに
てみても、そのような具体的な行為としてのスキーマは実際にあり得ないから、
この部分は、読み手にとっては未知の部分となる。そして、それを解決するに
は⑦⑧のスキーマも活性化させねばならない。しかし、彼女達が現在、政界で
活躍している人物であるという認識だけでは不十分であって、さらに、彼女達
の周辺に起こっている事実や、現代社会に浮上している男女差別の問題などを
スキーマとして持っていなければ、その面白さは分からないであろう。従って、
この文を読んだ時に、即座に意味が理解できて笑えるには、語や句のような下
位レベルのスキーマを喚起させるだけでは不十分であり、下記のような上位ス
キーマの活性化、即ち、記憶の中にある一般的背景知識を活用することが必要
なのである。

1. 女性は相撲の土俵に登ることは出来ないが、森山氏は「官房長官と
して、土俵上で全勝力士に表彰状を渡したい」と相撲協会理事長に
申し入れたが、それを拒否されたこと。
2. 社会党の土井委員長が1989年の参議員議員選挙において、期待以上
の当選者を出した時、「山が動いた」ということばで、その喜びを表
現したこと。
3. 相撲協会の理事長が「二子山」という名の親方であったこと。

以上の上位スキーマを喚起させることにより、可能な解釈のうちのどれを選ぶ
べきかを、予め特定することができ、①は二子山親方、②は親方の1つの考え、
③は彼の考えを変えさせる、という解釈に至ると説明することができる。この
例のように、上位スキーマを喚起させて下位スキーマを特定する方法がトップ
ダウン処理である。

しかしながら、我々の日本語読解においては、グリーンのモデルに見られる
各階層が明確に分離できるものではなく、また、2つの方向の処理過程のいず
れであるかを分析することは、実際にはほとんど不可能であり、これらの過程
が渾然一体となって無意識のうちに相互作用がはたらいっていると考えてよいで
あろう。

テキストはそれ自体意味を持つものではないから、その理解に当たっては、

読み手がテキストと一般的知識とを積極的に関連づけることが要求されるのである。この処理のしかたをみても、読解とは受動的な作業ではなく、脳の活性化を伴う能動的な心の働きであるということが出来る。従って、読解の成否はひとえに、読み手の処理能力——言語的および一般的スキーマの入力情報への働きかけ——にかかっているということが出来るであろう。

Ⅲ 日本人学生の英文読解過程

大学における読解の時間に、学生が英文を読み進むプロセスは、それが速読であれ精読であれ、母国語である日本語を読むプロセスと同一でなければならない筈である。しかしながら、本論の冒頭にあげた例のように奇妙な解釈が出て来るのはなぜだろうか。勿論、外国語であるから、一部の学生を除いては、語・句の知識や文法規則についての知識が不十分であることは言うまでもない。しかし、辞書や参考書の使用も自由であるにもかかわらず、母国語の読解過程とは非常に異ったプロセスで英文を解釈しようとしているのは明らかである。

そして、その理由を

「上位・下位のあらゆるスキーマの活性化を促し、スロットの部分でデフォルト値でうめようとする積極性の欠如にある。」

とまとめることができる。

再びJ. グリーンのモデルを借りて説明するならば、彼等の読解作業は、トップダウン処理がなされず、ボトムアップ処理の入り口、即ち、スキーマの活性化をとまわらない辞書の処理、構文処理の辺で停滞し、その先に進もうとする心の働きを喚起しないのである。換言すれば、一般的知識がないというよりはむしろ、持てる一般的知識を活性化させ、入力情報に働きかけようとする努力が欠けているのである。前章で述べたように、文章の理解はボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用の処理によって、はじめて達成されるものであるから、彼らのやり方は、読解とは程遠い暗号解読に留まっているにすぎないということができる。

キャレル (Carrel, 1984) は、外国語学習者の読解がうまくいかないのは、読み手がすでに持っているスキーマを活性化させるべく、ボトムアップ処理を有効に働かせていないか、或は、書き手が期待しているスキーマを読み手が持っていないかのいずれかであろうという意味のことを述べているが、日本人学生の読解過程を観察していると、その前半の部分は、まさに的を射たものと考えられる。

このような読み方は、内容を積極的に読むというよりは、単に英語と日本語の置換作業、即ち、仕方なく義務をこなす受動的作業の域を出ず、脳の活性化がみられないと言わざるを得ない。彼らの読解作業は、明示された情報を操作するだけで、トップダウン処理というテキストへの働きかけがなされておらず、あるとしても、語と簡単な文構造レベルの非常に下位のスキーマによってのみ解釈しようとしていて、一般的知識を活用しようとする積極性が無いために、上位スキーマの活性化にまで到達しないのである。従って、文脈と遊離したことばを使ってその場限りの日本語に直しても、その意味の矛盾に気づかないということになる。このような彼らの読解に対する態度は、日本語読解の際にみられる理想的な読解のプロセスには至っていないと言っても過言ではない。

冒頭に示した例は、問題提起のためにやや極端な例であったかも知れない。しかし、学生の意味の捉え方を確認するために、日本語に直させてみると、このような例は枚挙にいとまがない程である。

Ⅳ 英文読解の一困難点……「複数形」

生活のほとんどを日本語で過し、日本語の体系を完全に身につけた学生達が、英文読解で困難と感じる点は、英語が日本語にはない特徴を表わしている部分であることは言うまでもない。例えば、英語の冠詞の問題は、新旧情報や特定・不特定などを表わすのに重要なものであり、また、時制や相の表現も日本語とはきちんと対応していないことなども学習者にとっては非常に困難な点であるが、それらの1つに「数」の問題をあげることができる。そして、1個の名詞の単数・複数を正しく解釈しているかどうかによって、文章の重要部分が理解

不可能であったり、小説などのストーリーの面白い展開に気がつかなかつたりする事例は、筆者の経験からも数多くあげることができる。

日本の英語教育において、単数・複数に関する規則は、中学1年の英語学習開始と同時に導入され、以後、英語と関わりを持つ者であれば忘れることのできない、余りにも初歩的で単純であるが、重要な規則であって、学生達は文法事項としては充分理解している筈である。にもかかわらず、多様な文法事項が凝縮された英文テキストの解釈においては、複数表現を無視することがしばしば見られるのである。これは、日・英語間では「数」の概念や表現法が非常に異なっていることを理由としてあげることができるが、これもスキーマの喚起により、かなり防げるものの1つであると考えられるのである。しかしながら、単・複問題に関して学生がつまづくのは、「数」の問題のすべてにわたっているわけではなく、ある一部分に集中していることも興味ある現象である。

以下、学生の複数概念を確かめるための日本語訳に関連のある部分のみを取り上げて、日・英両語の名詞に関する複数表現を、(A)形態と(B)統語の面から観察し、後に、誤りの傾向を検討する。

A. 形態

英語の名詞には、ごく一部の単・複同形語を除き、語の形態を変化させて複数形を表わす規則的な文法的現象がみとめられ、その表現法を次のように大きく3つに分類することができる。

A. 1. 語幹に接尾辞を付すもの；

(i) 規則的 (books, boxes, など)

(ii) 不規則 (children, oxen など)

A. 2. 語幹の語尾を変化させて接尾辞を付すもの；

(families, knives など)

A. 3. 母音変化によるもの；

(feet, men など)

一方日本語は、形態の変化による複数表現は存在せず、1つの名詞が単数・複数いずれをも表わす。

A. 4. 1本の鉛筆

A. 5. 3本の鉛筆

従って、名詞の数については、その語が文脈の中に位置づけられた時、読み手の判断に委ねられるわけである。そのため、英語に比べて非常に曖昧であるように感じられるのがその特徴である。

しかし、日本語には複数表現が全く無いわけではない。1つの方法として「…たち」「…がた」「…ども」を含む」という接尾辞を付加する方法である。

A. 6. 家で子供が待っています。

A. 7. 公園で子供達が遊んでいました。

A. 6. は必ずしも単数ではなく、「何人かの子供」という意味もふくんでいる。

A. 7. は複数を表わすことはあきらかであるが、A. 6. と同様「子供」だけでも複数の意味を表わし得る。この「…たち」は、すべての名詞に共通するものではなく、人間と動物の他、擬人化されたもの以外には使用されることが無く、英語のようにすべての名詞に共通するものではない。

もう1つの日本語の複数表現に、形態を重ねる畳語形がある。例えば、花々、山々、家々 などである。これも上例と同じく、ごく一部の名詞にかぎられている。しかも、英語の複数表現 (flowers, houses など) と完全に同じ意味を表わす場合も無いことは無いが、英語のような数の上での単純な複数とは、多少意味にずれがあるといわれている。

A. 8. (a) a house surrounded by trees

(b) 木にかこまれた家

(c) 木々にかこまれた家

A. 9. (a) a house surrounded by elm trees

(b) 榆の木にかこまれた家

(c) 榆の木々にかこまれた家

上記のように複数を意味する1個の形態「木」と、一種の複数表現である畳語形「木々」との意味のずれに関しては、詳述する余裕がないので省略するが、

日本語では、形態1個でも充分に複数を表し得るのである。A. 8. は、(b)も(c)も可能であるが、(c)でなければならない必然性はなく、(b)でも複数の意味は表われている。A. 9. は、(b)の方が自然に複数の意味が理解でき、却って(c)は不自然である。しかし規模が大きい場合は畳語形の方が望ましいこともある。

A. 10. 夕陽に映える山々

A. 11. 大海原に浮かぶ緑の島々

B. 統語

B. 1. 数詞をはじめ、複数をあらわす指示詞、形容詞、句形容詞などを前置するもの

統語的に観察すると英語の複数表現は、日本語のそれと比べて冗長度が高いということは今更述べるまでもないが、1つだけ例をあげておこう。

B. 1. 1. (a) There were three eggs in the nest.

(b) 巣の中には卵が3個あった。

(a)文は three であれば複数であることは明瞭である。にもかかわらず“egg”に複数を表わす“s”を付し、さらに There 構文も、主語となるものが複数であれば、動詞もそれに呼応している。このように複数を示すためには、名詞が複数形態をとるだけでなく、文を構成する他の要素にも影響をおよぼして、それだけ名詞が複数であることを認識しやすくなっている。

一方日本語では、3個であっても単・複同形の「卵」であり、何個あっても「…あった」は変化しない。(b)文で複数を表わすのは「3個」という数詞だけであって「卵」は複数の概念で容易に処理され、冗長度の高い英文と比較しても、何1つ不足のない簡潔な表現である。

また、複数を表わすために前置されるものとして、(句)形容詞 (many, a lot of など) があるがこれも数詞と同様、英語では明らかに複数形の名詞を伴ない、日本語では複数の概念で理解される。

その他、前置されるものとして、these, those のような指示詞があり、これ

らは日本語の複数表現とは必ずしも対応していない。

B. 1. 2. (a) These pictures were drawn by. . .

(b) これらの絵は. . .

(c) この絵は. . .

B. 1. 3. (a) Carry away those desks and chairs out of the room.

(b) あの机と椅子を…

(c) それら(あれら)の机と椅子を…

上記B. 1. 2. の(b), (c)は、いずれも使用可能であるがB. 1. 3. の(c)は使用されていない。

B. 2. 複数を表わす語・句を前置しないもの

英語の複数名詞は、B. 1 のように必ずしも複数を表わす語・句を前置するとは限らない。それらを前置しないものとして次の4種類をあげることができる。

B. 2. 1. 定冠詞を置くもの

(a) The pictures of Queen Victoria and her husband, Albert, were hung on the wall. . .

(b) . . . の二枚の絵が

(c) They have hired a guard whose duty it is to safeguard the works of Renoir.

(d) . . . ルノワールの(何枚かの) 絵を. . .

B. 2. 2. 単数所有格の指示詞を置くもの、

(a) Hellen put her things on the table.

(b) . . . 自分の(何個かの)持ち物を. . .

(c) Tom waved his hands to me from the top of the school building.

(d) . . . 両手を振って合図した

B. 2. 3. 一般的な形容詞を置くもの

- (a) . . . my mother kept every one of these letters, binding them carefully in neat bundles with green tape, . . .
- (b) . . . で(いくつもの束に)きちんと束ねて. . .
- (c) "Will you allow me to examine larger boxes over there?"
- (d) . . . にあるもっと大きな(いくつかの)箱を. . .

B. 2. 4. 無冠詞のもの

- (a) There may be evenings on which she cannot go to the pictures and . . .
- (b) . . . に行かない晩が(何回か)あるかも知れない。
- (c) He can do it on Sundays.
- (d) 彼は日曜日になればいつも(日曜毎に). . .

以上、日・英語の「数」の表現につき、形態と統語の面で必要な部分だけを整理した結果、次のようにまとめることができる。

英語は単数・複数に関しては、体系的な規則をもち、その区別が形の上から明確にされている。しかも、冗長性が高いから、名詞が複数であることを見逃しても、他の部分でそれを補足することができる場合が多いため、比較的容易に複数の概念が得られる筈である。

一方日本語は、ごく一部の名詞を除いてはほとんどの名詞が単・複同形語であり、読解過程において、そのいずれの意味であるかは、読み手の判断にゆだねられるため、英語に比べて曖昧性が高い。従って、複数を明示したり強調したりする時は、数詞を入れたり(B. 1. 1. (b)), 他の表現を用いて、複数であることを間接的に表わす(B. 2. 2, (b)など)必要がある。

V. 日本人学生の「複数形」の処理過程

前章で考察した日・英両語の複数表現の相違をもとに、学生の英文読解過程

を観察すると2つの特徴を見出すことができる。

1. 日本語読解過程の英文読解過程に及ぼす影響

複数名詞の前に、複数を表わす語・句が置かれる場合には、その名詞の単数・複数の判断は、学習者にとって極めて容易である。N. B. 1. 1. の文においては、複数表現の中心語である名詞“egg”が複数を表わす接尾辞“s”を伴っている。しかしながら学生達は、接尾辞“s”を認知するのではなく、前置の複数を表わす語・句を認知することによって、後の名詞が複数であることを理解するのである。この理解の過程は、日本語による読解の習慣が、英文読解に大きな影響を及ぼしていることがみとめられるよい例であるということができよう。

英文を読む時の我々の視線は、スペリングの1字1字を同程度の強さで注視して先に進むわけではなく、意味のまとまりの中の重要だと判断された語を拾い読みしながら進んでいく方法をとるために、各語の端から端まで、すべてのスペリングに目が届いているわけでないのは当然のことである。従って「数」に関しては、複数を示す語・句が視覚に入力されれば、次に来る名詞は単数形であろうが複数形であろうがかまわず、その語幹の意味が理解できれば 複数の概念が得られるわけである。従って、N. B. 1. 1. ～3 に関しては、読解の上で何ら問題がないということができる。

2. 複数を表わす接尾辞の見落とし

複数名詞の前に複数を表わす語・句が前置されない時 (N. B. 2.) には、いくつかの問題点がみられる。学生が複数形に気付かず、単数の解釈になることが、しばしばみられるのである。この見誤まりは、複数形の名詞のすべてに当てはまるものではなく、特に N. A. 1. の中の (i) に属する名詞、即ち、語幹に規則的に“s”または“es”を付して複数形を作るものに多くみられる。同じ A. 1. の (ii) 及び A. 2. と 3. は不規則な複数形であり、視覚的にも“s”, “es”を付するものより目立ち易いこともその原因と思われる。以下、例をあげながら、誤りやすい原因を考察してみたい。

(a) 単純な見落とし

例 (i) He was working beside a big bonfire with a fork in his hands.

“s”を無視しているため、両手に持っていることが理解できない。

例 (ii) Mr. Boggis bought maps, large scale maps of all the counties around London, . . .

(i) と同じく maps の s に気づかず、「ロンドン近郊の州が全部載っている大きい縮尺の地図」となって、「1枚の地図」という誤った解釈が出て来る。

(b) 言語的スキーマ (textual schema) の非活性化

例 (iii) The hawthorn was exploding white and pink and red along the hedges and the primroses were growing underneath in little clumps, and it. . .

“in little clumps”は「小さな群れを作って点々と」という意味であるが、点々とつながっている概念が獲得されておらず、プリムローズの1つの群という意味の解釈に留まっているために、道路添いの hedge の下に、かたまって咲いている花が点々と続いていく美しいイメージを喚起していない証拠である。これは、1つの群れを作っているのであれば、不定冠詞 a が着くということを、知識としては記憶の中に保持している筈であるが、その知識を“in little clumps”に働かせることをしていないため、無冠詞で複数形であることに気がつかず、字句を逐語的に訳すだけで修正がなされていないと解釈することができる。

例 (iv) Green curtains were hanging down on either side of the window.

“curtains”の“s”に気づけば“either”の部分は迷うことなく

「両側に」となるが、“s”は見過され、また、“were”が何を意味するかについても脳の働きのみられないため“either”で停滞してしまう。これも例(iii)同様、言語的スキーマの活性化がみられない例である。

(C) 一般的知識（スキーマ）の非活性化

以下は Roald Dahl の自伝的小説 *Boy* 中の話であるが、まわりの状況は日本語で要約する。

自分の大分年の離れた腹違いの姉とその恋人が、余りにも仲良く自分達だけの世界に浸っている様子に、自分も含めて家族の者は不愉快であった。ある日皆で島へ行き、彼等が泳ぎに行っている間に、彼がいつも口から離さないパイプが自分のそばに置いてあったので、いたずらをしてその中に山羊の糞をつめておいた。やがて彼が海から上り、パイプに火をつけて吸い始めたとき、肺にものすごいショックを受け、驚いて、パイプが口からすっ飛び

．．．(it) went clattering over the rocks.

学生の訳は「カタカタと音をたてて岩の上に落ちた」であった。

びっくりした時は体を支える余裕など無く、ましてや、パイプを口から取ってそっと岩の上になげるようなことはしないであろう。“rocks”の“s”を見落しているため、彼のショックと共に、パイプがものすごい勢いで「(いくつかの)岩に当って…転がっていった」様子が汲み取れないし、彼が変なたばこをのんで、あわてふためいたことが全く伝わって来ない。従って、ここでは、びっくりした時に、持っているものや口にくわえているものはどうなるかというスキーマを持っていれば、見えなかった“rocks”の“s”が逆に見えるようになって来る筈である。

やがて彼が回復し始めた時、姉は

“What in the world came over you !” asked the ancient half-sister, clasping his hands tenderly in hers.

これは“tenderly”という副詞が、意味理解にかなり影響を与えらると思われが、恋人が死ぬか生きるかの状態になった時に、相手はどのように振舞うかのスキーマがあれば、「彼の(両)手を自分の(両)手の中にやさしく握りながら」となって、いかにも恋人同士らしいしぐさをイメージ化するのは容易であろう。しかしながら、実際に動作をさせると、片手しか使わないのは、“hands”の“s”の見落としもあるが、主な理由は“hand”も“hands”も「手」という日本語で充分間に合うことにあると思われる。従って、“hands”「手」に置き換え、そこから理解しようとする過程がよくうかがえる。“in hers”は本論とは関係無いが、“hands”の意味を正確に取っていれば、自分の(両)手の中に(又は、(両)手で)という推論が湧いて来る筈である。何故ならば、彼の(両)手は彼女の片手では握れないから。

一部始終の分った恋人は、怒りを顕わにし、

... and when he started to rise slowly and menacingly to his feet,
we all sprang up and run for our lives and jumped off the rocks into
the deep water.

いたずら心でしたことが、ものすごい怒りを誘い「それから逃れるために(2, 3の)岩を跳び越えて深い海の中にもぐった」というのが表面上の意味であるが、“rocks”とあるのは恐らくごつごつした岩の意味であろう。平坦な岩でなく、足場の悪い岩の上を、捕まったらどうしようと無我夢中で足を運んでいる様子が想像されるし、深い海の中に飛び込んで、ほんとに安心したという対照的な気分まで伝えてくれる。しかし、これは読み手が積極的にテキストに働きかけてスロットをデフォルト値で埋める努力なしには得られない喜びである。

以上、いくつかの例をあげて、学生の誤りやすい訳をあげてみた。翻訳の時間ではないので、微細にわたり複数形を意識しているかを確かめてはいないし、また、翻訳調の訳も求めてはいないが、どの訳にも共通する言語処理方法として、1つには彼等の処理過程が、p.47の図の辞書的処理・構文処理の域を出ていないこと、即ち、スキーマの活性化がみられないことがあげられる。

その理由として、先ず英語から日本語への字の置き替えを行ない、それによって意味づけをしようとするやり方が、しばしば観察されるのである。

(a) in a little clump 小さな群を作って

(b) in little clumps 小さな群を作って

のように、日本語では(a)も(b)同じであるがこの段階では、まだ、意味づけは行なわれていないわけで、その後、“clumps”を、単数・複数の曖昧な「群」という日本語をもとに意味づけを行なうという奇妙なプロセスをとっている。ここで日本語の単数・複数表現の曖昧性が大きな影響を及ぼしていることがわかる。

おわりに

英文読解は受動的な作業でなく、読み手がテキストに働きかける能動的な作業でなければ真の読解には到達できない。文法訳読式で著者の言わんとするところを、何も掴めぬ結果に終るのは、テキストが意味を伝えるものだという誤解によるものである。

筆者は心理学の専門ではなく、勉強の足りないところもあって、スキーマ理論の詳細に至るまで理解できていない部分もあるかも知れないが、テキストが意味を持つのは、読み手がスキーマを活性化させて、テキストに働きかけることが基本であることを強調したい。

英文読解において、このような読みを可能にするには、日頃の訓練が大切になり、教師は必要な部分は徹底的にその理解度を確かめ、学生の読みの不足の部分を補い、さらに、つぎの文の理解につなげる動機づけを喚起させるよう指導することは大切なことである。これは深い読みにつなげるための指導であり、通りいっぺんの文法訳読式では到底達成することは出来ないと考えられる。

本稿では複数表現のみを取り上げたが、その性質上具体度の高い文章が多く取り扱われたが、これだけを見てもスキーマの活性化なしに読み進むことが、いかに非効率的であるかを知ることが出来る。また教師は、読み手のスキーマの活性化を促し、学生が自分なりの一貫性のある推論をしつつ、テキストの意

味を構築していくプロセスを辿ることが、いかに楽しいものであるかを体得させることは重要なことである。

以上

引用文献

- 1) Wilder, L. I. (1935). *Little House on the Prairie*. (edited with notes by Ayako Maeda). p.44, 太陽社
- 2) 依田 新 (監修) (1977). 「新・教育心理学事典」 p.710 金子書房
- 3) 同上 p.453
- 4) J. グリーン (1986). 長町三生 (監訳) (1990). 「言語理解—認知心理学講座 4」 p.50 海文堂出版

参考文献

- Carrel, P. L. and J. C. Eisterhold. (1983). Schema Theory and ESL Reading Pedagogy. *TESOL Quarterly*, 17, 218–232.
- Carrel, P. L. (1984). Schema Theory and ESL Reading: Classroom Implications and Applications. *The Modern Language Journal*, 68, iv, 332–343.
- Cziko, G. A. (1980). Language Competence and Reading strategies: A Comparison of First-and Second-Language Oral Reading Errors. *Language*, 30, 101–116.
- Green, J. (1986). Language Understanding: A Cognitive Approach, —Open Guides to Psychology. The Open University. 長町三生 (監訳) (1990) 「言語理解—認知心理学講座 4」 海文堂出版.
- 井上和子 (1978). 「日本語の本法規則—日英対照」 大修館.
- Kitao, S. K. (1989). *Reading, Schema Theory and Second Language Learners*. Eichosha Shinsha.
- 国広哲彌 (編) (1980). 「日英語比較講座 第2巻 文法」 大修館.
- Neisser, U. (1976). *Cognition and Reality*. W. H. Freeman and Company. 吉崎敬・村瀬晏訳 (1986). 「認知の構図」 サイエンス社.
- Oxford, R. L. (1990). *Language Learning Strategies*. Newbury House.
- 佐伯 胖 (編) (1982). 「推論と理解—認知心理学講座 3」. 東洋・大山正 (監修). 東京大学出版会.
- Rumelhart, D. E. (1977). *Introduction to Human Information Processing*. John Wiley. 御領謙 (訳) (1979) 「人間の情報処理」. サイエンス社.
- 天満美知子 (1989). 「英文読解のストラテジー」. 大修館.

Review of the Effectiveness of the Pattern Practice Method

— A Critique on *Eigo-Jugyo Katei no Kaizen* —

Noriko Nakaoka

I. The Pattern Practice Method has been supposed to be the base of the teaching method of English for a long time at junior high schools. But this method seems quite unsuccessful for various reasons. Some of the reasons are: the big size of class; and the lack of skills of teachers and so on. In reality, students will quickly lose their interest in English in spite of teachers' efforts. Even for the best students, their achievement levels are not so high as expected. Therefore, the Pattern Practice Method is criticized to be unsuitable for Japanese students. Is this criticism legitimate? I will consider its effectiveness in the following analysis.

In his book *Eigo-Jugyo Katei no Kaizen*, Igarashi has pointed out some defects of the Pattern Practice Method and has made two proposals to modify it. By analyzing his criticism of the Pattern Practice Method and his proposals, I will examine the effectiveness of this method. Then I will show the possibility to improve the English teaching method for Japanese junior high school students.

II. The Pattern Practice Method is based on Structural Linguistics and was developed in America as an effective teaching method to promote "skill-getting" activities. Although more than 40 years have passed since its introduction as the main teaching method into Japan, most of junior high school teachers could not understand its essence fully, and could not successfully use it in their classrooms. Because of their failure, they seem to have concluded that the method is not appropriate for Japanese students, and that it should be improved according to the realities of Japanese students. Some of the teachers have completely given up using this method in their classrooms and returned to the conventional Grammar Translation Method.

The Pattern Practice Method is basically characterized by automatic repe

tition of key sentences. According to Igarashi, this automatic repetition drill is not effective to motivate students to study English because monotonous repetition, which sometimes lacks the substance of sentences and places too much emphasis on sentence structures, causes them to lose their intellectual interest in English. Students from 13 to 15 years old grow very rapidly not only physically but also intellectually. Therefore, they cannot endeavor to just repeat meaningless sentences automatically, which do not stimulate their intellectual curiosity. Because of their cultural background, they usually hesitate to make parrot-like demonstration in the public. In addition, students are not required to pay attention to other students speaking English sentences because these sentences have no communicative meaning in themselves. This decreases the motivation level of students to be actively involved in class activities, making it difficult for teachers to organize classes.

The organization of classes where the Pattern Practice Method is used is analyzed by Igarashi in terms of the S-R-E process, which stands for Structural drill → Reading → Explanation. As the Pattern Practice Method is derived from the Structural Linguistics, which is mainly concerned with linkage of words and form, the explanation of the deep grammatical structure and meaning of target sentences is not made sufficiently in class room. As this kind of the explanation is given at the very end of the class, students are forced to do structural drills throughout their class without understanding the meaning and structure of target sentences at all. Besides, even though some explanation is made, it is usually too superficial, and students are not given further drills based on the explanation. So it is very difficult for them to combine previous repetition drills and later explanations of grammar and contents. Looking at the actual situation, it is safe to say that English classes in junior high schools are not well organized centering around the Pattern Practice Method.

In the end, Igarashi has made a few proposals in order to correct these defects of the Pattern Practice Method. His proposals are based on the theoretical study of educational psychology, the psycholinguistics, the linguistics, and foreign language teaching methods. Most characteristics of his proposals is to take away psychological pressure from students, which is supposed to deter them to actively participate in practices. His proposals could be summarized as follows:

Firstly, he argues for the abolition of monotonous repetition drills. Under this new method, students are asked to think in English by considering the meanings of sentences in specific context. Students can grasp more clearly both the meaning and structure of the sentences and their connection through this new drill. He also hints the importance of organized group activities. Speaking practice is checked not only by teachers but also by students themselves, so that all students have to take more active parts in the drills. Each student has to listen to others more carefully, because he has to understand the situation or meaning of speeches made by other students. If students are successfully involved in class activities as he suggests, the amount of class activities of students would increase.

Secondly, Igarashi claims that the organization of class should be changed to be the E-S-R process in stead of the S-R-E process, meaning Explanation comes first, followed by Structural drill and Reading. He insists that structural drills be given only after full explanation of target sentences, because it is very important for beginners such as junior high school students to understand target sentences clearly. Without fully understanding the structural and grammatical meanings of target sentences, two kinds of interference are frequently observed to discourage students from studying English: one coming from the students' native language and the other stemming from previous memories of the structures which they could not fully understand.

If students could overcome these difficulties by the adoption of the E-S-R process, he claims, students could gain much more self-confidence in exercising drills. Moreover he supposes that students will be able to develop their reading ability much more easily by the E-S-R process. When the explanation is given as early as possible in classes, students could understand both the meaning and sentence structure of reading materials. These understanding is necessary for students to put right intonation and stress on the reading.

Igarashi's approach can be summarized as follows:

- 1) Language drills should not be automatic as they are in the Pattern Practice Method, but should have situational meanings. And also drill activities should be organized as small groups.
- 2) Explanation and analysis in foreign language learning should be given a more important role than it has had with the Pattern Practice

Method. Classes should be organized by the E-S-R process.

III. I have summarized the important points of the proposals made by Igarashi in the above. Although he has made a stimulative challenge to the common understanding of the Pattern Practice Method conceived by many experts, all of his argument is not necessarily well supported by the facts. I will make a critical review about his major points. We will answer the following questions: Firstly, does every automatic drill reduce the motivation levels of students as he claims?; Do students have to understand the grammatical structure and meanings of target sentences as soon as classes start?; Should the S-R-E process be totally replaced by the E-S-R process?

Although I agree with some of Igarashi's criticism about the Pattern Practice Method, it does not necessarily mean that I support his argument without any reservation. I believe that the Pattern Practice Method should be basically effective even in Japanese junior high schools in spite of cultural and psychological difficulties as he pointed out. But when I say that the Pattern Practice Method is effective, I always bear in mind that there is some strict limitation of its applicability, which is usually ignored by both proponents and opponents of this method.

Firstly, I would like to refute Igarashi's argument that automatic repetition in the Pattern Practice Method would lower the motivation level of students. He emphasize too much negative aspect of this method, and misses the positive effect on students. Language learning inevitably requires students to make an intensive repetition exercise. Repetition, even monotonous repetition, would be effective to make students to memorize key sentences. Another important point at this repetition stage, which is usually underweighted by many teachers, is that they could correct English pronunciation and rhythm of students. Although it is actually an effective method to make students memorize a key sentence pattern, it is quite a big burden for students to memorize key sentences. But they might feel satisfied when they successfully memorize them, particularly when they speak them with right pronunciation and relevant speed. This would make them feel at home with English and also strongly motivate students to continue learning English. In general, an intensive application of the well organized Pattern Practice Method will prepare the firm basis for students to speak English with fluency.

Needless to say, if only automatic repetition drill is applied, students will quickly lose their interest in learning foreign language. Teachers have to prepare the next stage. Substitution drills are to be recommended. Using repetition and substitution drills, teachers should pay close attention to the meanings and situation of sentences used in drills. Teachers should not allow students to produce meaningless sentences just by substitution of words or simple repetition.

After students go through these basic structural drills, practice materials should be developed to meet the interest of students. When practice materials have situational meanings, students can deepen their understanding of target structure with a vivid reality. Then teachers should encourage students to speak English and provide them situations to communicate among a small group. At this stage, an important point is that teachers should encourage them to express themselves even in incomplete sentences. They had better neglect students' mistakes unless students ask them to correct mistakes.

Most of school textbooks have been basically organized on the Pattern Practice Method. These textbooks, however, tend to lack sufficient examples to provide adequate practice of structures and also tend not to appeal to the intellectual interest of students. This defect is one of the major reasons which cause students to lose their motivation. Igarashi seems to have overlooked this serious problem inherent in textbooks. He argues for more effective use of the current textbooks. But his effort would be fruitless if he uses the current textbooks. If he would like to improve the teaching method for Japanese students, he needs a new textbook. Igarashi demonstrates his own idea by using the current textbooks to teach passive sentences. But I have to conclude that his attempt would fail because he could not give situational meanings so long as he tried to use the current textbooks.

Against his argument, explanation must not always precede structural drill. Whether explanation should be made depends on the type of structure of target sentences. In the case of typologically different structure or concept from the native language, explanation should be prepared before drills. Otherwise, it is impossible for students to infer what they are learning. With the S-R-E process, most students are either at loss or apt to misinterpret a structure by making wrong guesses or applying the similar structure of the native language to English structure. Take "be" for example, most begin

ners are inclined to misinterpret it as the Japanese particle “wa”; “My favorite song *is* Imagine.” (watashi no sukina uta *wa* Imagin desu.)

On the other hand, in the case of an easy structure, the S-R-E process may make students to develop guessing ability to interpret a new structure. To develop this ability is quite essential for foreign language learning. In this guessing process, students get at least some idea without trying to translate it into Japanese. This is true of the plural structure. It is simple enough to understand from well organized drills, but its usage is difficult and needs intensive practice.

IV. With the help of the study of the linguistics about typologically different structures, we can get some insight about difference between English and Japanese. We will also get some ideas on how to deal with this difference. English is typologically quite different from Japanese. Noam Chomsky notes this fact in his book entitled *Lectures on Government and Binding* referring to Hale’s argument. According to Hale, English is configurational type, and on the other hand Japanese is non-configurational one.

“Hale (1978) has suggested that languages fall into two major typological categories; configurational and non-configurational. The formers are of types we have been considering (English). In the latter, the full range of syntactic configurations is lacking in various degrees, and order of constituents is typically fairly free, though there may be preference rules, which we will disregards. He has also suggested that in non-configurational languages there are no empty categories, hence no transformational rules in the syntax, assuming trace theory. Hale suggests that Japanese is essentially of the non-configurational type.”¹

As Hale suggested, English and Japanese are typical languages representing two major typological categories. From this linguistic point of view, English is considered to have many grammatical structures which cannot be easily understood by Japanese. Even after full explanation about a typologically different structure is given in the beginning of the class, most Japanese students are still supposed to have some difficulties to understand the difference of two languages.

Nowadays, we can see the rapid development of linguistic studies. In the near future, we will have a new analysis of typological differences between English and Japanese. If teachers come to understand and take full advantage of the new result of linguistic research, they can teach students about target structures more successfully.

I would like to suggest teachers that they should recognize the difference of configurational and non-configurational languages because linguistic studies have made a rapid progress in this field. We should utilize these results for improving the teaching methods. Teachers should spend more time to teach students about the difference of language structures and to provide students with intensive structural drills based on the academic achievement. Structural drills and grammatical explanations should be combined in classrooms systematically.

Following grammatical features of English reflect typological difference from Japanese.

- 1) English is classified as a SVO language and Japanese as a SOV. English word order is very strict, on the contrary Japanese word order is rather free so long as verbs are placed at the end of sentences.
- 2) The grammatical function of the subject and the object is determined by the word order.
- 3) Question formation is made by changing the order of the subject and the auxiliary in English.
- 4) Noun phrases are preceded by preposition except the subject and the object in English; *with her, at home, for me, to school*. While in Japanese a word which has the similar grammatical function as preposition is put after noun phrases. Every noun phrase is modified by a case article placed after them; *kanojo to, ie de, watashino tameni, gakko e*.
- 5) Relative clause formation is structured in the opposite order. In English the head noun precedes its relative clause, and in Japanese the relative clause precedes its head noun. Besides, Japanese has no marker functioning like relative pronouns. English has several relative pronouns.

e.g. English : the book *which I bought yesterday*
 ↖
 Japanese : watashi ga kinou katta *hon*
 ↗
 (I) (yesterday)(bought) (book)

In addition to typologically different structures, there are other kinds of grammatically difficult properties of English for Japanese students to understand. English has conceptually different properties from those of Japanese. In order to teach Japanese students to understand conceptual differences between English and Japanese, teachers should have the deep and profound understanding of them and know how to introduce and explain it to them with ample of examples.

Next, I will take articles in English for example. Since Japanese has no articles whose functions are the same as English, Japanese students can hardly imagine the function of English articles just by making guesses based on the native language. The teaching of the basic concepts of English should be organized in a systematic way, emphasizing the definition of English properties such as countable and uncountable noun. Moreover, in order to understand the proper usage and concept of the articles, students must learn the context of the sentences and the intended meanings of speakers. Robin Lakoff deals with this problem and discusses the limitation of the Pattern Practice Method as following.

“With rote pattern-practice alone, he would either be helpless presented with a situation that fell outside of the patterns he had studied (which would, of course be extremely frequent) or he would overgeneralize, applying a pattern where it did not fit, since he would not know the reason why that pattern took that form. This is often true, as anyone who has taught English to speakers of Japanese knows. Either the article is omitted entirely where it should appear, or the wrong one is used, since the speaker has no idea which, if any, article is correct in the given environment.”²

Judging from these linguistic facts quoted above, we can easily understand why Japanese students need more and deeper syntactic explanation than in the case of French students who study English.

V. In conclusion, I have suggested that there are different purposes of pattern practice and grammatical and structural explanations about target sentences and the application should be made on specific structures of key sentences. I cannot accept Igarashi's argument that we should modify the Pattern Practice Method and could use current textbooks.

But I must recognize the necessity of modification of the Pattern Practice Method with quite different perspective from Igarashi's. Specifically speaking, the modification of the method should be made not based on Igarashi's argument but on the recent study of the linguistics, which is helpful for us to decide on which teachers place more emphasis, pattern practice or grammatical explanation. Igarashi's argument is too much discretionary for teachers to have any general guidance. And current textbooks which have been used for years do not satisfy the above-mentioned conditions. Therefore, only the modification of the textbooks widely used in class rooms is not sufficient. We should edit a new type of textbooks in accordance with the Generative Grammar, which has been developed by scholars such Noam Chomsky. Textbooks should be compiled to reflect such a recent theoretical development of the linguistics.

Notes

- 1 Robin Lakoff, "Transformational Grammar and Language Teaching", *Language Learning* VOL.19, 1-2, 1969, PP.126
- 2 Noam Chomsky, *Lectures on Government and Binding*, Holland, Foris Publication, 1982, PP.128

Reference

- Chomsky, Noam. *Studies on Semantics in Generative Grammar*. New York: Mouton, 1972.
- Chomsky, Noam. *Lectures on Government and Binding*. Holland: Foris Publication, 1982.
- Fries, Charles C. *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1945.

- Igarashi, Jiro. *Eigo-Jugyo Katei no Kaizen* (the Improvement of the Teaching Process in the English Classroom). Tokyo: Taishukan-shoten, 1981.
- Inoue, Kazuko. "Bunpo" (grammar), in K. Inoue (eds.) *Koza Gendai no Gengo Nihongo no Kihon-kozo* (Series Current Language Basic Structure of Japanese). Tokyo: Sanseido, 1983.
- Inoue, Kazuko. *Henkei-bunpo to Nihongo, jo, Togo-kozo o Chushin ni*'' (Transformational Grammar and Japanese, Vol 1, Mainly about Syntactic Structure). Tokyo: Taishukan-shoten, 1976.
- Hankamer, J. *Constraints on Deletion in Syntax*. PhD Dissertation, Yale University, 1971.
- Lakoff, Robin. "Transformational Grammar and Language Teaching", *Language Learning*, Vol.19, 1969.
- Rivers, Wilga M. *A Practical Guide to the Teaching of English as a Second or Foreign Language*. New York: Oxford University Press, 1978.
- Rivers, Wilga M. *Teaching Foreign-Language Skills* (2nd eds.). The University of Chicago, 1981.

アフリカーンス語の南ア英語に与えた影響

佐々木 卓 爾

序

この小論文は言語方言の接触ということと同時に隣接している言語同志間の接触の経緯を少しく述べたものであり、ここに南アフリカ共和国内における南ア英語の推移とそれと関連のあるアフリカーンス語を取り上げ、それらがいかなる形で関与し合ったかを取扱った。アフリカーンス語はその成因に関し、クレオール問題との絡み合いにおいて興味ある事実を有する^{註1)}。しかし南ア共和国内の英語自体も非常に複雑なものがあり、社会言語学的に見て混み入った変化を遂げているものであるのでここに紹介しておきたいと思う。これを詳しくここに取り上げるスペースの余裕もなければ資料も乏しい状況にあるのでここでは掻い摘まんで概略のみ述べてみることにする。

まず、この国の言語の人口構成をみると（この場合黒人は除外することとする）、

公用語である Afrikaans 語使用者	3,421,000
公用語である英語使用者	1,423,000
両方使用者 (bilingual であり、特に diglossic ではない (筆者註))	1,022,000

(E. B. Van Wyk による)

Afrikaans 語使用者の中で、

White Afrikaans	1,797,000
Coloureds	1,620,000
Indians	5,000

英語使用者の中で、

Whites	1,120,000
Coloureds	123,000

Indians	180, 000
両方使用者	
Whites	685, 000
Coloureds	303, 000
Indians	33, 000

(E. B. Van Wyk による)

この統計から白人の数は3, 602, 000となるが The Story of English (R. Mc Crum et al) によると黒人の数2, 500万人で白人の数は450万人であり、その中 Afrikaans 語を話す者は60%であるとなっている。(両者の調査に距りがある理由は検討していない。) Wells によると2000万人の3/4は Bantu 語 (Zulu, Xhosa, Tswana, Sotho 語など) (筆者註, 恐らくこの中の相当数は共通言語として Fanakalo 語を使用している) 使用者であり, あとの400万人位が欧州語系の人びとで, その中アフリカーンス語は3対1の割合で英語より使用者が多いとある。

(註1) アフリカーンス語はオランダ語の方言が元を成している。Cape Dutch にポルトガル語系クレオールが影響し, それに Cape に住む現住民やナマ語をふくむコイ語 (ポッテントット) それにマレイ語系のことばなどとの混合により Afrikaans 語が出来上がった。これは主として奴隷や解放された人, それに召使らが使ったことばを白人も真似るより必要として使い始めた。この言語はその成因により当時の lingua franca であるポルトガル・クレオールを部分的ではあるが取り入れていてセミ・クレオールと呼ぶ。そしてこれが徐々に basilect (下級方言あるいは下層方言と訳している人がある。Stewart という人の coin した用語) から acrolect (上級方言あるいは上層方言と訳している人がある。) に格上げされて行って, つまり prestigious になって文明語も入って南ア共和国の国語・公用語の地位を得た。しかし学者によってはこのセミ・クレオールと creoloid (シンガポール英語など。Platt という人が coin した用語) というものを区別している。これらはどちらも言語同志の接触が必ずしも突然起こったのではなく, 徐々になされた点で共通している。creoloid の定義は3つばかりあるがここでは省略する。即ちこれらは新しい言語ではあるが完全に新しい異なった言語として再構成されたビジンを経てもクレオールにはならなかった。このようにセミ・

クレオールはクレオールのように国語や公用語になり得る資質を十分具なえているが、creoloid は下級方言の域を出ないでいる。そして環境によってはビジンも creoloid も將又セミ・クレオールも、クレオールでさえだんだん消えて行くこともある。つまり decreolize されて終にはアメリカ黒人英語のような post-creole continuum (De Camp という人が coin した用語) になる。しかしアフリカーンス語のように廻りに標準体をなす元の言語の無い場合はそうはならない。(アフリカーン語の場合はオランダ語。) アフリカーンス語でおもしろいのは二重否定語 (nie~nie) が否定を表すことである。

序 論

現在の南ア共和国地域はグリーンバーグの説によると、初めコイサン語族 (ホッテントット, ブッシュマン) がおり、続いてニジェール・コルドフエンの一派のバンツー語族の諸語を持つ民族が南下したことになる。ヨーロッパ人としては南からオランダ語の一方言をもつボーア人 (Boer) (農民という意) の侵入があり、コイサン語族はカラハリ、ナミビア方面に追いやられ、あとをバンツー語族、ボーア人で占められていく。最初のオランダ人は1652年に Cape にやってきたことになる。

降って1820年になり、英国から最初に人びと (settler) が渡来した。これらの人びとはボーア人の場合と同じくやはり Cape から上陸した。イギリスは1806年から Cape を占拠していたが、政府が正式に5000人の植民を東ケープに送り込んだのがこの1820年であった。

この英語民族移入がアフリカにおける English の始まりであり、その後幾許もなくして Natal 地方 (東南海岸地帯) に1850年代と1860年代に独自のグループが移民してきた。

東ケープに地歩を占めた英語は当時西ケープ一体を支配していた Boer 人の子孫の話すオランダ語方言の影響を直ちに受けた。実は19世紀にはこのオランダ方言はポルトガル語系クレオール、(詳しくはマラヨ・ポルトガル語クレオール) の影響、Cape の原住民の大部分の Khoi 語 (ホッテントット) の影響等により Afrikaans 語に完全になっていた。1 説には17世紀にクレオール化し

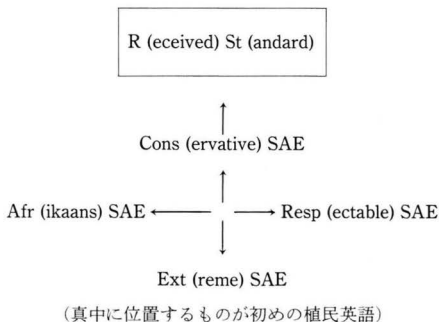
た(Wardhangh)。でも18世紀には既に現在の形であったらう。それで19世紀のその頃その語彙が英語の中に入って行った。そして20世紀へとこの語彙移入の現象が続いて行った。この外バンツール語族のZulu語やXhosa語、それにコイサン語族のKhoi語の語彙も直接英語に入って行った。

1820年以来、東ケープに移住していた英国人たちは労働者階級なので中流以下から下層階級の人びとで占められていた。それ故かれらは30の異なる地方からやって来ていた者たちであり、一種の「植民英語」を語っていた。中でも数にしてHome Counties^{註2)}出身者が圧倒的に多く、その発音はその地方の英語を基盤としていた。

発音の面から言うと、これらの英語はその当時のかれらの意識の上ではだんだん世間を知るに連れ一つの規範からずれたものに感じた。特にHome Countiesあたりのいわゆる社会的に汚名のある単語の頭の/h/音脱落や誤った(変った)/h/音の出し方、語尾の[ŋ]音の脱落等の現象は南アフリカはむしろ親や教育の現場に携わった人がその発音を矯正して行くことにより、19世紀になるに従って中流階級意識が芽生えて、社会的規範からしては正しい方向に進んで行った。これはオーストラリアでかつて花が咲いた極端な口語英語から見ると以外に映るかもしれない。(オーストラリア英語もかつては/h/音脱落があったが今日ではもはやこのような現象はない(Trudgill)。)

そこで南アフリカ英語で、一番特徴的なことは一般にいう南アフリカ英語(general SAE)があることである。Capeではそれが「植民地英語」として発達して行ったものが更に進んで、もはや1870年以前に目立った形の特徴をもつ“Cape Settler English”という「極度の南アフリカ英語」(Ext SAE)に発展していたことである。これが南アフリカを代表する英語(general SAE)と考えてもよい。

Lanham という人が組立てた schema は下記の通りである。



(註2) the Home Counties は London 近郊諸州のことで Middlesex, Surrey, Kent, Essex をいい、時には Hertford, Sussex を含む。the Home Counties English とか the Home Counties accent といい、独特なものがある。[ɪ] の vocalization は有名である。そして [ʊ] のような発音になる。特に /l/ の前の /ɪ/ と /u/ や /ɒ/ と /ou/ は音価がいっしょになってしまう傾向が Home counties の中の Clacton や Walton という所などにある。例えば、pull と pool があるいは doll と dole が同じになるとか。

以下それぞれの SAE (南ア英語) 及びそれぞれの SAE の関係、変遷について簡単に述べ、最後に音声の問題に触れてみたいと思うが、スペースの関係上主に Afr SAE を取り上げてみようと思う。

アフリカーンス語といえば註でも少しく述べたが、English の外のもう一つの重要な公用語で、社会言語学から見ても複雑な発達をしている。1910年南ア連邦が成立した当初、英語とオランダ語が二大公用語として憲法に謳われたが、アフリカーンス語がその後オランダ語の地位を得、1925年に公用語として指定せられた。それにともないオランダ語とアフリカーンス語間の diglossic^{註3)}な関係は消滅した。

(註3) diglossia は社会言語学上重要な現象の一つであり、2変種間の言語の使い分けを意味する。bilingual や bidialectal のようにいつ何時においても自由に2変種が話されるのと区別する。言語は社会条件によってさまざまな現象を起すが、diglossia は1言語の中でも完全に異なる階層間で起り、2変種の high variety (acrolect) と low variety (basilect) の間で L variety の民族や言語集団が目的によって H variety を使うことをいう。Ferguson が coin したものであるが、これを1言語の中の2変種から2言語である2変種間に拡大解釈したのが Fishman である。例えばニューヨークのプエルトリコ人は商賈では英語、家庭や自分のコミュニティではスペイン語や Nuyorican を話している。しかしクレオールも完全な独立言語であるし、このクレ奥ールの1言語内で diglossia 現象が生じる場合が案外多く、社会言語学者が取上げるのもこの場合が多い。Afrikaans 語も一種のクレオールであり、当然 diglossic な事態があった(オランダ語との)。1言語内の2変種の H variety と L variety はクレオールに於ては甚しく、H と L は融合せず階層が遊離しているか、主従関係で社会的に関係が粗であるとき、その中間の変種 M variety (Mesolect) が生まれてこなく、一つの言語にはなり難い。つまりその言語のある連続体 (continuum) が生じてこない。つまり diglossic なのである。現在の Haiti のフランス語と Haitian Creole は国内民族事情によりそうであるし、アメリカのかつてのガラ語 (Gullah) と英語、奴隷解放前の黒人クレオール英語も英語と diglossic な関係にあった。また2言語間ではスリナムのスラナム語とオランダ語間にも生じている。

これと反対に diglossic でない場合、すなわち階層が段だん崩れて行つて、H variety と L variety が混合して行つたらどうなるか? その社会では L が H にちかづいて行き H の方は逆に L に影響されて行くことになる。そうするとその中間体変種 (M variety, Mesolect) が生じてくる。クレオール言語社会ではつまり脱クレオール現象 (decreolization) が起る。そこに立派な標準語があつても Haiti のように標準化(標準フランス語化)しない所もあるが、大ていは標準語化する例が多い。ジャマイカの英語やアメリカ南部の解放後の黒人英語も段だん decreole 化してしまひに無くなる運命にあるかも知れない。つまり代わりの言語連続体が生じる。アメリカでは地理的に頑なに守つた Gullah ですら decreolize されてきたのである。そして南部の黒人英語にアメリカ標準英語が強くなり込んでかの南部黒人英語あるいは“南部べん”という連続体ができ

てしまった。これらが post-creole continuum である。

一方 diglossia の場合は 2 変種がお互の立場を堅持して、L variety は H variety に拘わり合いが無い、つまり prestigious なものに左右されず、むしろその変種（言語）に独自の上昇があり、H variety（標準語）にならうとする。Haiti の場合も Haitian Creole Continuum が標準語化して行き、新たな連続体は生じないで、フランス語の領域に達しようとしている。Afrikaans は完全にそうってしまった。スラナム語もスリナムでは有力言語であるし、スワヒリ語、インドネシア語、アラビア語も国語や標準語（これらはリンガフランカでもある）になった。皆 diglossic な状況から発展した。

有名な Norman Conquest においては、Norman French が H variety で Anglo-Saxon 語が L variety であった。そしてこの状態が300年も続いたが両語は diglossic な状況であったので、L variety の Anglo-Saxon 語が徐々に主体性を取り戻してくるに従ってこの言語が近代的な国語へと発展していく。という筋書きであるが、果たしてビジン化の状況が無かったか。恐らくそこには非常に複雑な状態があったと思う。Conquest の初期に Anglo-Norman か Norman-Angle のビジンが恐らく生じた中から M variety が標準化して行ったという図式だが、それより両ビジンは衰微して行ったと考えて diglossia が起ったと捉えた方が今の段階では妥当らしい。完全にそうであったかは今後の研究に俟たねばならない。それにしても Anglo-Norman と恐らく当時 Anglo-Saxon のビジンとは構造が似ていたので語交換 (relexification) が盛に行われ、Anglo-Saxon ビジンが中世英語へ発達して行ったとも考えられる。

日本においても明治までは diglossia の状況にあった。H variety は当然文化語であり文語であり、教えられる変種であり、L variety はおぼえる変種であり民衆語であるから、武家政治時代は権威ある武士ことばあるいは江戸時代の江戸共通語（謡曲等）が H variety で、藩間の lingua franca であり、各藩内の方言が L variety であった。商賈には、例えば京都大阪と日本海、または北海道の江差等の諸港との交易には浄瑠璃ことばが使われた。

これが 3 変種（3 言語）になると Triglossia (polyglossia) になり、ルクセンブルグでは民衆語 (L variety) は Luxemburgish（ゲルマン系）であるが、H variety のドイツ語とフランス語の間でユレ動いている。(Norman Conquest の後の Anglo-Saxon,

Anglo-Noman それにラテン語の関係も実際は Triglossia であった。)

Afrikaans を話す Afrikaner たちには bilingual として話す英語に 2 種類ある。つまり Afr SAE (アフリカーンス南ア英語) Afr E (アフリカーンス英語) の 2 種類がそれである。前者は彼らはそれを first language として話し、後者の方を second language として使用している。

以下ここではアフリカーンス語が如何に SAE (南ア英語) に影響を及ぼしたかを取り上げ、Afr SAE の phonology 関係について述べてみたいと思う。しかしその前に SAE (南ア英語) 全般について略述しておくことにする。

蛇足ではあるが言うまでもなく南アフリカ共和国や南アフリカ地域にも黒人の英語 (SABE) (South African Black English) やインド人の英語 (SAIE) (South African Indian English) や混血種族の社会 Coloured Community における英語問題、それに Whites 間の bilingual の問題、黒人問題の中の黒人言語に関する共通語及び黒人の英語やアフリカーンス語に対する態度の問題、黒人共通言語としてのファナカロ語 (Fanakalo, Fanagalo)^{註4)} の公用語とする問題等論すべきことは枚挙に遑がない。

(註4) この言語は南部アフリカでは大へんな言語であり、黒人の共通語として南アから北はアビシニア高原にかけて広く分布する勢いにある。ビグミー人にもこれを理解するものがある位である。lingua franca (共通言語) の中には最有力なビジネスワヒリがアフリカの中央部を占めていて、その言語の中の Ngwano, Bangala, Fiote, Boluba の諸語がそれぞれ Congo を中心に語られている。更に南に降っては lingua franca として Nyanja が今のマラウィ (ニアサランド) に、Umbundu が中部アンゴラに、Lozi がザンビア (北ローデシア) に、Luvale がザンビアやアンゴラとザイールの一部で語られているという。がそれらと重なって lingua franca として広く分布しているのが Fanakalo である。

Fanakalo 語はニジェール・コルドファンの 1 派 Bantu 語派の一つ Zulu 語が中心のクレオールである。南ア内の Bantu 語派の四つのグループを挙げると Nguni, Sotho, Tsonga それに Venda グループとなる。そしてその最初の Nguni の中に Zulu 語と

Xhosa 語（これらはコイサン語族の影響で吸着音 (clicksound) を有するが Fanakalo 語にはこの音は存在しない）があり、その Zulu 語とインドヨーロッパ語の英語とアフリカーンス語とが混じり合って出来たのが Fanakalo 語なのである。この Fanakalo 語の語彙の大部分は英語であり、アフリカーンス語や元のオランダ語の部分は比較的少ない（4 : 1）。Bantu 語からの要素では文法や基本語は殆ど Zulu 語で Xhosa 語からはほんの僅かしかない。

この言語は1823年以後に Natal 地方（南アの東南の海岸地方）に始まる。それはちょうど英語民族が植民し始めた頃である。そして20世紀初頭この Fanakalo で書かれた文学作品が登場してくる。この言語の使われ方が興味あることにインド人と Zulu 人との間で会話がなされたことに始まる。この言語を Zulu の人びとは Isikula (“Coolie language”) と呼んでいた。インド人は1860以降 Natal 地方に大量に労働者として入り込んだ。Natal Fanakalo はその後金・ダイヤモンド鉱山や南アや南ローデシア（今のジンバブエ）の工業農業労働者のことばとして浸透して行った。今日では Witwatersrand で一番よく使われていて、鉱工業方面ではこの言語が無ければ克服できない困難な諸問題が生じていただろう。鉱業主たちは広く労働者を今のザンビア、マラウィ、タンザニア（当時のタンガニイカ）方面から雇い入れていたから。つまり Fanakalo が唯一の共通言語であったのである。そのことから雇主は採用する前に Fanakalo のコースを卒業させて労働者たちを使った位である。この言語は今のザイール地方にまで発展しているが、そこにはもう一つのより強力な Swahili があるので仲々それ以上の浸透はむずかしい。この言語が今後南ア共和国の公用語に指定されるかどうかはこれからの問題とならう。

Fanakalo 語の単語を 2, 3 挙げてみると、

E → F では sack → sak, coffee → koffie,

bottle → bottel

A → F では melk (*milk*) → melek

botter (*butter*) → botela etc.

また、バンツール語独特の複雑怪奇なアクセント形態がすべて無くなってしまってスワヒリ語のように非常にスッキリしたものになっている。（スワヒリ語も Bantu 語の一つであるが、これもケニア海岸辺りのボコモ族のことばにザンジバルのアラブ語が

影響して、いわば混淆語となり、まだバンツー語のクラス形態という文法要素は残しているものの Bantu 語族の tonemic なアクセント形態（アクセントは高低で活用によって複雑に変わる）はスッカリ失われている。）また共通言語 (lingua franca) の好ましい要素としてそれは neutral であることが望ましい。例えばスワヒリ語は東アフリカ地帯の lingua franca で殆どの部族語でもないし、インドネシア語はマレー語とともに完全な neutral である。英語は世界共通言語にならうとしているが、如何にせん neutral でない。これが neutral な英語に変えられればそれに越したことはないが、それもむずかしい。南アではファナカロ語が最も neutral な域に来ているが、政治的な barrier があり、仲々むずかしい。

南ア英語 (SAE) について

1800年代前半になり、英語、オランダ語の人の混血が進み、また牛車で
の旅により Cape 地方からの拡散はアフリカーンス語の人口の方を減らす結果
に繋がったが、混血により発音の面などには種々アフリカーンス語の影響を残
した。特に /r/ 音などに特徴づけられている。

これに反し Natal 地方（東南海岸地方）などは最初は殆ど Afrikaans の影響
を蒙っておらない地方であったが、後になって Cape 地方からの移民で Cape
地方英語なまりをそのまま残した形になった。そこへ今度は1850年頃になり英
国の北方、主に Midlands や Yorkshire あたりからいわゆる「金を持たない貴
族」つまり退役軍人らが移り住むようになって標準的英国英語を移入すること
になった。（勿論かれらは標準英語を知っていた。標準英語は発音は地方なま
りでも標準言語なのである。）そこでここでは前の Cape からの移住者と大し
た相克もなく、むしろ標準英語に近い形の方に統一されて行った。これが Resp
SAE (Respectable SAE) であった。上品な南ア英語とでも言うか、後にこれ
と Ext SAE が南アを代表する General SAE と考えられるようになった。

Cape や Natal その外の都会地ではその後英国と同じアングリカン学校や私
立学校などが出来、英国の伝統を叩きこまれたので、かれらのいわゆる若い知
識グループらは RP に極く近い Cons SAE (Conservative SAE) を話していた。

(RP は Received Pronunciation の略。オックスフォード英語とも Queens English とともに BBC 英語とも言われ、標準英語の中で特殊な位置を占めていて、発音に特徴があり、この発音でなければならない特殊性を持っている。) Cons SAE は R St (Received Standard) にも非常に似通っていた。というのは R St は RP そのものと言ってもいいほど軌を一つにしていたから。しかし Cons SAE は Natal 地方一般に語られていた Resp SAE とは一線を画す面があった。

19世紀も終わりに近づき南アでは金、ダイヤモンド等が産出することがわかり、鉱産物革命が起こった。その事を聞きつけ英国からはひきも切らない移民現象が起り、東欧からの避難民も交じえてかれらは主として Johannesburg や付近の高地である Witwatersrand, あるいは Transvaal 地方にやってきた。一方国内では Afrikaner はかれらにとってもそこは魅力的な場所であることに気付いた。

1930年代になり金採掘やダイヤモンド採掘が本格化し、事情は進展した。Cape 地方や Natal 地方からは Johannesburg はか鉱工業の産地に移り住む者が特に殖え、そこでは経済的に安定した新しい社会が出来始め、種々雑多な人種民族の集まりの中に階級社会が生まれ始めた。この事は Cape や Natal では考えられそうもないことであった。いわゆる俗に言う「鉱山成金貴族」(the miningplutocracy) である。そして当然のこと乍ら新たに上流、中流、下層階級が出来だした。そういう中の通念である社会伝統としては、「英国伝統」と「南ア伝統」というこの二つが共存していたことがいみじくも考えられるのである。

Cape における伝統も、Natal における伝統も両方とも長く培われてきた「南ア伝統」に根ざしているとすれば、この両伝統を土台にして出来た鉱山地帯の新たな伝統にしてみれば、あとから持ち込まれたいわゆる「英国伝統」は彼らには奇異なものと映った一方、さりとてこれが祖国の伝統としてみれば彼ら自身のものよりも prestigious なものと受けとられる場合が多かったに違いない。しかしこの「英国の伝統」も Ext SAE の発展とともに徐々に崩れていくのである。

それでは南アでの英語の面ではどうであったか。SAE にとって大切なこと

は Ext SAE (Extreme SAE 極度の南ア英語) の存在である。Ext SAE はもともと1820年の植民の極く若い人びとの間の砕けた会話 style から始まった。Cape はその頃 London や Home Counties, それに英国東南部の労働者階級で占められていた。そこへ今度は中流の初期ビクトリア社会の格式張った人びとが移民してきた。かれらは前からいる Cape の人びとの言語の中で自分の言語を維持しなければならない困難な状況の元にいたが、しかしかれらは前世紀即ち18世紀の英語の誇張的表現の傾向や自分たちの言語の正統性を考え合せると、これを維持しようと計ったのである。例えば, [h] や [ŋ] の脱落を防止しようとしたり, むしろ hypercorrection で /w/ を aspirate したりもした。しかし所詮この中流階級英語は Ext SAE に呑み込まれる運命にあった。かくして Ext SAE は植民たちのそして南アの general SAE として発展して行くことになる。

ところがそこに現われたのが Afrikaner たちとの混血現象であった。19世紀もだんだん進むにつれこの混血が盛になって行って, かれらのことばの Ext SAE は重大な転機を迎えることになった。英国植民の子孫たちは自分たちは英国人の子孫であるという identity は払拭しきれなかったにしても, 他の Afrikaner たちとの混血は限りなく続き, ことばの口語体系に種々変化と革命が齎らされたのは事実である。オランダ語はもう既に Afrikaans 語として確立していたし, もともと英語と Afrikaans 語は直截的に混じり合えるようになっていたから, Afrikaans 語の音韻は Cape Settler English の Ext SAE への発展に拍車を掛け, Ext SAE はその独特の方向へ進んで行った。即ち現代の Ext SAE の域に変わってしまっていた。

ここで Ext SAE の普及の状況を述べてみると, Ext SAE はケープ・オブ・グッドホープから mining district に広がるにつれて数多くの人びとが使用し, 東欧からの避難民たちは一世世代に成し遂げられなかった Ext SAE への同化を二世世代になってやっと果たし, 母国語として得意げに使用する現象を生じた。mining city では Ext SAE を使用したのは大方の男性で, 女性には依然として Resp SAE を使用するものが多かった。(Ext SAE と Resp SAE を合わせて普通 general SAE と呼んでいる。)

Ext SAE の発展に絡む他の状況やその重要な要因はやはり第2次大戦の状

況である。第2次大戦終結までは大英帝国の陰然たる勢力があったが、大戦終了ともなう大英帝国の崩壊により情勢は一変して英国との密接な繋はブツンと切れ、南ア社会は政治社会経済機構が以前は倫理的にも言語的にも移民の子孫たちと一体をなしていたものが大幅に崩れ去り、英国人の都市 (Johannesburg, Cape Town, Durban, Port Elizabeth) などは経営層にアフリカーナーが、そしてビジネスの大立者に東ヨーロッパからの子孫たちが加わるようになった。英国臭のある工業金満家たちは細々自分らの社会に閉じ籠るしか方法がなかった。つまり「南アフリカ伝統」が「英国の伝統」を駆逐して自分たちの伝統を作り上げてしまった。スピーチパターンなども東ケープのような発祥地でこそ Resp SAE が強いが全体として Ext SAE を基にした SAE が新しく南ア英語の地図を塗り替えた。(general SAE)。そしてその言動力となったのは鉱工業の発展でありその地域なのである。

このようにして出来た Ext SAE も元を糺せば Afrikaans 語の影響を多分に蒙っており、Afrikaner たちが英語の伸長によって英語社会に組み込まれていく過程や様子が現われている。初めかれらは Afrikaans 英語 (Afr E) を第2言語としてのみ話し、完全に bilingual の状況を呈しており、あくまで Afrikaans 語を第1言語として日常語った。一方 Afr SAE (アフリカース南ア英語) の方は長いオランダ語と英語、後に Afrikaans 語と英語の接触の産物として、しかも実際には bilingual 関係が棄てられ、特に次世代からは Afr SAE が第1言語として使われていった。そして現今ではこの Afr SAE だけの社会も一部にはあるが、Afr SAE はむしろ殆ど Ext SAE に極く近い間柄にあるので、今日では Ext SAE が Afr SAE の社会を併呑する形となっている。

アフリカーンス南ア英語 (Afr SAE) 音が及ぼした影響

まず Afr SAE 音の特徴をいくつか挙げると、

- a. 二重母音 /ɔi, əu, ai/ は一般の SAE のように弱音に推移することなく、高い [i] や [u] で終る。つまり Ext SAE よりはっきりしている。アフリカーンス語と同じである。fyn [fəin] *fine*, gelyk [xələik] *equal*.

b. [i] の長音化。it とか is のように英語とか general SAE では弱いストレスのない 1 音節の機能語でも、例えば “is” を “ease” のように Afr SAE では長音になり、もっと緊張し強勢が増し、[i:z] のようになる。

c. 顫動音の [r]。音節頭に起る。

d. アフリカーンス語の影響で 2 タイプの方言としての /r/ がある。(母音のあとの場合)。

(i) 有声子音や弱い摩擦音はアフリカーンス語で /r/ を言う時に起る音であるが Afr SAE もアクセントのある音節で母音のあとの場合に聞こえる。例えば, partner, cards 等。

(ii) 連続 (juncture) に特色がある。単語の終わりの /r/ はよく聞こえる。英語の ‘linking r’ (連続 r 音) のような感じである。但し, pause があつたり子音が続く時は起らない。

次にアフリカーンス語の音を以下に示すと、

母音………… i(i:), e(e:), ɛ:, é, a, a:, ɔ:, ɔ,
o(o:), u(u:), ə(ə:), y(y:), ø, œ(œ:)

重母音…… eu, əi, ai(a:i), ɔ:i, o:i, ui, ou, œy

子音………… (英語と同じもの) f, l, m, n, s(z)

(英語と似たもの) b, d, k, p, t

(但し p と k は英語ほど鋭くない)

d は語の終わりは t となる。

g は [x][ç], h は [ɦ], j は [j] か [dʒ]

ng は英語同様 [ŋ]

r は舌先を強くふるわす。(懸壅垂でない。)

v は普通 [f]。外来語では [v]。

w は [v] (kw, tw, sw は [kv, tv, sv]) sj は [ʃ]

tj は [tʃ] と [c]

[ɲ] は j や tji や dji 綴の前。[g] は外来語の g の時等。

さてここで Afr SAE 音や Afr SAE 音が主に Ext SAE に影響を及ぼしたものを挙げることにする。Afr SAE は上述した特徴のほかに /p, t, k/ などは

unaspirated であったりし、これらの特徴はみな何らかの影響を Ext SAE に与えている。それらをいくつか挙げてみると、

(1) SAE の二重母音の一般傾向は音の動きの幅が長い (wide)。例えば Australian E (これは SAE に近いが)、では bee を [bɛ·i] (RP [bi]), boy を [bo·i] (RP [bɔi]), boat を [baʊt] (RP [bəʊt])。それから SAE においては例えば /aɪ/ の場合 /a/ が強く長くなり (slower) その結果 1 音節的になってしまう (monophthongization)。例えば time [ta:m], down [daʊn] といい、kite と cart, dine と darn, life と langh がはっきりしない現象がある。しかし Afr SAE では /əi, əu, ai/ などの場合 [i] と [u] の音価が一般 SAE と異なり高位置にある。general SAE のように主母音のあとの音が小さくなったりしない。(Afrikaans では fyn [fəin] *fine*, gelyk [xə·ləik] *equal*)。しかしこの現象は Afr SAE から Ext SAE には映っていない。)

(2) 'low schwa' の問題。英語は belong の初めの母音を [ɪ] と発音する人も [ə] と発音する人もいる。この後者のような 'low schwa' で SAE では発音せられる。例えば Rosa's と roses, candid と candied は同じ発音となる。Afrikaans にはもともと先に紹介した通り /i/ (lieg [liç] *lie*) /ə/ (lig [læx] *light*) の 2 音があり、前者が英語の /i:/ や /i/ を表わす方に使われ、後者が英語の 'low schwa' /ə/ を表わすことになる。それ故 wanted や chicken の語尾母音や consequences の後の 3 母音はみな low schwa である。この low schwa 現象は SAE では殆ど見られるが R St では [ɪ] と [ə] は部分的には相補関係 (complementation) をなしている。

(3) [i], [i:] / [ii] の問題。Afrikaans 語では、ie に対して [i:] / [ii] (/i/) があり、例えば, wie (*who, whom*), ieder (*each*), titel (*title*) (この場合 ti は音節構成上 tie でなくても同じ音になる。また i, e, ë は [ə] / ə / である。↑ は [ə:] / ə / となる。例えば wfe [və:ə] (wig [væx] の複数)。また場合によっては e は [e:] となる。例: seë [tse:ə] (see [se:] *sea* の複数)。ところで原則は i は /ə/ ie は /i/ (vis /fəs/ [fəs] *fish*, pl. visse /fəsə/ [ɪfəsə]) である。つまり Afrikaans の /ə/ と /i/ がどのように Ext SAE に影響しているかということ、英語の [ɪ] にたいしては [ə] を当て、英語の

[i:] に対しては [i] [i:] [i:] を当てる。また英語の i のアクセントのある所は [i] [i:] [i:] を当て、ない所は [ə] を当てる。SAE はこのように厳密に相補関係 (complementation) にある。例として pin [pən], kiss [kəs], invalid は [ɪnvələd] と発音される。これはいわゆる reallocation 現象である。

- (4) /r/ の問題。/r/ Afrikaans の方言から SAE に入った音では次に述べるようなタイプがある。

母音の後の r で強く stress する音節の場合、例えば partner, cards のように音節の語尾の cluster の r が Afr SAE の時 flap sound のように響く。SAE は元々は non-rhotic で start とか star の /r/ は発音しなかった。Afr SAE の /r/ は rhotic である。Afrikaans 語の場合は daar [dɑ:r] there のように音節の語尾の時も trill であると同様に、'nadrük emphasis のように nad と ruk の音節の接点でも trill が起る。これに準じて Ext SAE でも cluster として舌が post-alveolar plosive の位置で [θ, k, g] などのあとに来る時あるいは post-alveolar fricative の位置で [t, d] などのあとに来る時 /r/ は閉鎖音 (obstruent sound) になる。つまり弾音 [ɾ] か歯茎側面弾音 [ɽ] になる。また後者の場合多少チェコ語の ř 音 [r̝] (舌先を細かくふるわす音) に近い音になる。また resonant r でもある、というのは例えば [ɾ] などにも有声無声の区別があるから。つまり /θr, kr, gr/ や /tr, dr/ などの場合である。例えば, cream [kri:m] [kli:m], grey [grɔɪ] [gɔɪ], trill [trɪl] [tɪl] [tɪl]。このように /r/ は [ɾ] [ɽ] [r] のように flap, tap 音つまり閉鎖的 (obstruent) になる傾向を有する。この flap r と言うより tap r は inter-vocalic の位置でも発せられる。例えば, very sorry [vɛɾi sɔɾi] など。/tr/ /dr/ は SAE では fricative allophone であり、例えば true [tʃu:], drop [dʃɒp] など。また単語の先頭に現われる。例えば, red [red] [ɪed] など。

以上いくつか述べてみたが、要するに Ext SAE は Afr SAE の影響をかなり受けていることがわかる。

結　　び

今南ア問題は世界の時事問題の焦点の一つとなっている。人種や民族の差別が徐々に解消していく中で言語問題に少なからず関心を寄せなければいけないのはひとり言語関係者だけでない。言語が紛争の種となった例は世界で非常に多いのである。南アの場合、英語民族の数は少数に属するが、黒人の動きとともに今後これを使用するようになる数は急激に殖えること必定である。アフリカーンス語はむしろ黒人弾圧の方に廻ってしまった悲劇性を具えてしまった観があるが、さりとてファナカロ語がどの程度黒人たちの共通意識に支えられるか多大の疑問の残る所である。というのはもう既に黒人民族間において争いが興きでいて、部族意識の強いかれらの考えが纏まるまでには時間が掛かる。また現在のように言語が政治に従属してしまっている状況下では、政府の黒人言語に対する出方に大きな関心が持たれている。昔なら言語は経済原則に基づき合理的に自然にリンガフランカが出来上がったものだが、現在は教育、経済動向、国際情勢等の内圧外圧があり、大きく歪められることが有り得る。その中において南アでは言語の面で片や英語だ、しかも Ext SAE だ、片やアフリカーンス語だと譲らず、ズールー語、コサ語やそれにファナカロ語が加わった情勢下にある。しかしそういう状況下においても仮に望ましい姿で語圏が出来てそれがハッキリしてきて（今でもある程度その状態にある）理想的に運営できるようになればスイスのように言語問題はさほど大きな国内問題とはならなくなる。いずれにしても英語の面で言えば、南ア独特の Ext SAE が益々発達する形で発展していきだらう。Ext SAE が複雑な言語事情の中で如何にして今日の地位を獲得したかをここに簡単に述べてみたが、研究そのものには余りに困難な問題が多く、遠く離れた所では現地人と直接接触もできず、わずかにアフリカーンス語学習に際し南アの婦人と英語で接したに過ぎず、あとは専ら文献に頼って間接に学習したまでである。不備な箇所や文献洞徹し能わざる所が多いと思うが更に探究していく途上に訂正加筆していく所存である。言語や方言が接触する過程において如何にお互に影響し合い、適合していくかは言語研究をしていく上の最大関心事の一つと考えて、これを解明せんとする第一歩と

考えてこの小論文を認めてみた次第である。

参考文献

- Cole, D. T. Fanagalo and the Bantu Languages in South Africa, *in* D. Hymes (ed) Language in Culture and Society. 1964
- Combrink, T. Afrikaans: Its Origin and Development, *in* L. W. Lanham et al (eds) Language And Communication Studies in South Africa. 1978
- Dillard, J. L. Black English 1972
- Ferguson, C. A. Diglossia, *in* D. Hymes (ed) Language in Culture and Society. 1964
- Holm, J. A. Pidgins And Creoles. 1988
- Lanham, L. W. & K. P. Prinsloo (eds) Language And Communication Studies in South Africa. 1978
- Lanham, L. W. & C. A. Macdonald The Standard in South African English and Its Social History. 1979
- Mc Crum P. et al (eds) The Story of English. 1986
- Mühlhäusler, P. Pidgin & Creole Linguistics. 1986
- Platt, J. & H. Weber English in Singapore & Malasia. 1980
- Trudgill, P. International English. 1982
- Trudgill, P. Dialects in Contact. 1986
- Valkhoff, M. F. Studies in Portuguese And Creole. 1966
- Valkhoff, M. F. New Light on Afrikaans And "Malay-Portuguese". 1972
- Van Wyk, E. B. Language Contact and bilingualism, *in* L. W. Lanham et al (eds) Language And Communication Studies in South Africa. 1978
- Wardhaugh, R. An Introduction to Sociolinguistics. 1988
- Wells, J. C. Accents of English, Vol.3. 1982
- Afrikaans (Teach Yourself Books)
- Linguaphone Afrikaanse Kursus
- Coetzee Woordeboek

Tweetalige Woordeboek

Shogakkan Random House English – Japanese Dictionary

EPISTEMIC ISOLATION; A PRAGMATIC SOLUTION OF CLASSICAL PROBLEMS IN PHILOSOPHY

SHUSSE NAOE (M.A.)

1.1. Introduction

Among the problems that a semantic theory has to address is one of correspondence of a given semantic unit to the object it denotes in the real world. Instances of the unit are syntactic categories such as noun phrases, verb phrases, adjective phrases, whole sentences, and so on. In order to determine a truth value of, for example, a given sentence, one has to utilize one's capacity of linguistic interpretation of the sentence, and one's knowledge about the real world. To give one example, one has to know what goes on in the real world in order to know whether (1) is a true sentence or not.

(1) Jack assassinated a leader of the Trade Union because he was crazy.

One has to have the knowledge of the following; what the proper noun refers to, what constitutes the act of assassinating someone, what particular leader of which trade union is under discussion, the causativity expressed by "because", the possible co-referentiality of the pronoun, the past tense, the meaning of "craziness", and relevant English syntactic rules that are needed to parse the structure.

But this is not all that is required. One needs to perceive what has happened in the real world, and then to match it with the propositional content before one can judge whether (1) is a true sentence or not.

All this seems to be clear and indubitable, but it is only superficially so. First, meanings of many words defy simple definition, contrary to everyday intuition. Color terms are well known examples that cannot be defined in a clear-cut manner. What is linguistically referred to red, blue, green, etc. is after all a boundless continuum of light spectrum which humans divide up into specific colors in a more or less arbitrarily, though biologically deter-

mined fashion. Incidentally, a Japanese “perceives” seven colors in a rainbow, but this is most probably a cultural orientation deriving from an idiom in Japanese. An American would “perceive” five.⁽¹⁾ Many, probably most, possibly all, words may have this characteristic of vagueness, or fuzziness. This problem will be dealt with in some depth in what follows.

Second, the correspondence between linguistic expressions and the real world is not a simple matter. One does not have to read a whole lot of books on Western philosophy to realize this. The problem arising from the correspondence (or lack of it) between human perception and the real world has engendered countless remarks on what constitutes reality, and what constitutes a true knowledge of that reality.

Western philosophers are not alone in asking these questions. An ancient thinker in China provides a fable of a man who has just awakened from a dream in which he was a butterfly, and who wonders whether he is a butterfly that is dreaming he is a human, or he is actually a human who was dreaming he was a butterfly.⁽²⁾

Pushed to the extreme, this epistemological problem can lead to a solipsist view that one exists but all the others and everything else do not. Note that it is impossible in principle to disprove this solipsist view, because one’s consciousness is a whole in itself, and there is no means of perceiving others’. Thus it is perfectly logical (though not very practical) to have a solipsist belief. “Every man is an Iland, intire of it self” may summarize this position, though the latter part of the original from which it is quoted claims the opposite view.⁽³⁾ In more mundane terms, beauty exists only in the eye of the beholder.

This logical unfalsifiability of solipsistic ideas also finds expression in Descartes’ “cogito ergo sum”, and his method of reaching truth by doubting everything he considers uncertain. Since Descartes, epistemology has been a topic of quite a few philosophers. Kant proposed *a priori* perceptual categorization which is in a sense innate and excludes every temporal element of experience.⁽⁴⁾ One suspects that Kant, along with Descartes, provided the background for the now prevalent school of generative grammar.

Semantics under philosophical tradition has had “meaning” as one of its major objects of study. The above problem of epistemology is dealt with in depth by a host of philosophers and/or logicians. The classical view of mean-

ing can perhaps be summarized as the concept (or conception) that obtains between a linguistic expression and the object (or the class of objects) it denotes. This definition, though attractive because of its simplicity, has caused some major problems in semantics of logical and/or philosophical orientation: opacity, referential identity, referentially vague NP's, etc. The present work is an attempt to show that the classical view is not untenable, though a few additional supporting ideas may be necessary. It will also be shown that the problems (e.g. opacity) would not exist in the first place if the domain of study were restricted to utterances in actual context, rather than (as is customary in philosophically inspired semantics) context-free propositions.

Jackendoff (1983) introduces an attractive framework for describing the correspondence between linguistic expressions and the real world. According to him, it is necessary to distinguish between the real world and the perceived world. He makes the distinction by introducing a notational convention # # to refer to "projected world" (his term for "perceived world"). So a #dog# is what a human perceives when he see a dog in the real world. (expressions without # # refer to real world objects.) He gives some examples as motivation for postulating this dichotomy. To quote;

. . . Intuition tells us, and the standard tradition of musical analysis takes for granted, that the structure (of music) inheres in the music itself. But if one starts to look for musical structure out there in the real world, it vanishes. What reaches the ear other than a sequence of pitches of various intensities, attack patterns, and durations?⁽⁵⁾

And he goes on to deny that music exists in the real world;

One may be tempted to tie such an entity (as Beethoven's Fifth Symphony) somehow to the written score. But this is quite unsatisfactory as every musician knows, a large part of what goes into a performance is not in the score, but resides in the performer's unwritten (and probably unwritable) understanding of the style.⁽⁶⁾

So, music does not exist; only #music# does. In other words, what we refer to in everyday life as "music" exists only in our perception, mind, cons-

ciousness, or whatever we may call it. Likewise, this line of argument can be extended to everything. What we perceive as “book” is nothing but a bulk of paper on which numerous dots and lines and curves are printed. What we take for granted as “speech” is in reality a sequence of sound waves with #consonants# and #vowels#.

Incidentally, in strictly physical terms it is very difficult, it not impossible to segment speech sounds, especially in connected speech. Human utterances are a continuum of sound waves with only fuzzy boundaries between one #segment# and another #segment#. It is interesting to note that even in phonetics, the most down-to-earth study of language, one finds the human categorization of boundless continuum into clear-cut parts. As to be discussed later, this happens at all levels of language.

The above dichotomy of reality and #reality# is not something that is ordinarily recognized. One philosopher/logician complains;

But . . . in answer to what they specialize in, some philosophers say, “You see there is water in this glass? My concern of study is to think whether it is really true.” This is quite frank, but . . . the person who asked the question often feels he is being made fun of . . . (translation mine)⁽⁷⁾

1.2. Lexical Fuzziness.

As was shown above, the distinction of the world from the #world# is not normally recognized. What is equally difficult to realize is that the world (not the #world#) is basically a borderless continuum, but the #world# is divided with clear-cut boundaries and outlines. The epistemic processes occurring in man’s mind in perceiving the #world# divide the #world# and #objects# into certain #classes#, thus giving names (nouns), assigning certain verbs to certain #actions# and/or #states#, adjectival and/or adverbial expressions to certain #attributes#, and so on. But what must be borne in mind here is that the human perceptual system assigns these to the “borderless” world. In other words, noun phrases refer to #things#, adjective phrases refer to #attributes#, and so on, but a reality such that it can be categorized in a clear-cut manner does not exist; only #reality# does.

For example, what are often referred to as “mountains”, “planes”, and other geographical configurations have no clear-cut boundaries in the real world; they have boundaries only in the #real world#. One cannot define with any certainty where exactly mountains and planes are demarcated. Similarly, words such as “chest”, “belly”, “underbelly”, are also indefinable. An intriguing example is “hole”. A hole does not exist in the real world, for “hole” refers to the absence of matter in a certain configuration. Therefore, “hole” refers to something non-existent in the real world. In other words, when you have eaten the outer ring of a doughnut, the hole is also gone.

Similar, but more interesting examples are anatomical terms such as “mouth”, “nostrils”, “anus”, etc. These also lack referents in the real world, but they are distinct (like “hole”) in that their #referents# are not #objects# (contrary to common assumptions), but #functions#. So an anatomist can tease his novice students by ordering them to cut off and show him the above parts of human body. Of course it is a futile attempt, since the above terms, unlike hearts and livers, refer to functions, not entities.⁽⁸⁾

The above arguments may solve the age-old problem of what is the referent of an abstract noun. Abstract nouns such as “bravery”, “beauty”, etc. have no referents in the real world; only they have #referents# in the #world#. This should not be taken to beg the question; as shown above, some common nouns (“hole”, for example) have no referents either. It may even be logical to assume that all referents are #referents# in the #world#. (Remember the arguments in 1.1.)

Furthermore, recent developments in cognitive semantics indicate that human categorization (of the #world#) is not quite as rigorous as is ordinarily considered. The traditional definition of a category is based on the notion “common property” supposedly shared by all the members of the category. This “classical” view of category was shown to be untenable by Wittgenstein. The classical definition wrongly predicts that all members have an equal status with respect to the shared common property, and that therefore there should not be any “good examples”. But in fact there are good examples, and as the category “game” shows, there are no common properties such that all members share them.⁽⁹⁾ In other words, categories are not definable in terms of necessary and sufficient conditions. One such example would be Labov’s experiment (1973) in which the subjects were shown pictures of con-

tainers that differed in the ratio of width to height, and asked to label them “vase”, “cup”, or “bowl”. For some pictures the subjects gave uniform responses, but there were also intermediate cases.⁽¹⁰⁾ I suppose it is fair to say that they matched the pictures with their # cups #, # vases #, and so on.

Thus, the classical category does not work for “ordinary” daily human categorization. The natural question to arise is, does it work for more rigorous classificatory systems, for example, the system of biological taxonomy? Lakoff (1987) shows it fails to work in some important cases. The Linnaean taxonomy system is heavily dependent upon actually visible # features # of animals. By contrast, modern biology depends upon morphology to a far lesser extent, and the chief instrument for taxonomical purposes is molecular biology: chromosomes, DNA, enzymes, and so on. So in some cases a morphologically identical species may in fact consist of two, or more different species. Namely, the Linnaean system (which is directly derived from our perceived # world #) is “overridden” by evidence from the real world.⁽¹¹⁾

Furthermore, even physical measurements of objects do not meet our expectations of rigorousness. For example, suppose there is a metal object, a part of a machine, whatever is ordinarily regarded as of constant length and weight. As is taught in high school, matter contracts and expands according to heat changes. What’s more, the inevitable process of oxidization increases the mass of the object. Therefore, the metal object in question has no fixed length, or mass. It only has # fixed length # and # fixed mass #. Thus;

. . . . In short, objects in nature essentially are not compatible with the ideal, un-fuzzy image of physical entities which is created by the human mind (Terano, 1981. translation mine)⁽¹²⁾

This fuzziness is not confined to the natural world. In fact, it is ubiquitous in every aspect of human existence. Consider what is the meaning of verbs and adjectives in the following sentences.

- (2) John Lennon was killed by an insane man.
- (3) The accused assaulted and raped the woman.
- (4) The official is guilty of accepting a bribe.

(2) – (4) are all examples of what might be termed a “legal context”. A trial often turns on the notion of who did what to whom. The agent is usually the accused, the patient the victim of the crime. And if the meaning of verbs are vague, what happens?

The verbs in (2), (3) and (4) can actually be fuzzy in meaning. In other words, they refer to countless varieties of the #action# they supposedly refer. For example, to “kill” someone involves a causal relationship holding between a certain action(s) and the death of that someone, but the causativity defies rigorous delimitation. To make matters worse, “death” is getting harder and harder to define both legally and medically. A biologist even coined a word “goth” to denote the intermediate state.⁽¹³⁾ Incidentally, “to assassinate” someone involves politics, so a pop star being assassinated is a bit strange.⁽¹⁴⁾ “To assault” and “to rape” someone can also refer to a whole lot of #actions#. Anyone who has read an article about a rape case resulting in a decision of not guilty must have felt so. In other words, it is easy enough to specify the definitions of rape, but they often fail when applied to actual actions. Similarly, the #actions# referred to by “accept a bribe” are often at issue in a pay-off case, which reminds me of an American official who explained he had not accepted but merely received the bribe.⁽¹⁵⁾ Similarly, adjectives are also vague as to what #properties# or #attributes# they refer to. Apart from classic cases of “tall”, “handsome”, etc., many adjectives are vague. “Insane” in (2) is a good example. In short, everyone knows what “insanity” means, and has a prototypical notion of #insanity#, but definition is evasive. In fact, I suspect this is why insanity is so often claimed in macabre criminal cases. There are probably as many definitions of “insanity” as those who perform psychiatric tests.

To sum up, nouns, verbs, adjectives all share referential vagueness. This results from the very fact that #objects#, #situations# and #events#, etc. are not vague, although their actual correspondent objects, situation, events, etc. often have fuzzy boundaries. Other grammatical categories have not been treated, but will presumably show basically the same results. It is in fact surprising that in view of this, humans can communicate at all.

2. Knowledge, Belief and Opacity: a Possible Solution.

2.1. Introduction

Epistemic verbs are divided into factive verbs and nonfactive verbs. The former imply that the following predicates are true, while the latter do not.

- (5) Paul knows that Epstein is crazy.
- (6) Paul believes that Epstein is crazy.

(5) implies the truth of the proposition that Epstein is crazy, but (6) does not. But is it really possible to say “true” so readily? Or rather, how is it possible to assign a truth value to the embedded proposition? It would not answer this question to say “know” is followed by a factive predicate while “believe” is not. The problem here is why factive verbs behave differently from non-factives. In the following I will try to delve into this problem.

2.2. Truth

First, it should be explicitly stated that sentences cannot be assigned a truth value without world (i.e. pragmatic) knowledge except the ones which express logical truth. For example;

- (7) Snow is white if and only if snow is white.
- (8) A bachelor is unmarried.
- (9) One plus one is two.
- (10) Brian Epstein is a gay.
- (11) The present king of France is bald.

(7) is an example of tautology, which is logically true. This is reducible to the following form; p is true if p is true. (8) is an example of an analytic sentence. The attribute of being unmarried is included in “bachelor” itself. (9) may seem to be similar to (8), but assigning a truth value to (9) requires knowledge; this should be clear if (9) is converted to;

- (9') Five thousand six hundred and fourty three times seven hundred forty five equals 4,204,035.

(9) and (9') are intuitively similar, but (9') requires a time-consuming calculation or a pocket calculator to determine its truth value. And before everything else, one needs to know how to multiply, and to multiply, one has to know the multiplication table. Furthermore, (9), and (9') have a hidden presupposition that decimal system is being used. Otherwise (e.g. in binary scale) both (9) and (9') would be false. (10) requires knowledge about the world to say either true or false, and (11) is a classical example that shows the inherent defect caused by the application of logic to the analysis of utterances. For, (11) cannot be judged to be either true or false without knowledge about the world. Historically, this sentence engendered a lot of debates between the exponents of two-value system of logic and those of three-value system.⁽¹⁶⁾ The position I take here is stated above; to repeat, sentences that are neither analytic nor tautological cannot be assigned a truth value without pragmatic knowledge. When we think such and such sentence is true or false, what we really mean is such and such utterance is true or false at a particular time and on a particular occasion. So it would be insignificant to try to decide the truth value of (11) without clarifying the state of things in reality, since, that attempt inevitably requires pragmatic knowledge about the world. For, if the Russellian interpretation (i.e. (11) is false) is pushed to the extreme, it inevitably leads to the same serious absurdity as (12) does.

(12) ?A unicorn has a horn, but no unicorn exists.

So here, I will not deal with sentences but specific statements uttered by a specific speaker on a specific occasion, since;

. . . it is a statement, not a sentence, that strictly speaking ought to be said to be true. (Hintikka 1962)⁽¹⁷⁾

2.3. Epistemic Operators.

Hintikka (1962) introduces epistemic operators, namely, $K(p)$ and $B(p)$. Within this system, (5) would be represented as $K_a(p)$, where a is Paul, and (6) would be $B_a(p)$, where a is Paul.⁽¹⁸⁾ Like other logical conventions such as universal and existential quantifiers, modal and deontic operators, there

is a certain relation holding between $B(p)$ and $K(p)$. In everyday language;

- (a) "All crows are black." entails "Some crows are black."
- (b) "One must do something" entails "One may do something."
- (c) "Something is necessary" entails "something is possible."
- (d) "To know that (p)" entails "To believe that (p)."

In view of the above, consider the following;

- (13) I know Brian is carzy.
- (14) ?I dont't know Brian is crazy.
- (15) George knows Brian is crazy.
- (16) George doesn't know Brian is crazy.
- (17) Brian is crazy.

(13) – (16) will be represented as: $Ki(p)$, $-Ki(p)$, $Kg(p)$, and $-Kg(p)$, respectively. (the "-" means negation)

Now, (13) – (16) are simple affirmative and negative statements. What is strange is that (14) is a rather strange statement to make, whereas (16) is perfectly good. The form "don't know p" seems to be unacceptable when the subject is identical with the speaker.⁽¹⁹⁾ But (14) becomes perfectly normal by adding "He believes", as (18) shows;

- (18) He believes that I dont't know Brian is crazy.

Or by the replacement of "that" with "whether".

- (19) I don't know whether Brian is crazy.

Another problem is how to represent (17). As I said earlier, only statements, not sentences, are under discussion in the present study. Statements have to be made by someone, the speaker. Even simple propositions like (17) also have a speaker who utters them. For this reason, Hintikka postulates that as an actual statement, (17) should be something like: $Bi(p)$ where "i" is identical to the speaker.⁽²⁰⁾ Thus all statements, except for intentional lying, are embedded within a clause roughly translatable as "I believe". This

should sound more natural than it seems, since one of Grice's cooperative principles of conversation stipulates that one must not say what one does not believe.⁽²¹⁾

Here one wonders whether a statement "p" should really be represented as Bi(p) as Hintikka claims. Consider the following.

(20) ?Brian is crazy, though he might not be.

(21) ?I know Brian is crazy, though he might not be.

(22) I believe Brian is crazy, though he might not be.

Of the three, only (22) is an acceptable statement. The above representation of "p" as Bi(p) cannot account for this, for if "p" were really Bi(p), (20) and (22) would be judged to be unacceptable, rather than the pair (20) and (21). Therefore, "p" ought to be interpreted as Ki(p), not Bi(p). In what follows, a statement with "suppressed" or "covert" Ki will be represented as Ki'(p) so as to avoid confusion with an overt Ki(p).

Then, what is the difference between Ki'(p) and Ki(p)? If the former has a covert "I know" clause and the latter an overt one, which of the two expresses stronger conviction of the speaker? Frankly speaking, I have no convincing idea. But I'm inclined to view the overt "I know" as stronger, as the following might show;

(22) "Brian is crazy." "Are you really sure?"

(23) ?"I know Brian is crazy." "Are you really sure?"

A simple statement "p" can be followed by the hearer's interrogative confirmation as in (22), while an overt "I know" similarly followed seems slightly awkward. If this can be taken as evidence, then the three forms of statement are in a transitive relation; i.e. $Ki(p) > Ki'(p) > Bi(p)$.

2.4. Tense and Identity.

There is still another problem concerning the first person singular subject. Consider;

(14) ?I don't know Brian is crazy.

- (24) I didn't know Brian was crazy.
 (14') I didn't know Brian is crazy. (But now I am positive.)

As was stated previously, (14) is an awkward statement to make. But a past tense version, namely (24), is a perfectly normal, commonly heard statement. However, as (14') shows, "I did not know that p" often pragmatically implies that "Now I know that p." To discuss tense would be, however, beyond the scope of the present study, and all I can do is to speculate. One possible explanation is that the identity of the speaker is not so sharply in focus in the past tense as in the present tense. In a way, past tense "I" might be viewed differently from the present tense "I". Some evidence could be adduced; Consider:

- (25) I am not what I used to be.
 (25') ?I am not what I am.

The very fact that (25) is a normal statement might be in support of the above speculation.

Another possible (though also rather ad hoc) explanation is that past tense statements might have a narrative quality. Thus, past tense "I" belongs to the same conceptual category as third person pronouns.

2.5. Referential Opacity and Belief Context.

Consider the following classic examples;

- (26) Copernicus knew that the Morning Star was a planet.
 The Morning Star is the same as the Evening Star.
 Therefore, Copernicus knew the Evening Star was a planet.⁽²²⁾

This is often cited as an example of referential opacity and of the need for an extension/intension distinction. However, taken as a set of statements rather than sentences, (26) will be, in our notation;

- (26') Ki'(Kc(the Morning Star is a planet))

Ki'(the Morning Star = the Evening Star)
 Therefore, Ki'(Kc(the Evening Star is a planet))

As is readily recognizable, "Ki' " is shared by all of the three, but the proposition "the Morning Star = the Evening Star" is not within the knowledge of Copernicus. It is only within the speaker's knowledge. Consider another example.

- (27) Watson knows Mr. Hyde is a murderer.
 Dr. Jekyll is the same person as Mr. Hyde.
 Therefore, Watson knows Dr. Jekyll is a murderer.⁽²³⁾

which is representable as (27').

- (27') Ki'(Kw(H is a murderer))
 Ki'(J = H)
 Therefore, Ki'(Kw(J is a murderer))

Here again, it is not Watson, but the speaker who knows Dr. Jekyll is the same person as Mr. Hyde.
 Consider the next examples and their rough epistemic representations.

- (28) ?Cynthia has a disease she doesn't have.
 (29) Cynthia believes she has a disease she doesn't have.
 (30) ?I have a disease I don't have.
 (31) ?I believe I have a disease I don't have.

 (28') Ki'((c has a disease) & (she doesn't have the disease))
 (29') Ki'(KC(c has a disease)) & (c doesn't have the disease))
 (30') Ki'(I have a disease) & (I don't have the disease))
 (31') Ki'(Bi((I have a disease) & (I don't have the disease))))

The absurdity of (28), (30), and (31) can be reduced to saying p & -p: i.e. the exclusion of the middle. (29) is acceptable because "Cynthia has a disease" is within her knowledge, but "Cynthia doesn't have a disease" is known

only to the speaker. However, a past tense version of (31), namely (32), is a normal statement to make.

(32) I believed I had a disease I did not have.

This is a rather puzzling phenomenon. Intuitively, it seems related to the anomaly displayed by (14) and (24) above. The explanation I prefer here is the same as I gave above; namely, “I believed that p” implies “I don’t believe that p any more”. Let us consider one more classic example:

- (a) Premise: Electra does not know that the man in front of her is her brother.
- (b) Electra knows that Orestes is her brother.
- (c) The man in front of her is identical to Orestes.
- (d) Conclusion: Electra both knows and does not know that the same man is her brother.⁽²⁴⁾

Instead of repeating the same representation, it may suffice to say that (c) is known to the speaker, but not to Electra.

Thus it has been demonstrated that the extension/intension distinction, and referential opacity are subsumed, at least in some classic cases, under the epistemic operators introduced here.

2.6. Pragmatics of the Epistemic Operators

I mentioned earlier that the epistemic operators (i.e. $Ka(p)$ and $Ba(p)$) show similar behavior along with other logical operators. In this section the pragmatic aspects (e.g. implicature) of knowledge and belief will be discussed.

2.6.1. Entailment and Implicature.

Ota (1980) goes into full detail about logical entailment and conversational implicature of the other logical operators: i.e. existential/universal quantifiers, and modal operators.

For example, $A(x)$ entails $E(x)$, $E(x)$ and $\neg A(x)$ pragmatically implies each other. In more or less “natural” English;

- (a) If all persons are mortal, then it logically holds that some persons are mortal.
- (b) If some persons are crazy, then it is usually (but not necessarily the case) that not all persons are crazy, and vice versa.

Similarly, $N(p)$ entails $P(p)$, and pragmatic implicature obtains between $P(p)$ and $-N(p)$.⁽²⁶⁾ I would like the reader to figure out the translation into everyday English. Now, these logical and pragmatic relations also hold in $K(p)$ and $B(p)$. That is to say,

- (33) He knows that Brian is crazy.
- (34) He believes that Brian is crazy.
- (35) He does not know that Brian is crazy.
- (36) He believes that Brian is not crazy.

(33) logically entails (34), and (34) and (35) pragmatically imply each other. As in universal and existential quantification, $-K(p)$ is logically equivalent to $B(-p)$, making (35) and (36) cognitively synonymous.

3. Conclusion.

We have shown that linguistically interesting phenomena can be captured by postulating a notational distinction between things and $\# \text{things} \#$. This distinction can be further extended to sentential level, but since sentences cannot be determined to be either true or false, only specific statements (or utterances) are treated. By excluding context-free propositions from the domain of study, and by postulating an abstract epistemic operator $Ki'(p)$, it is possible to solve some classical problems in logic, namely, belief context, referential ambiguity, and contextual opacity.

Appendix

symbols used:

- p (proposition)
- A (universal quantifier)
- E (existential quantifier)
- $-$ (negative operator)

- a, b, . . . (individual constants)
 N(p) (modal operator; it is necessary that p)
 P(p) (modal operator; it is possible that p)
 Ka(p) (epistemic operator; "a" knows that p)
 Ba(p) (epistemic operator; "a" believes that p)
 Ki'(p) (covert epistemic operator; the speaker of the statement knows that p)
 #X# (perceived X as opposed to X in the real world)
 "X" (linguistic expression of X)

Notes.

1. Murakami, Y. *Kagaku, Testugaku, Shinko*. pp. 108—109.
2. Zhuang Zi.
3. Adapted from John Donne, Hemingway, *For Whom the Bell Tolls*.
4. Iwasaki, T. *Seiyo Tetsugakushi*.
5. Jackendoff, Ray. *Semantics and Cognition*., pp 27—28.
6. Jackendoff, Ray. *ibidem*.
7. Yoshida, Natsuhiko. *Ronri to Testugakuno Sekai*, p.9.
8. Yoro, T. *Yuino Ron*. p 33.
9. Lakoff, George. *Women, Fire and Dangerous Things*. pp 12—17.
10. Jackendoff, R. *Semantics and Cognition*. p 137.
11. Lakoff, G. *Women*. pp 185—195.
12. Terano, *Aimaikōgaku no Susume*. pp 203—205.
13. Watson, Lyall. *The Biology of Death*.
14. Jackendoff, R. *Semantics*. p 114.
15. This was reported in the early 1980's. But the exact date eludes me.
16. Ota, Akira. *Hitei no Imi*. pp 112-114.
17. Hintikka, *Knowledge and Belief*. p 6.
18. Hintikka, *Knowledge and Belief*. p 10.
19. The form "I don't know p" is not unattested, but when actually uttered, it does not mean exactly the same thing as "He doesn't know p." See Ota, *Hitei no Imi*, p 117.
20. Hintikka, *Knowledge and Belief*. pp 64—88.
21. Ota, A. *Hitei no Imi*. p 184.
22. Allwood, et. al. *Logic in Linguistics*. p 119.

23. Hintikka, *Knowledge and Belief*. p 138—140.
24. Allwood, et. al. *Logic in linguistics*. p 126.
25. Ota, A. *Hitei no Imi*.
26. Ota, A. *hitei no Imi*. p 375.

BIBLIOGRAPHY

- Allwood, J. et. al. *Logic in linguistics*, Cambridge, Cambridge University Press, 1977.
- Chomsky, N. *Generative Grammar: its Basis, Development and Prospects*. Kyoto, Kyoto University of Foreign Studies, 1989.
- Descartes, R. *Discourse on Methods and the Meditation*. London, Penguin Books. 1968.
- 郡司隆男 「自然言語の文法理論」 東京 産業図書 1987
- 林知己夫 et. al. 「あいまいさを科学する」 東京 講談社 1984
- Hintikka, J. *Knowledge and Belief: An Introduction to the Logic of the Two Notions*. London, Cornell University Press 1962.
- 岩崎武雄 「西洋哲学史（再訂版）」 東京 有斐閣 1975
- Jackendoff, R. *Semantics and Cognition*. Massachusetts, MIT Press, 1983.
- Lakoff, G. *Women, Fire and Dangerous Things; What Categories Reveal about the Mind*. Chicago, University of Chicago Press. 1987.
- Lyons, J. *Semantics II*. London, Cambridge University Press, 1977.
- 村上陽一郎 「科学・哲学・信仰」 東京 1980
- 太田朗 「否定の意味」 東京 大修館 1980
- Saussure, Ferdinand. *Course in General Linguistics*. N.Y. 1959. Philosophical Library
- 寺野寿郎 「あいまい工学のすすめ」 東京 講談社 1981
- Watson, Lyall. *The Biology of Death*. London. 1976. Revised Ed. Hodder and Stoughton
- 養老孟司 「唯脳論」 東京 青土社 1989
- 吉田夏彦 「論理と哲学の世界」 東京 新潮社 1977

法律発案権に関する一考察

Who May Propose a Bill ? — A Study of Japanese Diet —

福岡 英明

はじめに

- 1 議員の法律発議権
- 2 内閣の法案提出権
- 3 最近の学説

結びにかえて

はじめに — 立法をめぐる現代的状況

日本国憲法41条は、「国会は、国権の最高機関であつて、国の唯一の立法機関である」と規定し¹⁾、いわゆる議会優位の体制あるいは議会中心主義を定礎している。また、日本国憲法の全体的な規範構造からすれば、この議会優位の体制は、たんなる「議会主義」ではなく、まさに「議会制民主主義」とであると解される²⁾。

しかしながら、日本において、この議会優位の体制がはじめて憲法典に規定されたとき、事実上の行政府の優位、すなわち行政府に対する議会の地位の相対的低下が西欧民主主義諸国においては一般的傾向としてすでに進行していた³⁾。このような状況は、一般的に「行政国家」現象⁴⁾と把握されており、現代日本も決してその例外ではない。この行政国家化の要因としては、「社会国家」・「福祉国家」理念の導入が、「積極国家」をもたらし、それにとどまらず「行政国家」をももたらしたことが指摘されている⁵⁾。

このような「行政国家」現象への対応策のうち日本の憲法学界において支配

的なものは、いわば議会主義復権型の対応⁶⁾といえるものである。しかし、この議会復権論は、「今日議会の復権を説く場合、公開の討論と説得を通じて真理ないしはヴォロンテ・ジェネラルに到達しようとの議会主義の理念の現実化を先祖がえりのように繰り返す者はおそらく皆無であろう」と山下健次教授が指摘するように、議会機能の変遷の認識をその出発点としている⁷⁾。たとえば、芦部信喜教授は「たしかに、このような議会主義復権の憲法論は、それが単に行政権との関係における議会の地位の強化、権限の拡大という伝統的な議政の原理だけで構成される場合には、現代国家ないし現代社会の実態または要請とかけ離れた空疎な観念論に墮するおそれが大きい」、「議会主義の復権といっても、もちろん二十世紀国家の政党国家的現実や行政国家的要請を無視した、古典的な議会主義への復帰を説くものではないし、またそうであってはならないのである」⁸⁾とし、議会の機能については、執行府の監督と抑制の機能、すなわち国民多数の希望や不安を『討論の広場（フォーラム）』に反映させ、権力の乱用から国民の自由を守り、討論を通じて世論を教育し、法律の執行の方法を監督することであろう⁹⁾と述べている。そして、議会の立法機能については、「現代国家においては、内閣の法律案提出権や委任立法は違憲もしくは違憲の疑いありとし、名実ともに『唯一の立法機関』たることを議会に要求することによって、議会主義を生かすことは不可能である」¹⁰⁾、「議会主義を再生させるための立法のあり方としては、むしろ内閣提出法案なり委任立法の存在を前提として、行政の民主的統制をどのような方向と手段で行なうか等、…たとえば議員立法のあり方、その振興策などをより具体的に探究することの方がはるかに重要ではないかと思われる」¹¹⁾と説いている。

ところで、以上のような見解が学界の支配的傾向であるとすれば、本稿で問題にしようとする法律発案権、とりわけ内閣の法案提出権の問題は、まさに解決済みの論点あるいは議論の実益のない論点であるといえる。しかし、野中俊彦教授が指摘されるように、「議会主義を最低限生かすためにこそ、内閣の法律案提出権容認のもたらす波及効果をたえず警戒しておく必要があるのではなかろうか」¹²⁾。かくして、本稿ではこのような問題意識を前提として、法律発案権をめぐる学説を、最近の議論を含めて整理し、今後の研究の礎としたい。

- 1) 「国権の最高機関」の意味をめぐる学説の状況については、清水望「国権の最高機関」小島和司編・憲法の争点（新版）ジュリスト増刊（1985）152頁以下。清水睦「国会の最高機関性」法律時報41巻5号（1969）114頁以下を参照。なお、「国の唯一の立法機関」の意味については、一般に、国の立法権は国会が独占し、他の機関は立法作用を行なわないこと（国会中心立法の原則）と、国会の立法権は完結的なものであり、他の機関の関与は必要ではないこと（国会単独立法の原則）と解されている。
- 2) 清水睦・現代議会制の憲法構造（1979）11頁以下。
- 3) ジュームス・ブライズがその古典的名著「近代民主政治」（岩波文庫・松山武訳・1929～30）において、「立法府の衰退」を論じたのは1921年のことであった。
- 4) 行政国家とは、「本来統治（ガバメント）の出力（アウトプット）過程（執行）の公式的担い手たる行政が同時に入力（インプット）過程すなわち政治（国家基本政策の形成決定）にも進出して中心的かつ決定的役割を営む類の国家」を意味する（手島孝・行政国家の法理・1976・13頁）。
- 5) 杉原泰雄教授は現代「行政国家」の要因として、①現代市民憲法における社会国家・福祉国家の理念の導入の他、②現代市民国家における多様な危機の常駐状況、③議院内閣制と政党国家現象、④外見的立憲主義型憲法思想の残滓（とくに日本の場合）、⑤導入される新しい手法の政治（基本法的手法、全権法的手法、「諮問機関政治」の手法）を挙げている。ただし、①と②を固有の要因とされる（杉原泰雄「現代行政国家論・再考」和田英夫教授古稀記念論集『戦後憲法学の展開』1988・224頁以下）。
- 6) 芦部信喜「議会政治と国民主権」現代議会政治・法学セミナー増刊（1977）21頁以下。
- 7) 山下健次「現代日本の立法府」公法研究47号（1985）33頁。
- 8) 芦部・前掲論文22頁。
- 9) 芦部信喜・憲法と議会政（1971）240頁。
- 10) 同240頁。
- 11) 芦部信喜「日本の立法を考えるにあたって」ジュリスト805号（1984）14頁。
- 12) 野中俊彦「内閣の法律案提出権」憲法の争点・前掲194頁。また、同教授は、「『内閣の法案提出権』の容認が、内閣にも法案提出権があるということの容認だけを意味せず、実質的に大部分の法案提出権を内閣だけに認める結果になっているという現実が一方にあり、他方では議員の立法発案権の制約が厳しくなされているという事実がある。両者を切り離して考えるわけにはいかないであろう」と述べている（「議会運営の諸問題」法律時報46巻2号〈1974〉18頁）。

1 議員の法律発議権

(1) 議員の法律発議権の法的根拠 明治憲法は、その38条において、法律の発案権について、「両議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及々々々法律案ヲ提出スルコトヲ得」と規定し、議院の他に政府も法律発議権を持つことを明示していた。ところが、日本国憲法上、議員の法律発議権を明示する規定は存在しない。このように法律発議権の行使主体を憲法が明示しないあり方は、比較法的にみてかなり異例のことである¹⁾。そこで通説的見解は、国会が「国の唯一の立法機関である」と規定する憲法41条後段を根拠として、議員の法律発議権が認められることは、「当然のことであって問題がない」²⁾としている³⁾。かくして、現行法上、議員の法律発議権を明示的に規定する条項は、国会法56条1項である。

(2) 議員の法律発議権の制限 国会法は、当初、議員は賛成者がなくともひとりだけでいかなる議案でも発議できると規定し、その例外として、修正の動議を議題とする際には20人以上の賛成を必要とするとしていた(国会法旧56条・57条)。しかし、昭和30年の第21国会において、国会法が改正され、「議員が議案を発議するには、衆議院においては議員20人以上、参議院においては議員10人以上の賛成を要する。但し、予算を伴う法律案を発議するには、衆議院においては議員50人以上、参議院においては議員20人以上の賛成を要する」(国会法56条1項)とし、議員の発議権にかなり厳しい制限を課した⁴⁾。当然のことながら、当初の手続のほうがより憲法の国会が「唯一の立法機関」であるとの規定の趣旨に合致するものと思われるが、この改正は理由のないものではなく、議員の法律発議権の濫用に対処するためにやむをえず付された制限であったといわれている。すなわち、それまで選挙区目当てのお土産法案や特定の業者のための利権法案などが議員立法の形で発議されており、それらが成立した場合には、内閣としてはそれに従わざるをえないわけではあるが、事実上それを執行する責任を負いえず、行財政の混乱を引き起こすことにもなるからであった⁵⁾。

しかしながら、野中教授が指摘するように、国会法56条の規定は改正を検討すべき時期にきていると思われる⁶⁾。そもそも、この規定は当初からその効果が疑問視されていた。すなわち、「法律案の発議には20人以上の賛成を要するとすれば、発議者一人を除いては誰が見ても賛成できないような法律案が発議されるというようなことは防げるだろうが、そのような法律案は今のままでも成立しないはずであるし、共通の利益をもっている議員が20人集まれば利権法案が発議されることは同じでもある」と指摘されていた⁷⁾。また、当時は政党の規律が今よりも弱かったので党幹部の意向に反する議員によるお土産法案等の提出もあったが、今日では各政党の規律が確立しているのでそのような法案の提出は現実的には不可能となっている。そして、国会法56条はもっぱら小政党や無所属議員の法律発議権の行使を封じる働きだけをしているといえる⁸⁾。かくして、同条はその存在理由が消滅し、その弊害のみが際立っているといえよう⁹⁾。

1) フランス憲法39条、ボン基本法76条、イタリア憲法71条、スイス憲法93条等をみよ。

条文については、樋口陽一・吉田善明編・解説世界憲法集(1988)を参照。

2) 清宮四郎・憲法Ⅰ(新版)(1971)411頁。

3) しかし、これが「当然のことであって問題がない」わけではないことについては、新正幸教授の鋭い指摘があるが、それについては後述する。

4) 鈴木隆夫「自肅国会はどう運営されるか——国会法改正の主要点」時の法令162号(1955)1頁以下。奥野健一「改正された国会法——解説と問題点」ジュリスト78号(1955)2頁以下を参照。

5) 佐藤功「国会法改正の問題点」時の法令124号(1954)15頁以下。

6) 野中俊彦「議員立法」ジュリスト955号(1990)104頁。

7) 佐藤・前掲論文16頁。

8) 小野善康「政党と立法」公法研究47号(1985)66頁。

9) なお、議員による発議以外に、二つの内部発案の制度がある。すなわち、国会法50条の2は、「委員会は、その所管に属する事項に関し、法律案を提出することができる」と規定している。この場合、委員長がその法律案の提出者となる(同条2項)。また、同法54条の2は、「参議院は、国政の基本的事項に関し、長期的かつ総合的な

調査を行なうため、調査会を設けることができる」と定めている。調査会は、その調査結果につき、所管の常任委員会に立法の勧告を行なうことができるとともに、自ら法律案を提出しうる（同法54条の4）。

2 内閣の法案提出権

（1）実務上の解決 先にみたように、憲法には法律発案権の行使主体を明示する規定が存在しないので、内閣に法案提出権があるか否かについては、憲法制定当時から議論があった。「内閣総理大臣は、内閣を代表して議案を国会に提出し…」と規定する憲法72条は内閣の法案提出権の根拠としてよく援用されるが、その制定過程をみてみると、マッカーサー草案64条では、「総理大臣ハ内閣ニ代リテ法律案ヲ提出シ…」とされており、つづく3月2日案（74条）でも、改正草案要綱（68条）でも、「法律案」とされていた。これが改正草案では、「議案」となり現行の規定となったのである。その事情につき、佐藤達夫氏は、「法律案というのでは狭すぎる、予算の場合もあるだろうということから議案というふうに表現を改めた」と述べている¹⁾。したがって、実務レベルでは当初から、内閣の法案提出権は肯定されていたわけであり、確認的に内閣法5条が、「内閣総理大臣は、内閣を代表して内閣提出の法律案、予算その他の議案を国会に提出し…」と規定したものと解されうる。それはまた、「国会の新しい地位に鑑み、内閣の法律案提出権を真正面から規定しないで『議案』の名を以てこれを掩い内閣法第五条において、始めて遠慮深く取り出したかたちである」とも評しうる²⁾。

（2）内閣の法案提出権肯定説 実務上は内閣法5条により立法的解決がはかられたが、学説上はその後も対立がある。通説的見解はこれを肯定する説であるが、その論拠はひとつではなく、その組合せや力点の置き方も論者により異なる。したがって、安易な学説の整理は慎むべきであるが、まずは、よく援用される論拠を拾いあげてみよう。

①憲法72条の「議案」には、法律案も含まれる³⁾。

②法律の発案は国会の議決権を拘束するものではなく、国会は自由に審議、

修正することができ、否決することもできる⁴⁾。

③国会と内閣との共働をみとめる議院内閣制を憲法が採用している⁵⁾。

④内閣の法案提出権の有無は、立法による解決に委ねられている⁶⁾。

⑤立法的解決（内閣法5条）とその国会による受容により先例あるいは慣習が確立している⁷⁾。

⑥内閣の法案提出権を否定しても、内閣総理大臣および国務大臣の過半数が国会議員として発議権を持つので、実質的にはこれを肯定するのと変わらない⁸⁾。

⑦憲法73条1号の「国務を総理すること」から認められる⁹⁾。

⑧実際問題として技術的な立案作業から行政官僚の参加をしめ出すことはできない状態である¹⁰⁾。

このように、肯定説の論拠を整理することができるが、若干留意すべき点がある。

まず第一に、①の論拠についてであるが、これを論拠とすることに批判的な肯定説も有力である。それによれば、憲法72条は、「内閣がある種の議案を提出する権能を有することを前提とし（たとえば、予算や条約の承認を求める議案などは、内閣にその提出権があることが別に定められている）、その場合に、内閣総理大臣が『内閣を代表して』これを国会に提出する職務を有する、と定めただけである。本条を根拠として、内閣がどのような議案を国会に提出することができるかを決定することはできない。内閣がどのような議案を国会に提出することができるかは、本条とは別の根拠にもとづいてきめなくてはならない」とされる¹¹⁾。このような見解は、内閣の法案提出権を否定する説の論拠としても用いられるものであるが、これに対して、①を論拠とする肯定説の側からは、「予算についての86条および73条5号の規定は内閣のみに提出権があり、議員には提出権がないことを示すところに特別の意味があるのであり、これらの規定が法律案については内閣には提出権がないことを意味するものと解すべき理由はない」との反論が出されている¹²⁾。

第二に、②の論拠について、法律の発案が立法作用の一部をなすものではないことを付け加える説がある。それによれば、「発案は立法過程の一部分では

あっても、国会の議決権を拘束するものではなく、国会は自由に法律案を修正し、削除し、あるいは否決もしくは廃案とすることができるのであるから、立法作用の一部分とみることとはできない」とされる¹³⁾。とりわけ、山本浩三教授は、G. イエリネクの影響を受けたと思われるカレ・ド・マルベールの発案衝撃論に基づいて明確に論じている。すなわち、「立法作用を国の立法意思の決定であり、法律案の議決作用であるとすれば、発案は立法作用に入らないことになり、発案を他の国家機関に認めても立法権の侵害にはならない」「私は立法作用を国の立法意思の決定作用、法律案の議決作用であるとする。それゆえ、その立法作用のための準備作用、イエリネクによれば、立法作用に対する『衝撃作用』は、立法過程において重要な役割をはたすが、立法作用の一部であるとは思えない。内閣総理大臣が内閣を代表してどのような法律案を提出しようが、その全部的否決、部分的修正、全面的承認などの議決権を国会が独占するかぎり、国会の唯一の立法権は侵犯されないと考える」¹⁴⁾とされる。

第三に、③の論拠について、これを否定する肯定説もある。たとえば、山本教授は、「私は…議院内閣制であるからとうぜん内閣に発案権を、認めるべきであるとも思わない。もしそうであるならば第三共和政、第四共和政の憲法においてわざわざ大統領や内閣総理大臣に発案権を規定する必要はなかったはずである」とされる。

(3) 内閣の法案提出権否定説 以上に概観した肯定説が通説であり、否定説は少数説にとどまってきた。ただし、肯定説の側からも、「法律の発案権も、広い意味での立法権とみて、民主的な立法の建前をつらぬこうとすれば、否定説の方がすっきりしているといえる」¹⁵⁾と言われるようにそれは無視しえないものである。

代表的な否定説として、ここでは佐々木博士の見解を引用しておこう。「法律案の提出は国会がこれを為し得る。且国会のみがこれを為し得る。内閣はこれを為し得ない。何故かというに、法律を制定することは、…ただ国会のみの権限に属する作用であり、そして、法律案の提出は法律を制定する作用をなすものであるからである。一の作用についての提案は、実際上の意味において、その作用の中、最も有力なはたらきを為すものであるから、本来その作用を為

すの権限を有しないものが、その作用について提案する、ということは矛盾である」「然れば、内閣が法律案を提出することは、憲法の認める所でない。内閣が、何らかの法律の制定せらるべき必要を思う場合には、その意思を国会に通ずればよい。憲法第72条によれば、内閣総理大臣は内閣を代表して議案を国会に提出する。ここにいう議案とは、本来内閣の権限に属する作用についての議案である。故に、本条により、内閣が或作用について議案を提出し得るためには、その作用が本来内閣の権限に属するものなることを、前提とする。然るに、法律の制定は、前述の如く、内閣の権限に属しない。故に、これについて議案を提出しうるものではないのである」¹⁶⁾。

次に、否定説からの肯定説に対する批判・反論を整理すれば、以下の通りである。

(a)肯定説の論拠①について 憲法72条の「議案」には、法律案は含まれない。その理由はすでに述べた。

(b)肯定説の論拠②について 法律の発案は立法作用の一部であり¹⁷⁾、国会が唯一の立法機関である以上、立法作用を独占する¹⁸⁾。また、法律の発案が国会の議決権を拘束しないとしても、「原案は少なからざる影響をもつものであり、大多数の法律案について言えば、ほぼ原案の趣旨通りに定まるのであるから、原案の起草自体を国会以外の機関にゆだねることは、国会の立法機関たる実質を、いちじるしく損なうものである」¹⁹⁾。

(c)肯定説の論拠③について 「議院内閣制は、国会と内閣の関係を曖昧にするものではなく、内閣より国会が優位に立つべきことを意味するのであり、さらに、さなきだに行政優位のわが国の伝統にかんがみ…内閣の権限はできるかぎり消極的に解し運用することが必要」とされる²⁰⁾。

(d)肯定説の論拠⑥について 「仮にいうが如く法律案の提出を内閣がなし得るか否かは実際政治的に見て重大な問題でないとすれば、それこそその何れにも決することも容易な訳であるから、理論上少しでもより合理性のあると思われる方の解釈を取るべき」であるとか²¹⁾、「しいて内閣に発案権をもたせなくてもイギリスのように大臣が所属する院の一員として議員たる資格において運用は可能であるから、基本線となる原則を可能なかぎり厳格にすべき意味にお

いて否定説を妥当と考える」という反論が出されている²²⁾。

ともあれ、否定説の特質は、国会が「国の唯一の立法機関」であること、すなわち、国会単独立法の原則を法律の発案も含めて理解する点にある。

- 1) 「憲法運用の実際——憲法調査会委員会報告書全文と解説」法律時報12月号臨時増刊(1961) 283頁。
- 2) 浅井清・国会概説(1948) 203頁。
- 3) 佐藤功・憲法(下)〔新版〕(1984) 870頁。
- 4) 清宮・前掲書411頁。
- 5) 同411頁。
- 6) 同411頁。
- 7) 同411頁。宮沢俊義(芦部信喜補訂)・全訂日本国憲法(1978) 553頁。
- 8) 宮沢・前掲書451頁。
- 9) 小嶋和司・憲法概説(1987) 370頁以下。佐藤幸治・憲法〔新版〕(1990) 136頁。
- 10) 小林直樹・憲法講義(下)〔新版〕(1981) 147頁。
- 11) 宮沢俊義(芦部信喜補訂) 前掲書552頁。同・新憲法と国会(1948) 150頁も参照。
- 12) 佐藤功・前掲書870頁以下。同旨として、橋本公亘・日本国憲法〔改訂版〕(1988) 532頁。
- 13) 大西芳雄・憲法要論(1964) 142頁。佐藤幸治教授は、「発案は…立法そのものではなく…立法の準備行為とみるべき」であるとする(前掲書・136頁)。
- 14) 山本浩三「法律の発案権」同志社法学30巻1号(1978) 174頁。
- 15) 小林・前掲書147頁。だからこそ、「いわば受動的ないし消極的肯定説が主流をなしてきたように思われる」と言われるのであろう(野中「内閣の法律案提出権」前掲193頁)。
- 16) 佐々木忽一・日本国憲法論(1949) 259頁以下。
- 17) 小林孝輔・憲法学要論〔三訂版〕(1981) 236頁。
- 18) 上田勝美・憲法講義(1983) 219頁。
- 19) 鈴木安蔵・憲法学原論(1956) 444頁以下。
- 20) 小林孝輔・前掲書236頁。
- 21) 磯崎辰五郎「法律案の提出者」統治行為説批判(1965) 34頁。
- 22) 酒井吉栄「国会の地位」清宮・佐藤編・憲法講座第3巻(1964) 19頁。星野安三郎「第59条」有倉・小林編・基本法コンメンタール憲法〔第三版〕(1986) 212頁も参照。

3 最近の学説

以上、従来の学説を整理してきたが、最近、肯定説と否定説の立場から注目すべき見解が出されている。すなわち、新正幸教授と杉原泰雄教授の見解である。

(1) 新教授の見解をみてみよう。まず、通説的な肯定説が、内閣の法律発案権を肯定する際に、憲法41条後段(「国会は…国の唯一の立法機関である」)の「立法」権を、法律案を法律として成立せしめる終局的な決定権に限定的に解しているのに、憲法41条後段を根拠にして、憲法上議員に法律発案権が当然に認められるとしている点が批判される。すなわち、憲法41条後段の「立法」権を限定的な狭義の意味に解するならば、そこから法律発案権についていかなる帰結をも導き出すことはできないからである^{1) 2)}。次に、否定説に対しては、それが法的性質を全く異にする故に理論上明確に区別されるべき発案(立法探究行為)と議決(立法判断行為)を区別しておらず、また、論理的につきつめれば、憲法上国会以外の他の機関にゆだねられた一切の立法行為を法律発案と同様に憲法41条後段の「立法」に含めざるをえなくなると批判される³⁾。結局、日本国憲法には法律発案権を明示する規定が欠けている以上、いずれの機関の権限に属するか不明な権限の帰属機関の決定権は、国会の「国権の最高機関」性を定める憲法41条前段を根拠にして国会に認められることになり、その前提としての第一次的・抽象的な法律発案権それ自体も国会の権限と推定される。かくして、国会は、この法律発案権に基づき、法律により現行制度を法定したとされる^{4) 5)}。この新教授の見解は、これまで曖昧であった議員の発案権と内閣のそれを統一的に説明している点で大いに注目される。

(2) 次に、杉原教授は、「国会が『唯一の』立法機関であるということは、他の機関には立法作用を認めないということ」であり、「憲法には、内閣にそれ(法律の発案)を認める規定はない」以上、政府による法律の発案は認められないとされる⁶⁾。また、肯定説の側から、総理大臣や国務大臣は議員として法律を発案できるから、論議する実益がないとされるが、これに対しては、論

議する大きな実益があるとされる。すなわち、「政府に法律の発案権がないとすれば、政府は法律の発案のために人員と予算を使用することができず、それらはあげて国会に移さなければならなくなるはずである。それらを国会に移したとき、国会は、文字通り、『国の唯一の立法機関』となりうる条件を与えることになる」からである⁷⁾。これは、肯定説、否定説を問わず、従来の学説に発想の転換を迫るものである。

- 1) 「通説が内部発案を当然視することの背後には、法律議決権を有するものは法律発案権をも有するという憲法上何ら論証されていないドグマが潜んでいるものと憶測せざるをえないのである」(新正幸・憲法と立法過程, 1988・204頁)。
- 2) 以上, 新・前掲書202-4頁。
- 3) 以上, 同204-5頁。
- 4) 「法律発案権それ自体の推定は法律発案権の帰属機関の具体的決定権のいわば形式的前提たるにとどまり、そこから特定の発案類型が論理必然的に出てくるというわけのものではなく、内部発案・外部発案の法定それ自体はあくまで後者の具体的決定権にもとづくものというべき」である(同210頁)。
- 5) 以上, 同206-8頁。
- 6) 杉原泰雄・憲法(1990)116頁。
- 7) 同117頁。杉原・前掲論文240-1頁も参照。

結びにかえて

これまで従来の学説を整理してきたわけであるが、ここで確認されることは、法律発案権の問題をもはや解決済みの論点、あるいは、もはや論議する実益のない問題として片付けることはできないということである。やはり、広く立法過程にいかにして民意を反映させるかという観点から、あるいは、行政国家にどのように対応すべきかという観点からこの問題について議論を深化させるべきであろう。したがって、拙速な結論づけは避けた方が賢明であろうが、簡単に私見を述べて結びにかえたい。

憲法は、議員の法律発議権を含めて、法律発議権の主体についての明示的な

規定を欠いている以上、この問題の解決は立法に委ねられていると解される（この点では、新教授の見解が支持される）。したがって、現在の立法状況からすれば、内閣の法案提出権については、消極的、ないしは制限的な立法措置を講じるほうがより憲法規範に適合していると思われる（政府の法律発案のための予算と人員を国会に移すという杉原教授の見解が示唆に富む。すなわち、現状のままで国会の立法スタッフを強化したとしても限界があるからである）。しかし、当面は、立法における議会の主たる役割を、「政府法案に対する精査・修正等を、民意をふまえて行うこと」¹⁾とし、より実現可能な国会改革の方策を、その限界に留意しつつ、検討することがより有効ではないかと思われる。

1) 清水睦「現代議会の立法をめぐる状況と展望」公法研究47号30頁。

江戸時代後期の民衆信仰史料(三)

—— 石裂山社人荒井家所蔵文書(二) ——

紙 谷 威 廣

江戸時代の民衆は、現代の我々が想像する以上に「旅」を望んでいたとも言える。何故ならば、前近代的支配では、土地とそれに働きかける民衆が主たる支配の対象であり、民衆が旅をする自由は、支配者にとっては本来認めることのできないものだったからである。したがって、これら民衆に許されたのは「信仰の旅」だけであった。

しかしながら、民衆は自己を解放する一時的な手段としての旅を、経済的障害、社会的障害、政治的障害を克服しても達成すべき目標としていた。そのために江戸時代の民衆の間には、経費を積み立てて社寺参詣の旅に出る「講中」や村の代表者を毎年送る「代参講」などの「旅の形態」が成立していた。

これらの社寺参詣の旅に出る者は「道者」と呼ばれていた。これに対して、道者を組織する宗教者は「先達」等の名で呼ばれていた。さらに、寺院や神社、山岳霊場などの参拝対象には「御師」などと呼ばれる宗教者が宿坊をかまえ、宿泊や参拝、登拝行などの世話をした。石裂山の場合は神社の形態をとっていたので、登拝行の世話をしたのは「社人」と呼ばれた人々であった。

石裂山には登山口が二ヶ所あり、栗野口尾鑿山と呼ばれる南側の登山口と久我口石裂山と呼ばれる北側の登山口から成立していた。南側の登山口には斎藤老岐と呼ばれる社人が宿坊を設けていた。これに対して、北側の久我口には荒井靱負、湯沢藤太夫、湯沢権太夫、湯沢新太夫、湯沢豊後という五軒の社人が宿坊を設けていた。本稿で紹介するのは、この中の荒井靱負と称した社人の文書である。前号では、社人の組織や道者の参詣、登拝行の世話などの史料を紹介したが、本稿では社人の由緒その他を中心にまとめた。

石裂山信仰の成立については、史料(一八)で、石裂山は『三代実録』に記載された「加蘇山神社」で、位田を与えられたと述べ、それにもかかわらず、中世から近世初期期には神領も奪われ、神社が衰退したと説明している。

しかし、このような社人側記録を裏づける中世史料は知られていない。実際に社人としての地位が確立したのは、寛政五年(一七九三)の神職の裁許状〔史料(二)〕が授与された頃ではないかと思われる。しかし、享保一四年(一七二九)の「社人由緒書上」〔史料(一)〕には、太夫名が使用されているので、すでに何らかの宗教的活動がなされていたことは確実である。それから間もない元文五年(一七四〇)には久我口石裂と栗野口尾鑿の両社人が、登拝行の道者の初穂収授をめぐって争いを起こしている〔前号掲出史料(五)〕ので、すでに民衆の信仰の対象となっていたことは明らかである。

しかし、江戸幕府の宗教統制の中では、石裂山社人の宗教的地位は容易に確立しなかったようで、天保四年(一八三三)〔史料(五)〕、天保六年(一八三五)〔史料(六)〕には社人の身分を認めて、宗門人別帳を平百姓の扱いから除外するよう要求している。さらに、その文書の中で湯沢豊後という国名使用の社人が確認され、天保九年(一八三八)には荒井靱負も長門の国名が授与されたことが知られる〔史料(七)〕。社人は苗字帯刀を許されて、平百姓よ

り上位の身分であることを主張したのである。

石裂山は地理的には日光連山の一面をなしていた。したがって、日光修験の修行地としての霊場の一部であったと考えられる。そういった点から考えると、石裂山は日光修験の霊場の一部が、民衆の信仰を集めることで、地方霊山として独立したものでなかったろうか。社人が日光東照宮御神忌に際して「施物」を受取ったのも、それらの宗教活動と無関係ではなかったと考えられる〔史料（五）・（二三）〕。少なくとも、さしたる信仰対象でなかった「石裂山」が民衆信仰を集めることによって、社人としての組織を確立していった過程が、これら荒井家文書の中から確認することができる。その民衆信仰把握の一端が「石裂山御利生記」〔史料（一七）〕で読みとれるであろう。

本史料は昭和四六年に、荒井家の御好意で写真撮影したものであり、以下の凡例にしたがって筆者が記録したものである。

- （一）助詞等の異字、変体仮名は読みやすい平仮名か、片仮名で示した。
- （二）略字および古体字は現在使用される漢字を使用した。
- （三）頻繁に使用される俗字はそのまま使用した。
- （四）不明の箇所は、筆者の読解力の欠如によるものが多い。
- （五）文書の番号は筆者の整理の都合上つけたものである。
- （六）文書名も筆者の理解の範囲でつけたものである。

付記 本史料の所蔵者荒井家の御好意に深く感謝するとともに、未発表の史料が残されていることをおわびする。

(一) 社人由緒書上(享保十四年)

乍恐御申上候は

迄五代ニ罷成申候

湯沢幸七 先祖

此度拙者共先祖由緒御尋之上承傳候趣申上候

大和 荒井靱負 先祖

湯沢權太夫 先祖

山崎大和新左衛門三右衛門 是は以前度差恕と

被仰付候訳は

一 治部太夫祖父治郎太夫はハ隠居仕家督權太夫
相続仕ニ代ニ罷成申候

右は治部太夫靱負兩人ハ分地仕神職相勤

来り申候以上

享保十四酉年閏九月日

差恕靱負迄七代ニ罷成申候

湯沢治部太夫 先祖

篠原右左衛門様

一 山崎大和但馬長左衛門長兵衛治郎太夫同治郎太夫同

治部太夫迄七代ニ罷成申候

入江甚左衛門様

湯沢藤太夫 先祖

一 但馬二男与□右衛門七右衛門喜兵衛五右衛門藤太夫

(二) 神道裁許狀 (寛政五年)

下野国都賀郡上久賀村岩裂山人丸大明神
神主荒井大和正藤原致充着風折鳥帽子狩衣
任先例專守社職格式可抽太平精祈者
神道裁許狀如件

寛政五年三月九日

神祇管領長上從二位卜部朝臣□俱御判

(三) 神樂殿土地壳渡証文 (文化八年)

神樂殿地面差出し申証文之事

御山入口ぶつそう畑

一 拾二間

下々畑式畝拾式歩

六間

但し神樂殿地面右畑統山共拾七間四方を
境ニ杉植置可申候神樂殿入口石之鳥居内右之方
は岩境に御座候

右神樂殿建立之地面之儀ハ 御山内御仲ヶ間中立合
を以所々地面見分仕候得共 御内山ニ相応之地面
無之先年神樂殿建立之積リニ而改地形候場所茂
不順ニ付是も当時心底ニ不相叶地面にて何連難
取極メ候処貴殿方御見立ニ而拙者所持有之候畑外
無之由ニ而右地面代金壹両壹分ニ而差出し呉候様御
無心ニ付猶又拙者茂神樂殿地面ニは可然場所と存
早速致承知右畑神樂殿地面ニ指出し申候処相違
無御座候依之

御本坊様え鞠負所持之畑熟談之上神樂殿

地面に差出し吳候様無心仕候処靱負得心之由ニ付右地面ニ建立仕度趣御仲ケ間一同御願申上候処御見分之上

右地面ニ建立可仕旨被仰付候扱右畑山代金老兩疋分は御仲ケ間五人出金但し私外四人之御同役方も金老分宛御出金ニ而金老兩疋ニ受取申候拙者共々金老兩疋分之代金ニ罷成申候向後私共ニ五人惣持之地面指出し申候然上ハ右畑畝歩御仲ケ間五人え割付御年貢上納並諸役五人ニ而相勤申筈ニ御座候右畑ニ付違乱申間敷候為後証依而如件

売主

文化八辛末年

荒井靱負印

八月

立合

湯沢新太夫

湯沢権太夫殿

(四) 神樂式次第 (文化十三年)

神樂式次第

面付十二坐神樂
舞式窟戸祭壇之
加左利或為一通仍
神信有傳之尤
十神事窟出之
式方近々可傳
之狀仍而如件

文化十三子歲

五月吉日

太平山

青木左京

政芳花押

石裂山

御社中

(五) 社人身分願書(天保四年)

乍恐以書付奉願上候

一 私共儀古来^ち神職ニ御座候ニ付先規は石裂山附之地面茂少々御座候而所持仕致相統罷在候處当国佐野家^ち出候久賀式部と申者當郷之内ニ城を築致在城罷在候節右地面□貢地と相成地方兼帶仕大坂御時世之間茂神職道不絶相勤罷佐候其後御治世と相成慶長二十乙卯年

御神君様御名判之御條目御触渡被為遊同年三月
難有奉拜見猶神職道急度相守且又天和二壬戌

年八月被 仰出候御條目並ニ其御寛文五年

之御條目共ニ御触渡御座候儀茂神職故と乍恐奉

存候然ル處其後寛文六午年御檢地御改□時□

私共兼帶之地面名請被 仰付ニ付則上京仕候者

は官名無官之者平名ニ而兼帶之畑名請仕日光

御本坊様御領と相成高百拾八石之内式拾八石九分五人

之社人ニ而兼帶仕石裂山之儀は 御本坊様御持ニ

相成私共同職五人御本坊様御支配ニ被

仰付神職相勤罷有候處其節人別御改之時分宗

門御改一通之儀と存百姓同連ニ差上候儀先祖之全く

心得違ニ而只今ニ相成難儀至極仕候乍然社人ニ相違無

御座候故其後元文五年尾鑿山之栗野口斎藤宅岐

と出入之節寺社 御奉行所様え茂苗字帶刀ニ而

罷出山名因幡守様御内寄合御例席ニ而濟口被

仰渡候節茂湯沢治部太夫湯沢權太夫と奉差上

上野御執當圓覺院様御高判被遊候而私共之御下之

濟口証文所持仕猶又翌寛保元年四月

御本坊様より改而帶刀御免被 仰付其後延享

元年四月又候鳥帽子狩衣御免被 仰付冥加

至極難有仕合奉存候猶亦安永二巳年九月太々

(神) 楽一件ニ付神社 御奉行所様へ罷出候節茂

上下大小二而松平伊賀守様安藤彈正少弼様御礼

之席へ罷出候近頃茂文化十三子年藤太夫借錢出

入ニ付 御勘定御奉行様へ茂上下帶刀ニ而罷出候猶

亦日光山口様御役所より引続当 御奉行所様

御役所御改政以来萬端ニ付苗字帶刀ニ而罷出別

而御年始之節は上下大小ニ而相勤来候儀偏ニ神

職御免故之儀と難有仕合ニ奉存候殊ニ又

東照宮様御神忌之度々御施物鳥目拾貫文下

御鳥目拾五貫文別段配当日限拾枚其度々

御公儀様より被下置候由 御本坊様御役人衆

中様より被 仰渡被下置候儀誠ニ以冥加至極難有

仕合ニ奉存候將又御組頭大久保加助様御初御勤

役之御組頭様方石裂山御見廻之度々羽織袴大

小ニ而御出迎申上候處去ル文政六末年地方所持仕
候ニ付而は小前百姓と相心得可申社用旦用ニ往来之節

は帶刀居たし候共無御座構常は相成不申候趣ニ被

仰渡候右ニ付毎歳七月晦日 御奉行所様より年々

御出役様石裂山參詣茂数多之儀故悪敷者共も

立入候哉□御出被成候節杯茂御出役様御出席候

百姓代之者着座仕私共儀は末座ニ而萬事請引

仕候様罷成候間參詣之旦中へ対し候而も面目を失

ひ候次第ニ御座候就中太々講中参り居候節ニ祈

禱等茂仕候處前々と相違仕候儀卑賤之身分ニ□

見受候得は自然と帰依茂薄く祈念相頼候もの

減少仕候次第に而乍恐難洪至極仕候依之何卒格

別之以御憐愍を去ル未年以前之御振合を以神

職之身柄ニ被成下候様奉願上候此段何分ニ茂御憐

愍之思召を以願之通被 仰付被下置候様幾重

ニ茂奉願上候以上

石裂山

天保四巳十月

荒沢鞠負

湯沢新太夫

湯沢権太夫

湯沢藤太夫

湯沢豊後

御本坊様

御役人衆中様

(六) 社人身分について願書(天保六年)

乍恐以書付奉願上候

石裂山荒井鞠負外三人右惣代鞠負奉申上候私共儀

神職一派ニ御引立被成下置□□去ル巳年中

奉願上候処格別之思召を以同十一月中一同被

召出其節御白洲□様席ニ而被

仰渡一同難有仕合ニ奉存候右ニ付其以来万事

右□□相済居候間宗門人別帳えも五人一列□

様席ニ被 仰付□趣奉書上候然ル処去

六月中伐木御願ニ罷出候節豊後老人

□様外四人之もの共は以来下様ニ可罷出段

被 仰渡御座候左候得は前々御取扱

御振合とは別段ニ相成候義ニ御座候尤五人之もの共

往古諸向一同ニ仕来候義ニも御座候ニ付一同前々之

通り□様席ニ被 仰付被下置□奉願上候

五人之内豊後老人上席ニ被

仰付残四人之もの共一段格下ケと相成候は先祖共又は

且中え聞ひ誠ニ以当惑至極歎ケ敷奉存候

間恐も不顧奉願上候何卒以

御慈悲之思召五人身分一同之御取扱被成下ヒ置

其節一同□様席ニ被

仰付候通被成下置度此段偏奉願上候以上

石裂山社人

二月

荒井鞆負

一 天保九戌年湯沢權太夫殿養子貞助殿

湯沢新太夫

別紙ニ有之候

湯沢藤太夫

差添ニ相頼差上金之願書 御殿之差出

湯沢權太夫

申候右願ニ付

右惣代

御菓子料

御納戸

天保六未年二月十九日

荒井鞆負印

御奉行所様

一金壹分

申橋主計殿

一同 断

同 古橋左京殿

一同 断

同 斎藤内藏殿

(七) 国名許可一件控 (天保九年)

御菓子料

御勝手衆

一 銀貳朱

渡邊左源太殿

(表紙)

一同 断

同 斎藤庄藏殿

天保九年

同五月十八日被 仰渡候儀有之候間

国名御免ニ付委細之訳控帳

麻上下用意一兩日中仲ヶ間差添

戌五月吉日

老者可罷出候由村継を以被 仰越候得共

年三十九才

仲ヶ間差支ニ付同廿五日迄御日延□罷出御聞

荒井長門

済ニ相成申候同廿六日四ツ時麻上下着用

差添貞輔殿□羽織御納戸御役所え

罷出候所御納戸斎藤内藏殿御書付を以

国名受領被 仰渡御立会御吟味役

南麻代輔殿御勝手方老分斎藤庄藏殿

右被 仰渡相添御書付被下則別紙ニ

右拝借金之儀ニ付証文差上候得共全ク

拝借仕候儀ニは無之国名受領之儀ニ付

金五拾両五ヶ年之内一ヶ年金拾両宛

上納

奈良晒

御留守居え

此代金貳分式朱日光買入

一 金貳百疋宛

御納戸御三人

一 同 百疋宛

御吟味役御兩人

御留守居役所

一 同 断 宛

御書役御兩人

御勝手役老分

一 同 断 宛

普請方御兩人

一 同五拾疋宛

部屋住本役

兩人

一 金五拾疋宛

御勝手役六人

同部屋住見分

鈴木武内殿

一 同老朱宛

高橋国太郎殿

斎藤常五郎殿

春木哲之助殿

一 同老朱宛

御仲間頭御兩人

一 同百疋宛

御納戸出納役

三人

以上

一 麻上下ニ而外様衆ふ残御内衆ふ残

御小人衆不残手札一而相廻り申候外様

杉江勇馬殿ち七色茶為御祝儀申

受候為返礼羊羹二本入進上

一 御役所御吟味役衆ふ残手札ニ而相廻り

申候但し高木源右衛門殿え白砂糖

進上右御同人より為御祝儀風呂敷

扇子二対申受候両 御組頭衆 え

手札差上申候

御奉行所

右之段 御殿ニ而国名被 仰付候ニ付

麻上下ニ而権太夫殿養子貞輔殿

差添御訴所より右之書付差出

申候事

乍恐以書付奉申上候

一 石裂山社人荒井靱負儀石裂山

道橋等大破仕候間普請仕度去 酉

年中普請出来仕候右之詔を以此度

御本坊様え御召之上長門と改名

可仕旨被 仰渡候間此段書付を以

奉申上候以上

(八) 神具修繕金借用書(嘉永六年)

奉拝借証文之事

一 金拾五両也

石裂山

天保九戌年 荒井長門

五月廿四日 湯沢権太夫

右は石裂山太々御神具及大破修繕出来兼
仲ヶ間一同奉願上候処御聞濟被下置右修繕手当
として前書之金子拝借被 仰付難有仕合ニ

奉存候然ル上は不捨置御神具相調修行可仕候

尤右金子御返納方之儀は無利息五ヶ年賦ニ仕

老ヶ年金三両宛当丑年より巳年迄ニ毎年

八月御番所様御引弘之節急度可奉上納候

為後証拝借証文奉差上候処依而如件

石裂山社人惣代

嘉永六丑年五月十三日

拝借人 湯沢新太夫印

同 断 荒井山城印

御殿

御役所様

(九) 拝借金返済書 (嘉永六年)

乍恐以書付奉申上候

一 石裂山社人共一同奉申上候当年中太々御神具

修繕金拝借奉願上候処御聞濟被成下無利息

五ヶ年賦ニ上納可仕趣ニ而金拾五両也拝借被

仰付御神具出来難有仕合奉存候右年賦金

三両也此度上納仕候此段一統難有御礼奉申上候以上

社人惣代

湯沢静馬印

嘉永六丑年九月十二日

同 荒井雅楽印

同 湯沢新太夫印

御殿

御役所

(一〇) 神具拝領願書 (安政二年)

乍恐以書付奉願上候

一 石裂山社人一同奉申上候私共去ル天保二卯年焼失之
砌り面々神前之掛置候翠以廉焼忘仕今以出来兼

參詣之堂者え対し候而茂甚に不宜候ニ付奉願上候
御掛古し御下り之品有之候ハ、銘々老張宛頂戴仕度
奉願上候何卒格別之思召を以被為 聞召訳
御下ヶ被成下置候様偏奉願上候以上

安政二卯年四月

荒井長門印

湯沢監物印

湯沢権太夫

湯沢新太夫

湯沢豊後印

御殿

御役所

(一一) 社人釈放願書(安政五年)

乍恐以書付奉願上候

石裂山社人一同奉申上候同職湯沢権太夫儀
心得違ニ而出願ふ仕杉木伐木仕候段追々諸吟味
奉請候上押込被 仰付重々恐入候就而は
恐多御願ニは御座候得共此上権太夫身分之儀
厚以 御慈悲之思召御仁恵之御沙汰被
仰付被成下置候様一同偏ニ奉願上候以上

石裂山社人

安政五年十二月廿三日

湯沢但馬印

湯沢新太夫印

荒井長門印

湯沢監物印

御奉行所様

(一二) 檀中免罪願書(安政六年)

乍恐以書付御届奉申上候

御役所様

石裂社人惣代荒井長門奉申上候

此度近村野尻村ニおいて芝居興行いたし

右村え同意之村四ヶ村有之関八州

御取締り御召捕ニ相成當時小山

宿ニ百人余糺明罷在至極難渋仕候間

石裂山社人共え嘆願いたし呉候様

被相頼銘々且中之間柄ニ故有之

歎敷奉存候間嘆願として被□□

此段乍恐以書付御届奉申上候何卒以

御慈悲之思召御聞濟ヒ成下候様偏奉願上候

以上

石裂社人

安政六未年九月廿三日 荒井長門印

御殿

(一三) 御神忌御用願書 (元治元年)

乍恐以書付奉願上候

石裂社人一同奉願上候来丑四月

東照宮貳百五拾年御神忌ニ付私共儀

御神忌ニ御加え被下成候而 御用被 仰付候様

先例之通奉願上候何卒以 御慈悲右願之通

被 仰付被下置候様一同幾重ニ茂奉願上候以上

石裂社人

元治元年四月

湯沢新太夫

湯沢豊後

荒井長門印

湯沢権太夫

御殿

湯沢監物

荒井寛裕

御役所

社職見習申聞彌

勉勵可被致畢

(一四) 社人任命狀(明治二年)

明治五申年

六月 長官印

源寛傳

(一六) 呼出狀(明治五年)

右須為下野国都賀郡

石裂加蘇山神社々人

宜從長官之指揮不可

闕怠於神事者也

明治二年巳十二月

神祇官

社用之儀

御坐候間明七日

辰刻入来

可有之候以上

申ノ 六月六日 長官印

(一五) 任命狀(明治五年)

荒井寛裕殿

(一七) 石裂山御利生記

(表紙)

下野国あら井口

をさく

石裂山御利生記大評判

(絵図)

日光山より四五里南ミの方下野国荒井口の

石裂山と云ハ神代より此御山にて尊キ火防

の御神と聞及しに久しく心懸ケて其御師

乃荒井靱負と云つるにつきて御山へ参詣せし處

誠に其神境に行ケば心も何となく恐れ入りて

ありがたくたつとくおもへ志られし御神也人々信こ

して不思議の御利生有し事所々に多しと云

野州都賀郡栃木西原町先年大火にて

百軒ばかり焼失せしまん中にて□屋

兵七と申もの常々信心ぶかき人にて石裂山火

防の御札を箱入にして屋根にさゝげをき毎

朝之御供を献じ萬事を心願いたし一心を

こめし故か皆黒土となる其中にふしぎや只

一軒のミ残り□もきらずありがたき事也

一 下総国葛飾郡岩井村五郎兵衛と申もの

伊勢参宮に出て伊勢国明星と云宿へ

とまりし処にいかなる事か其夜ふと兩足とも

にいたみだし誠に一足も引ことならず此人

ざいしよにおいてハ何事によらず常に石裂

山を殊の外信ずれば此夜の中八ツ時分迄心に

何を唱えけんや同行ハつかれて眠る其中に誠

をつくしていのりければ霊げんありしにやよく

朝足かるがると此旅宿を立出しとなり

一 野州都賀郡城内村栄三郎と申もの年

たける迄子なきにたまたま一人むすめ乃子

よふやく出生せしが生れつきよやくやせおと

ろへていかにもそだちがたくと両親もおもへければ

信心より外ハあらじとて其村より石裂山へハ
遠方なりしが三歳にならば参詣し奉ら

せんと立願してそれより父おやハ子のために三

四度も参詣せし處いつとなく肥立^{こいたち}せいじんせしと

なりされども四歳になりてもいまだ参詣いた

させざれば恐べきかな五歳になりふと両眼みへ

なくなりて両親もいかゞせんとおもへしに扱ハ

立願をはたさざるがゆへならんと急におもへたち

石裂山へ参詣につれだち別して七日乃御

祈禱を願ひそれも終りてさいしよへかゝ

りて七日ほどすぐれば誠にふしぎや両眼本の

とふりとなりて偏ニ霊げんのきびしき御

神なりとかや

常陸国茨城郡横田村にて何右衛門とか申

人元福者なるが米杯の買置キにて度々損

亡すれば今ハやふやく煙のたつと云はかりの

おりから石裂山を信じて富ミをとらんと

ておりおり心におもへども何か心ていにいら
ずあるときに石裂山へ参詣して帰りの

おり茶屋に休ミ居れば富ミ札を取出して

ければしきりに此富ミをはるべしと云人あ

り本よりはる心ありし処に又何者かしらざ

るがそばに休ミし人の云に千六十八番を

はるべしと云也其まゝ出てゆき方ハしれ

ずとなりにけるあとにて其意にしたが

うにさいハひ其札ありてはりければ三

百両あたりしとなり

野州都賀郡立木村傳左衛門と申ものの妻大病

幸作

にて九死一生なれば医者法者もいろいろと尽せ

ども更に其印なくいかゞせんとおもひけるにたち

まち心に石裂山乃護魔をたき願べしとおも

へ出して夜の四ツ時分なるに石裂山迄ハ道のり十里

余りもありしにそれよりすぐに人をたのミつかハして

一
さつそく護魔を修行しいたゞきてかゝりければかほど乃病人も食事をすゝみたんと話して十日程すぐれば四五丁ありし處へ病中の礼に行きしとなり

一
奥州石川郡泉田村左五右衛門と申ものあり石裂山より此村へ御師参りし時札を配る世話人と申

事のよししかるに世話人なれば御札村内へ引のこりて一敷ありけるをこと乃ほかにありがたくいただき是をば火防の御札と祭る也とて箱をこしらえおさめ入レ信心し奉る処おりから大風の時近處より出火してまむきの風下になりて誠に今あやうきと云時御札のおかげなりしか北より南ミへふく風をにハかにふきかゝりして少シもさわらず其家のこりてやけとまりしとなり

一
野州都賀郡南魔村利左衛門と申もの乃世倅六月大暑のはげしきにあてられて極大病となる事医者も薬をあたへざる次第なりされバ父

一
おや石裂山を信ずるより外なしとて川に行き垢離カトリをとり納め物をさゞけ奉るべしと心ぐハんし殊にハ好む酒をぐハん酒せんと一心に念ずればむちうの病人たちまちくるしミをさりそれより医者イサの薬にもおよばず追々平癒せしむるとなり

一
當卯の年正月六日の夜石裂山乃ふもにて折節大風なれば御師其外ともに一軒ものこらず焼失す其中に荒井鞠負と云る御師急火乃中にふせぐてだても打すてて取物も取あへず只一人石裂山へむかひはげしきのりをし奉るといへども近火にして急々なればもはや此御師のかこひ乃遍□やけきたる火ハ大風なればいよいよふきちらして今や屋根につくといへどもなをなを祓ハラヘをよんで更にいのりをやめず人数のものハひつしにはたらけどもあら風にカゼしてなかなか人力にて

ハおよばざるにふしぎや何者かハしらざれど

も常に見しらぬ大の男にわか五人俄に水を□

由しぎひに持きたりて屋根にそゞゆへに

ながるゝ水ハ大雨乃ごとくたちまちに消

おさめて其人々ハ惣乱乃中まきれて最

はやゆきがたしれずさり行キけるとなり

まことにおそろしき御利生なり一体この

御師ハ火防の家と申事にてむかし

よりたびたび近隣ちかところ乃出火ありといへども

更に焼失すといふ事ハなしといへり

これこの石裂山乃御神徳ハきびしき

靈げんかなと此度乃評判なり

(一八) 社人村分け願書(文政八年)

乍恐以内々書奉願上候

一 私共守護仕候石裂大権現之古事は

火之神迦具土ノ神之御分身ニ而

石折命と申候御神躰ニ而神代

此山ニ鎮座被為在火之神之御分神

故此火徳ニ依而土地を啼し水□を

退き万国自洲と成広成此故ニ

此神山を加洲山と奉申後又洲

蘇之読と同じに仍り加蘇山神

社と奉申然ニ五十七代 陽成天皇

之元慶二年九月依 勅御神位被

為授候儀藤原時平公御撰之三代実

録ニ詳ニ御座候其節位田等茂被為

時今ニ其神領之境祭場鳥居所と

申而御座候此郷茂加蘇野郷と申候

其後下野佐野家より久賀式部と

申者此加蘇野郷ニ城築加蘇山

石裂之神領迄茂犯取郷名を茂

久賀村と改二十ヶ年程罷在候乍然
加蘇野之郷名今茂残り文字も

改加蘇園村久賀村と二ヶ村ニ相成候
又此久賀家茂左野宗綱ら加勢ニ

出テ元龜三年申五月十六日左野

唐沢之城ニ而小田原北條之為ニ打

死仕此時久賀式部断絶仕候右神領ヲ

犯被取候ニ付私共無禄ニ而御年貢

畑少々所持仕大坂之御代之内ニ而

神職有之儀不絶相勤罷在候其

後 御治世と相成慶長二十乙

卯 年正月十八日 御神君様

御名判之御條目御触渡難有

奉拝見猶神祇道急度相守罷

在候処寛文六年御検地御改之時分

私共所持之地面名受被仰付候ニ付

則上京仕候者ハ官名其節無禄(官)

者ハ平名ニ而持畑名受仕候 日光

御本坊様御領と相成高百拾八石ニ

極り候内ニ地面神職ニ而兼帶仕此

石裂山之儀ハ日光 御本坊様御持

と相成候得は私共同職五人

御本坊様御支配を受神職之故を

以毎年正月 御門主様之鳥帽

子狩衣ニ而御目見被 仰付候殊ニ

東照宮様 御神忌之度々別

段ニ御施物鳥目拾貫文下行鳥

目拾五貫文配当百録拾枚其度々

御公儀様ヲ被下置候由 御本坊様

御役人中様ヲ被 仰渡被下置候儀

冥加至極難有仕合奉在候是等之

故ニ日光目代様御勤役中ヲ當

御奉行所様至迄御年始等上下大小

ニ而古来ハ相勤罷在候又寺社

御奉行所様えも右之振合ニ而相済来候

所ニ近年如何相心得申候哉地方名主

並ニ下役等迄見識を振私共地方所持

仕候ニ付地方所持仕候而は本百姓同様ニ候而

平日名主宅え羽織脇差等致間敷

此方は地方之取扱ニ御座候杯申次第二

御座候而御神君様並御代々様之

御條目之御趣意も相立不申難儀

至極ニ奉存候仍之何卒 御慈悲之

以思召を私共五人之持高二十八石余之

御年貢私共 日光 御本坊様え

直々 御上納仕並久賀村人別相

除候而別組ニ相成候様 御上様 〇

御下知被 仰付被下置候ハ私共 〇

御本坊様え相頼御上納可仕候間幾

重ニ茂御慈悲を以□□右願之通被

仰付御政事之儀は 御奉行所様 〇

奉請候様ニ被成下候ハ

御神君様 御代々様之御條目之

御趣意相立私共神職一□ニ相済此上も

なく難有仕合ニ奉存候間何卒右之段

御内考被為成被 仰付被下置候様

幾重ニも 奉願候已上

日光御神領下野国加蘇山

石裂大権現社人

荒井靱負

文政八年 湯沢新太夫

丙八月 〃 権太夫

〃 藤太夫

〃 豊後

(一九) 社人村分け願書下書(年号なし)

乍恐以内願書奉願上候

一 私共守護仕候石裂大権現之古事之儀は

火之神迦具土神之御分神に而伊邪那

岐神之御劔之徳ニ生出給ひ武勇之徳を

為持給ふ御神に御座候間岩を茂裂く之

心にて御名を石折命と申神代々此山に

鎮座被為有火之神之御分神故火徳ニ

依而土地を啼し水量を退け万国自

然ニ洲と成国広く成此故ニ此神山を

加洲山と奉申後又洲蘇之説同きニ

仍加蘇山と(之)神社と申候然ニ五十七代

陽成天皇之元慶二年九月依

勅御神位被為授候由藤原時平公

御撰之三代実録ニ詳ニ御座候其砌位

田等茂被為付今に其神領之境祭

場鳥居所と申而御座候而此郷名茂加蘇

野郷と申候而其後下野左野家より出候

久賀式部と申者此加蘇野郷ニ城を築

加蘇山石裂之神領迄茂取郷名を茂

久賀村と改二十ヶ年程罷在候乍然加蘇野

之郷名今茂殘文字茂改加園村久賀村と

二ヶ村ニ相来候又此久賀家茂佐野宗綱之

加勢ニ出元龜三年申五月十六日佐野唐

沢之城ニ而小田原北條之為ニ打死仕此時久

賀式部断絶仕候右神領を被取犯候ニ付私共

無禄ニ相成御年貢畑少々所持仕大坂之

御代之内神職道不絶相勤罷在候其後

御治世と相成慶長二十乙卯年正月十八日

御神君様 御名判之御條目御触渡

難有奉拝見猶又神祇道急度相守罷在

候所寛文六年御檢地御改之時分私共所持之地面名受被 仰候ニ付則上京仕罷在候者官名其節無官之者は平名ニ而持畑名受仕 日光御本坊様御領と相成高百拾八石之内地面神職ニ而兼帶仕此石裂山之儀は日光 御中坊様御持と相成私共同職五人 御本坊様御支配を受神職之故を以毎年正月御門主様え御目見被 仰付候殊ニ 東照宮様御神忌之度々別段ニ御施物鳥目拾貫文下行鳥目拾五貫文配当白銀拾枚其度々 御公儀様被下置候由 御本坊様御役人中様被 仰渡被下置候儀冥加至極難有仕合奉存候是等之故ニ日光目代様御勤役中当日光 御奉行所様ニ至迄御年始当上下大小ニ而古来相勤罷在候又寺社 御奉行所様えも右之

振合ニ而相済来候處ニ近年如何相心得申候哉久賀村地方名主並下役等迄見識を振私共地方所持仕候ニ付地方所持仕候而は平百姓同様に候間平日名主宅え羽織脇差等致間敷此方は地方之取扱ニ御座候杯申次第ニ御座候而 御神君様並御代々様之御條目之御趣意茂相立不申奉恐入難儀至極ニ奉存候依之何卒御慈悲之以思召上久賀村 御門主様御領百拾八石之内ニ而私共五人之持高廿八石余並山林共ニ百姓別を相除御年貢諸役共ニ私共日光 御本坊様え直ニ御上納仕候而上久賀村名主支配人別共ニ相除別組に相成候様被成下候ハ 御神君様 御代々様之御條目ニ相叶私共職道茂相立□□此上茂難有仕合奉存候何卒 御慈悲之以思召日光 御本坊様並ニ日光御奉行所様迄

御声掛り被成下候而右願之通ニ相成候ハ、
私共子々孫々ニ至迄難有忘難有仕合ニ奉存
候間何卒 願之通被成下候様幾重ニ茂御内考
奉願上候已上

編
集
後
記

昨年度は諸々の事情で、残念ながら見送らざるを得なかった紀要であるが、今年度は、専任のみならず、常勤講師の先生方も含めて、多数の原稿をお寄せいただき、第18号・19号の合本として刊行にこぎつけられたことは、まことに喜ばしい限りである。

学内の教員構成も少し変り、新しく中岡典子先生、鈴木順子先生が専任として入られ、精力的に指導に当たられている。お蔭で本短大の英語教育も以前にも増して充実度を高めてきたようである。

一方、これまで五年間勤めて下さった桜井真理子先生が、この三月でお辞めになる。先生は授業のかたわら学内・学外でのスピーチコンテストの企画・指導や、ESSの副顧問として力量を発揮して下さい、大きな功績を残された。非常に残念ではあるが、新しい職場で、教育に研究に、大いに活躍されることを切に望んでいる。

また、本短大創立以来二十年来にわたって、英語・英文学の指導に当たられ、昭和六十一年に退職された近藤久美子先生が、平成二年十月十九日、他界された。大勢の学生を、時には厳しく時にはやさしく、育て、送り出し、そして最後まで研究を続けておられた先生のお姿からは、学ぶべき点が多かった。ここに謹んでご冥福をお祈りする。

さて、私達も、研究や来年度の講義の準備で、多忙な毎日であるが、また次号にも、数多くの論文が寄せられるよう望みつつ、今年度の編集作業を終らせたいと思う。

(「紀要」編集委員会)

東京立正女子短期大学紀要 第18・19号

平成3年2月20日 印刷

平成3年2月28日 発行

編 集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所 株式会社 三 協 社
〒164 東京都中野区中央4-8-9
T E L 03 (3383) 7 2 8 1 (代)

発行所 東京立正女子短期大学
〒166 東京都杉並区堀ノ内2-41-15
T E L 03 (3313) 5 1 0 1 ~ 3

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE FOR WOMEN

Nos. 18 & 19

February 1991

CONTENTS

Systematic Teaching Program of Business English	
for Bilingual Secretary Today	IGUCHI, Midori 11
St. Nichiren's "Nyosetsu, Shugyō-shō"	HORI, Kyotsu 27
Recognition of "Plural Forms" in Reading English	TAJIMA, Fumie 41
An Analysis of Sex-Role Structure in Adolescent Girls I...	YAMAMURO, Miyako 64
Review of the Effectiveness of the Pattern Practice Method	
— A Critique on <i>Eigo-Jugyō Katei no Kaizen</i> —.....	NAKAOKA, Noriko 82
The How and When That Afrikaans	
Affected SAE	SASAKI, Takuji 92
Epistemic Isolation : A Pragmatic Solution of	
Classical Problems in Philosophy	SHUSSE, Naoe 111
Who May Propose a Bill ?	
— A Study of Japanese Diet —	FUKUOKA, Hideaki 128
A Priest's Documents in the Edo Period	
— On the Organization of Religious System	
for Devotees to Mt. Ozaku (II) —	KAMIYA, Takehiro 142

Published by
Tokyo Risho Junior College For Women

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161